

想い出ボールは涙色

石塚 蓉子

私は五十年も昔に一人で暮っていたことのある宇都宮が好きた。首都圏に居た現役時代はなかなか宇都宮まで来られなかったが、退職後、故郷佐野に住まいを移してからは、気軽に上三川にいる友人に会いに行ける。そしてその後にはいつも、用もないのにインターパークのショッピングエリアを覗いてから帰路に着く。高速道路は使わず新4号線から50号線に抜けて後は真っ直ぐだ。

その日、秋晴れの青い空とチャージングな白い雲に誘われて、私は何処へつながらるか分からないけれど、他に通る車のない脇の細い道に心惹かれる。初めての道だが佐野へはこの方向でいい筈だ。まだ陽は高いし、迷ったらいつものようにカーナビを頼ればいいのだから。前後を走る車も対向車も殆んどない田んぼ道を窓からの秋風を味わいながらノンビリ走る。何分位経っただろうか、斜め前方に大きく「獨協医科大学病院」の看板を見る。

そこにはサークルで一つ上の先輩だった山口実が入院していると聞いていた。ワンダーフォーゲル部活動を通して私は山口に色々教えて貰ったり親切にして貰った。そのうち部活動とは別に誘われるようになり、女子高上がり私の私にとって山口は初めてのボーイフレンドとなった。

部活動では山に入つての訓練が多かったが、二人だけの時

は離れた処から、様々な美しい山の姿を覗かせてくれた。空や雲や夕焼けがこれほど綺麗だと知つたのも彼の隣にいるときだった。私から何も言わなくても、疲れた頃には休ませてくれ喉が渇く頃には飲み物をくれた。彼の傍に居るとき私は何も気を遣うことなく、ボンヤリしているだけでよかった。

山口はずっと優しく、彼の心に不安を感じたことは無かったが、先輩後輩から始まった関係はいつまでたつても先輩後輩のままだ、とそう思うようになった。彼を恋する気持ちは日毎に強まっていったが、所謂愛の言葉というものを改めて聞くことがないまま二年が過ぎる頃だった。

駅の雑踏の中で中学時代の同級生男子と偶然出会い、それをきっかけに互いの勉強の情報交換などをするようになった。携帯電話のない時代、文通中心であったが、他県に住む幼馴染みには最初から気軽に山口の存在を話せた。それでも時が経つにつれ、その人は山口よりもはつきりと私への熱意を示すようになり、私は結局何でも話せる元同級生との将来を扱ふ。

山口とは学部も卒業年度も違うので卒業してからは会う機会は全く無くなり、私は首都圏での新しい生活に手いっぱい彼を思い出すことも無くなっていた。

子ども達が巣立ち時間の余裕ができた頃、ワンダーフォーゲルOB・OG会の案内が届く。それまで何度か案内を受けてはいたが、返事も出さずに無視していたのにまだ誘ってくるのかと、初めて出席の返事を出す。宇都宮駅西口近くのホテル会場で、三十年ぶりに懐かしい友どもと再会する。大方の友とは卒業以来であったが、白髪交じりの顔の中に、同じ釜の飯を食べた時代の面影をみな元気に残している。

すぐ隣の輪の中に山口がいた。昔と変わらぬ快活さで談笑の中心にいた。私は近づき二言三言の普通の挨拶を交わしても自由を確かめてから、同期の友達達の輪に戻る。椅子はあっても自由に動きまわられる一次会で懐かしい人々との語らいを流れる時に、山口から連絡番号と二人だけの三次会へのメモを渡される。

二人で何度か行ったことのある宮の橋近くの喫茶店は今は無い。いったん駅に行き上り電車の時刻を確かめてから、駅前のホテル喫茶室で向き合う。山口も幸せな結婚をして、地方公務員として最初は今市に、その後はずっと宇都宮に住むと言う。お互いの家族のことや昔の思い出話などは尽きない。昔と変わらず山が好き、野生動物の写真を撮りに夜中や明け方を狙って山に入ることもある、その写真集を最近本にしたから次回に、と言う。三十年間の空白を飛び越え、昨日の話を続きのように私は彼の話に引き込まれ、笑い転げるのだった。

その後もOB会は四年毎に開かれて、私は毎回出向くようになる。山口に会えるという期待があったことは言うまでもない。立食パーティーのその場で、彼と私は最初は眼で挨拶

を交わすだけで、それぞれの友人達とお喋りを愉しんでから、最後に二人だけで過ごす。彼の昔と変わらぬ心遣いに、私は昔と同じように癒されるのだった。

そんな風に数回のOB会を過ごして、一か月近く前にあった集まりに初めて山口の姿はなかった。「心臓の病気で入院している」と聞く。え、前回他の誰よりも元気そうだったのに。私はOB会以外の場で彼と会ったり電話やメール交換をすることは望まなかった。四年毎の目の前の元気いっぱいの彼が全てだった。心臓を悪くしていたなんて信じられなかった。宴会の場でしつこく病状を尋ね廻るのも憚られて、あの時の私は彼の身体の心配よりも会えないのかという落胆の方が強かった気がする。

あの日「獨協医科大学病院」の直ぐ近くまで引き寄せられて私は車を停める。会いたい、今山口はどんな具合なのだろうか。病床で弱っている姿が私にはどうしても想像できない。このこと顔を出しても、何の用だ、と追い返されるに違いない。奥様がいらしたら「あの人次女だあれ」と後で言われてしまいうだろう。それにOB会からもう何日も経っている、既に退院しているかもしれない。別の友人の一人は重篤な心臓病手術の後、体内にステントというものをつけて今ではスミリングを愉しめていると聞いている。そうだ、きつと元気になっているに違いない、私なんかよりはるかに頑丈、山歩き中の雨風にもあんなに強かった人だもの。

病院の門をくぐって問い合わせる勇氣はなく、通行の邪魔にならないように少し離れた道端に車を停め直す。外に出てしばらく建物を見ながら、何もできない私は両手を合わせ

て建物相手に、どうかお願いします、と頭を垂れる。ドアを開けたままの運転席に成すすべなく戻り、もう一度建物を仰ぐ。家路へ向かいながらそれから後は山口のことが頭から離れない。

明日であの日から一週間という日に、山口の友人で昔の私とのいきさつを聞いていたという人から電話がある。山口が亡くなった、といきなり聞かされる。病院で、亡くなったのはなんとあの日の翌日、とのことだった。他にも「告別式は昨日だった、お知らせするのが遅れてすみません」とか話は続いたが、途中から耳に膜が張られたように、殆んど聞きとれなくなってしまう。背中の寒気が酷くて声が出ない。人様の前では何十年も泣いたことのなかった私だが、受話器の前では涙が溢れ出た。

あの時思い切って病室まで行けばよかったのに。枕元には行けなかったかもしれないが、ドアの外でもひととき一緒に居られた。いや、行かなくてよかったのだ。遠くの他人に過ぎない私が大泣きでもしてしまったら、ご家族はどう思ったであろう。あの日は山口とご家族にとつて何よりも一番大切な日、やはり私など近づいてはならなかったのだ。

山口には最初から最後まで素敵な想い出を貰うばかりだった。一度でも、何かひとつでも彼のために私からしてあげたことがあっただろうか。見つからない。

山口さん、ひどいじゃないですか！遠くに離れて無関係に暮らしていた私の前に突然現れて、私が好きだったあの笑顔で、キラキラの想い出ボールを投げつけたまま、いきなり手の届かない処へ行ってしまおうなんて・・・新しいボールは重

くて悲しくて、持っていたくありません。何処に投げ返したらいいのですか！

鈍色

福富 陽子

マンションの敷地内に救急車とバトカーが来た。廊下で話し声がしたと思ったら数人がいっせいに隣の部屋に入っていく気配がした。

何事かと窓から見ようとしたが、すでに隣のペランダから辺りを照らす光が見えた。ミチオはパソコンを閉じた。しばらくして扉をノックする音がした。

「夜分すみません。少しいいですか？」

ドアの向こうに警察官が立っていた。

「隣の方が亡くなった状態で発見されました」

警察官は、じつとミチオの顔を見ながら手帳とペンを用意している。

「明日、捜査員が来ますので検証の協力をお願いします。名前と連絡先を教えてください」

「私は何もわかりませんが」

ミチオは突然のことに戸惑った。

「隣の方が打ち合わせに現れず、連絡も取れないという人からの通報で管理人さんに合鍵で開けてもらいました。夜なので驚かれたと思います。一応、安全のために戸締りをお願いします」

警察官は口早に言うように帰っていった。

翌日は日曜だった。ミチオは神田の古本屋を見て回る予定

でいたが、そういう雰囲気ではなくなった。隣には早朝から警察が来ていた。管理人に案内され、ミチオの部屋から隣につながるペランダにも鑑識が入り指紋や足跡などを調べていった。捜査員と名乗る男が来てミチオにいろいろと質問をした。

「事件の可能性が高いものと判明しましたが、あくまでも捜査の一環なのでご協力いただけるとありがたいのです」

しかし、質問が進むうちに内容が自分の家族関係や職歴にまで及んだ。ミチオは不審と不安に駆られはじめた。

月曜の朝、テレビをつけると、ワイドショーで隣人の変死事件を取り上げていた。自分が住むマンションが生中継で映し出され奇妙な感覚になった。カーテン越しに外を見ると駐車場は報道陣であふれていた。

月末なので会社は特に忙しい。納品の確認や手配もある。ミチオは車での出社を諦め、裏手の通用口から出るとバス停まで急いだ。

「うかない顔をしているな」

会社に着くと同僚のヨコタが声をかけてきた。ヨコタには昨晚電話をし、隣人が亡くなったこと、自分が警察から簡単な取り調べを受けたことを話していた。

「疑われているようで気分が悪い」

「今朝のテレビ見ていたら、隣の人って指揮者の堂間なんとかって有名人だったんだな。知ってたか？」

「いや、知らなかった。朝早くから報道関係者が集まっているのはそういうことか」

そこへ課長が来て、話があるという。

「隣の件、大変だったね。さっき警察から君の勤務態度とか最近の勤務日程を教えてほしいと会社に連絡があった」

課長は大げさに困惑した顔をした。

「こういう言い方は悪いと思いますが、隣に住んでいるというだけで、警察が私の勤務状況などを職場に聞いてくるのはどうかと思います。まるで犯人扱いのような……」

ミチオは苛立ちを隠せなかった。亡くなった隣人が有名であろうと無関係だし、まったく迷惑なことになったものだと自分の気持ちを課長にわかってもらいたかった。

「しかし、いよいよ会社にまで警察が来るとなったら、体裁が悪いのはわかるよな？」

「私は無実です。意味がわかりません」

「ミチオは青ざめながら精一杯応えた。

「社内でも特に君は真面目で誠実だ。だがなあ、妙な噂が立つと会社全体に差し障りがあると上が騒ぎ出しているんだ」

課長はすでに他人の顔つきをしている。

「任意でもなんでも同行を求められて、社員がバトカーに乗せられるようなことがあったら会社としては非常にまずいんだよ。——私も立场上、こんなことを言い渡すのは辛い。とにかく休んでくれ。この件が明らかになるまで出社しなくていい。休暇の申請は私が代わりに出しておく」

保身に走った会社そのものがとても遠い存在に思えた。

テレビでは、隣人は大量のアルコールを無理に飲まされたことによる窒息死の疑いが濃いと報道している。また、堂間はもともと資産家だったが、かつてギャンブルで億を超える借金を背負ったなど、ワイドショーの話題としては事欠かなかった。

翌日、警察からミチオに改めて参考人として話を聞きたいと連絡があり、ミチオはバスで警察署に向かった。会社の前を素通りする束の間、怒りとやるせない気持ちが交錯した。

「あなたのお父さんが経営していたガラス工場は、二十年前に倒産しましたね」

いきなり、捜査員が食い入る視線でミチオに尋ねた。

「今さら実家の倒産と隣の件、関係あるのでしょうか？」

驚いたことに、倒産後ミチオの父親が営むガラス工場と自宅のある敷地を買い取ったのが隣の堂間だという。

「そんな偶然が——」ミチオは固唾を飲んだ。

ミチオの家は、東京の下町でガラス製品を作る工場を営んでいた。祖父の代からグラスや花瓶をはじめ、手の込んだ装飾を施したガラス製品を手掛けていた。中でも江戸切子の伝統技術を取り入れたショットグラスは海外での評価も高く、業界ではその名も広く知られていた。技を熟知した職人も十名ほどいて、会社の経営は安定していた。

ところが、父が信頼していた職人頭が職人全員を引き連れある日突然工場を辞めていった。まもなく職人頭は隣町で同じようなガラス工場を立ち上げたのである。技術も顧客もそっくり持っていかれた。

職人たちがいなくなった工場はがらんどろのようにだった。

注文された製品を揃えるため祖父や母も手伝い、父は何日

も夜を徹して作り続けたがすべての納品には追いつかなかつた。電話越しに何度も頭を下げる父の姿は子どもだったミチオの目に焼き付き、いまだに忘れられない。

それからじきに信用と稼働力を失ったまま工場は閉鎖に追い込まれた。

「こういつた事件を扱っていると、偶然というか因果というか、妙な糸のつながりを目の当たりにすることがあるんですよ」と捜査員は姿勢を変えながら呟いた。

警察によると、当時、堂間は道路を挟んだ高台に屋敷を構える予定でいた。そこから目につく古ぼけたガラス工場が景観の邪魔だという理由から、買い取ってすぐに更地にしようという。「景観の邪魔？」ミチオは話を聞きながら自分の耳を疑った。捜査員の鋭い視線に追われながらミチオは座っているのがやっとだった。その事実は衝撃だった。

「あなたはそれを知っていた？」

「いいえ。——初めに聞きました」ミチオは胸の奥の軋みを押さえられずにいた。

「そうですね。当時、土地の売買にあたって代金も支払われたことだし、売った側としては恨む理由は無いですよね」

沈黙の後、湯呑み茶碗を引き寄せると捜査員は乾いた唇をまた動かしした。

「ぶしつけな質問ですが、その後ご家族は？」

「町田に越しましたが、祖父も父もあれから数年のうちに病気で。母は健在で今は妹夫婦と同居しています」

「お気の毒でした。——では、これで終わりましょう。帰っていただいて結構です」

眼光炯々としていた捜査員の目もとが緩んだ。

聴取からの帰り道、ミチオは天を仰いだ。東京の夜空を久しぶりに見た気がした。愕然とする話を聞かされ、まなじりを決し過ぎた反動か、涙がとめどなく頬を伝ったがそれを拭う術を知らぬ魚のように立ち止まったまま泣き濡れていた。重い足取りで部屋にもどるとヨコタから電話があった。

「呼び出されたから警察署に行ってきたところだ」

「そうか。いろいろ聞かれて疲れたろう。真犯人が捕まったから、そんなところからは引越したほうがいいな」

会社の独身寮代わりに斡旋されたマンションだったが、入居を希望する者はほとんどいなかった。

「俺が住んでいるアパートに会いよ、空室あるし」

「できるだけヨコタの部屋から遠いところを探すよ」

「なんだよお、それ」聞き慣れた笑い声にミチオの気分は安らいだ。友だちっぽいものだなと素直に思えた。

あれから再度、ミチオは警察に呼ばれた。参考人としての事情聴取だから拒否もできたが、犯人逮捕に相当難航している様子がわかっていたから、呼ばれば従った。

課長から出社許可の指示はいっこうに無い。

「明日休みだから、仕事帰りに寄る」とメールがあり、万年床を片付けているとヨコタが缶ビールを抱えてやって来た。

「会うのは二週間ぶりか」ヨコタは相変わらず陽気である。

「もう一年も会っていない気分だ」

「長く感じるものだな」ヨコタはネクタイをほどいた。

「——俺さ、会社、辞めるかもしれない」

「何を言ひ出すんだ。今辞めたらお前、負け犬だぞ」

「この件でわからなくてもいいことまでわかってしまった。」

勝ち負けじゃなくてさ」

「まあ、己のことはどのみち己で選ぶしかないが、誰かから
転がされる石にはなるなよ。転がるなら自分から転がれ」

ヨコタはビールを飲みはじめた。

さんど川

鳴 均三

むかしむかし「たちぶ村」という所の、村はずれに庄屋の屋敷がありました。

裏山には雑木林が延々と続き、西側に回り込むと赤松の林が枝を広げ、サワサワと風に揺れていました。そして炭を焼く煙が、いつも昇っていたということです。

その雑木林はひと口に「百町歩の山」と村人たちに語られていました。それだけ広かったのです。

また、山の中腹に立つ庄屋の家には、昔から生け垣が植えられ、周りを「からたち」が囲んでいました。このからたちのトゲは生き物を近づけなかったと言われています。

この家からは、ずーっと下の篠やぶの中を流れる「さんど川」を見ることが出来ます。

曲がりくねって流れるその川は、ついこの間まで一年に三度は大雨で荒れ狂い、田畑に大きな被害を与えてきました。「さんど川」の名はそのときからの呼び名だったのです。

実は先代の庄屋が幾度も村役人に工事の必要性和、御上からの工事費の補填を願っていました。所謂「公費負担」のお願いです。しかしこれは認められませんでした。

その後、庄屋は長い心労が続き病没してしまいました。代替わりした若い「藤丸」が父の意志を受け継ぎ、この暴れ川の治水に情熱をかたむけました。

ある年の夏、豪雨が二日二晩続き、工事中の堤防の一部が崩されてしまいました。村人のなかには諦めの気持ちが生まれてきたのです。

しかし藤丸は屈しませんでした。諦めませんでした。反対する村人たちを説得し、燃えるほどの情熱をもって、毎年少しずつ工事を続けて、ついに完成させたのです。

この治水工事には、多くの村人が労働を惜しまず協力しましたが、その経費・材料費は藤丸が提供し続けました。

この期間中、山の中腹にあった庄屋の畑が売られ、そのお金が工事に使われたということです。

暴れ川は長い堤防が続き、石垣と周りに植えられた篠や灌木によって、今では穏やかに流れています。

村人達は毎年の土木作業に、ほとほと疲れ果てていましたが、工事の完成とともに若い庄屋に感謝しました。最初は工事に反対していた者も、今では感謝に変わりました。

今、川の両脇には田んぼと畑が緑に覆われ、点在する民家から炊煙が上がり、今年も豊作の期待が膨らんでいます。

さて、今では庄屋の名が「さんど川の藤丸」として、遠くの村まで賞賛の言葉が響いていますが、実は長年の治水工事中には、こんな出来事もあったのです。

実際の工事にはたくさんの材料、「杭や青竹」「石や土砂」それに「荒縄や丸太、植栽用の木々」・・・本当に多くの材料と人手が必要だったのです。

また、道具や人夫は数カ所に分けて配置され、それらを指図する現場の「親方」の技術も必要だったのです。

そして人が集まれば当然、食糧の調達と賄い役の配慮に迫られ、藤丸は八里ほど離れた遠くの村から、働き者の母娘を雇いました。母親の名は「キシ」、娘の名は「かわも」と言いました。

親子は大きな釜で飯を炊き、決められた時間に定められた通り準備しました。明るくて真面目に働き、米や味噌を大切にし、いくらかでも節約しようとする母子の姿は立派でした。

また怪我をした者の手当や、時には汚れた衣類の洗い物など骨身を惜しまず働き、村人に信頼を得て行きました。

ある時、藤丸が賄い小屋をのぞくと、二人は食事に芋を食べていました。米麦は働く村人に与え、自分たちは芋だったのです。

親子は藤丸が畑を売って工費に充て、自分たちもそれで雇われていることを知っていたのです。この村々全体に役立つ大きな事業を成し遂げようとする藤丸の高い志に胸を打たれたのです。

かくして、若き藤丸と心を一つにしてこの偉大な工事の完成を二人は願うようになっていきました。

それから二人を意識し始めた若い藤丸は、少しずつ娘に惹かれて行きました。飾らずそのない動きに藤丸の心は傾いて行つたのです。段々と高まりゆく熱い思いは藤丸にとつてどうしようもなかったのです。

この思いは娘の「かわも」にも伝わり、純真な愛が芽生えました。この工事のために懸命に働き続ける藤丸の姿が、いつしか自分の胸の内に充満していくのです。そんな自分の心に戸惑いつつも思いは膨らみます。

こうして二人は恋に落ちました。人の目を忍んで手を取り合う仲になって行つたのです。

しかし、娘には母親がおり、藤丸にも気位の高い母がいました。いつまでも隠し通せるものではありません。

噂は広まり、ついに二人の母親の耳に入りました。特に藤丸の母親は猛反対でした。藤丸が留守の日に娘を呼びだし、ひどい仕打ちをしました。からたちの枝を娘の腕に押し付け雑言を浴びせました。

その後も、幾度となく嫌がらせが続きましたが、娘はじつと耐え、こらえました。

そしてついに治水工事完成の日、村人が集い、ささやかな祝いの儀を催しました。

それを見届けた「かわも」は、目にいっぱい涙を溜め、その日の夕刻、密かに川よどみに身を投げ、今までの数々の思い出とともに沈みました。

その夜更け、突然の豪雨とともに雷が鳴り響きました。川の水かさが増え、濁流が押し寄せました。

しかし工事が完成した「さんど川」の堤はびくともしませんでした。荒れ狂った水を制御して、下流へと導くこの「堤防」は見事なものでした。

人々は雨の中をこの川の両岸に集まり歓声をあげました。改めて工事の完成に胸を打たれました。それは成し遂げたという村人達の堂々たる心の充実だったのです。

しかし一方、戻らぬ娘に、その母「キシ」の心は乱れ、病に臥せってしまいます。

ようやくこの事件に村人が気づくと、村中は大騒動になっていきました。

これを知った藤丸の悲しみは想像以上のものでした。ハラハラと涙を流し、幾日も食も摂らず、一日中手を合わせていたということです。

身を焦がすほどに愛おしい「かわも」を想い続け、気も狂わんばかりの日々だったのです。

それから、ひと月も経たないある夜、その川よどみに近い土手に白い大蛇が現れ、ずっと棲み着きました。

そしてその大蛇が陸に現れるとその後、三刻を経ずに不思議に雷雲が発生して雷鳴が轟き雨が降り出しました。

まるで大蛇が雷雨の発生を予告し、村中の者に知らせるようでもありました。

また、橋の上から覗くと、澄んだ川底に白いものが動いて見えるときは嵐がくる予兆であったと言います。

その後、藤丸は深い悲しみのなかを、母親とともに屋敷の周りの「からたち」の木を伐り、すべてを燃やしました。

娘の名「かわも」を工事の功労者として石に刻み、堤防に建てました。そして母親「キシ」とともに、娘が使っていた

「杓文字」を川に流して供養につとめました。

それからというもの、川が暴れるということがなくなりました。さんと川は「杓文字川」と呼ぶ人も増えてきたということです。

そして屋敷も畑も失い、裸一貫になった藤丸が、ひっそりと川に近づいた時には、決まって白い大蛇がどこからともな

くスルスルと現れ、足許に寄って来ました。藤丸もそれに応え何かを話しかけました。藤丸は愛しい「かわも」の化身だと信じていたのです。

知り合った 炊き出し小屋の片隅で

田畑を守る 二人の情熱

愛を育み 信じ合う

いま訪れる 温もり

相想う 心重ねるこの胸は

流れる雲も ひきちぎるほど

川原の草も 焼き尽くす

二人の熱愛 煌々と

寝ても夢 覚めても夢のこの心

震える手と手 肩抱き合って

認めてもらえぬ この愛を

知って深みに 身を投げる

ああ、かわもはいずこ

かわもは いずこ

愛するひとよ いまいずこ

父と子の絆（天国の親友、福井修平に捧ぐ）

高杉 治憲

（一）『昭和四十九年、父敏雄五十二歳、修平二十八歳の隔絶』
「修平、うちの会社は世襲制ではない。だから、お前が会社を継ぐことを気にすることはない」と、突然父から断言された息子は強い衝撃を受けていた。

（これまで親父の後継者になることが唯一僕にできる親孝行だと信じて大学を卒業し同業大手の鈴木塗料に見習い入社して五年間、自分なりに一生懸命努力してきたのに。今更それはないよ）修平は声にも言葉にもできない憤りを心の中で叫んでいた。しかし、暫くして我に返って口から発したのは自分でも意外なほど冷静な表現だった。

「お父さんがそういう考え方と方針なら、僕はいざれ好きな道に向かって進路を変更するけどかまわないね」

「お前の人生だ。自分のやりたいことをやりたいようにやればいい。うちの会社は本当に実力のある人間だけがリーダーになる。それが俺の方針だ」

「よく分かった。一つだけ訊くけど大学卒業前に僕が鈴木塗料に就職することを相談した時に賛成したのはどういう気持ちからだったの？」と、父の本心に念を押すために質問した。

「お前が自分で選んだ会社だから反対しなかっただけだ。勿論、鈴木塗料は大手で将来性もある。就職したその先は修平が自分で開拓するものと考えた」と、父は後継を期待して賛

成したのではないことを淡々と応えた。

福井敏雄は、熱血の若き起業家として昭和三十三年に東京都葛飾区小菅町に特殊塗料専門メーカー、武蔵塗料株式会社を創業し代表取締役社長に就任した。高度成長真只中の日本の新しい中心的需要である電気製品やマイカー、マイホームなどに使用される特殊塗料を研究開発して着実に業績を伸ばし五年後には工場を拡張して本社を池袋に移転した。それでも未だ年商十億円と弱小企業の域を脱していなかった。仕事上では精力的で威厳があり常に存在感を漲らせていたが、家庭では優しい良妻賢母の妻と一男二女に恵まれた良き父親であった。三人兄妹の一人男の長男として生まれた修平は父からするとリーダーシップとはかけ離れた人の良いマイペースの呑気な若者としか見えていなかった。

その伏線となったのは、修平が大学三年生に進級できずに留年したことだった。立教大学法学部に学んでいたが、体育会洋弓同好会の主力選手として活躍し大学リーグでは二部から一部昇格を果たし、学内でも評価され新たにアーチエリートとして承認されたのも修平の尽力の賜物だった。しかし、その代償のように、単位不足で留年となってしまったのだ。

「大学生は本来、文武両道でなければ本末転倒だ。進級できないのだから学費を打ち切る」と、父は激怒し自分がアルバ

イトで苦学しながら大学を卒業し成績優秀だったことを匂わせて厳しく叱咤激励した。修平が二時間余り土下座して詫びても許されなかった。その後、母と妹たちが共に土下座して取りなしてくれたお蔭で事なきを得たものの後に父から後継者に相応しくないと烙印を押される発端となっていた。

やがて、後継者として戦力外通告された修平は父の本心を知ったことで覚醒し自分の道を熟慮する機会を得たのである。(これまで二十八年の人生で、生涯携わる職業について深く考えたことはなかった。ひよっとすると親父の決断のお蔭で後悔しない生き方を見つuckerチャンスを得たのかもしれない) そう考えると修平の中で不思議なほど迷いが消えた。

「よし、好きな住宅産業で認めてもらう為に先ずインテリアに関する専門知識を徹底的に学ぶことにしよう。急がば回れだ」と決めて、先輩から職業訓練大学校講師を紹介されインテリアデザインを学ぶことにした。それは運命的な出会いだった。世界的に有名なインテリアデザイナー故剣持勇氏の弟の剣持博先生に師事する絶好のチャンスに恵まれ一年間デッサンからインテリア設計まで徹底的に叩きこまれた。たった一年で師匠からインテリアデザイナーを薦められるレベルにまで到達した修平はその二年後、鈴木塗料を退職し選択したのは大手照明会社のセールスエンジニアの道だった。当初、商品開発に従事していた修平にある日突然社長直轄の宣伝企画室の責任者に抜擢されるといふ幸運が舞い降りてきた。「社長、私は広告宣伝の経験が全くありませんがそれでもよろしいのでしょうか」と修平が尋ねると、

「福井君、人間誰でも二十八や二十九歳で経験できた仕事はそれほど多くないものだ。経験がない君だからこそ過去に縛

られずに挑戦できると期待している」と、明かされた。しかも、社長は修平を選んだ三つの理由を説明してくれた。それは第一に修平が、「社内外の人々と良好な関係を築き上げる要素を沢山持ち合わせていること、経済的に恵まれて育ちお金に執着せず誘惑に負けないタイプであること、そして、自分の主義主張がしっかりしていて、上層部の指示命令にもそれを鵜呑みにせず、自分の頭で考え意見できる人間であること」と評価された結果、修平は十億円を超える広告宣伝費を自由に使える重大な任務を任された。修平は、このチャンスに開眼し会社のあり方や経営者の信念と方針を表現するのが広告宣伝であることに気付いた。毎週開催される経営会議にも出席して資金繰りや出店計画など経営の課題や戦略を具体的に勉強する機会を得ることができたのである、そして、それからの十年の経験こそが、後に父の武蔵塗料の経営トップとして大飛躍するための基になることはまだ知る由もなかった。

(二) 『父との隔絶から十七年後のヘッドハンティング』

「修平、うちの会社は世襲制ではない」と、昔と同じことをいった父が少し緊張しているように見えた。

「話してそのこと？それなら分かりすぎるほど分っているよ」修平は十七年前のことを思い出しながら笑顔で応じた。

「そうだろうが、この後の話をよく聞いて欲しい。実は、改めてお前の独創力とリーダーシップを見込んで我社の次期社長に迎えたいと考えている。いや、是が非でも来て貰いたいのだ」という父の声も言葉もいつもと違っていた。あの時、後継者として考えていないと父が断言し、父子が隔絶してから十七年が経過していた。この父から息子へのヘッドハンティングの話が始まってから時々二人きりで話し合うように

なりこれが急速に永年の空白を埋めていった。

「ところで今回は世襲制復活ではないだろうね。世襲だったら僕の方からお断りだよ」と、今度は修平が真顔で言った。

「この十七年のお前の仕事ぶりを調べさせてもらった。鈴木塗料在職中に人一倍塗料の基本を習得しながら、休みの日は朝から晩まで、平日は夕方から深夜まで寝る間を惜しんでインターネットデザインを勉強し恩師の剣持先生が助手にしたいというほど勉強したと先生から伺った。ヤマカワ照明の社長からも内々に『ご息にはいずれ我社のトップを目指してもらおう』と言われたことがある。お前ほどの男はうちの会社にも同業他社にもいないことがよく分かった。心底実力を評価してのヘッドハンティングだ」と、真剣な懇請の眼差しだった。

(三) 『早過ぎる旅立ち』

三カ月後、修平が武蔵塗料に入社して配属されたのはこれまで経験のない経理部門の部門長だった。始めは殆ど書類に目を通すだけの日々だったが、修平はこの恵まれた期間を活かし徹底的に本を読んでやろうと考えて実行した。後に営業本部と製造管理部門、広告宣伝部門、研究開発部門を再編成する際にこの時に学んだことが大いに役立ったのである。ところが、それから半年ほど経過した頃、父は体調を崩し入院した。本人は既に重病をどこかで察知していたらしく修平を次期社長に迎えたことを心から喜び満足していた。そして副社長と修平を枕元に呼び厳命した。

「自分が会長になり副社長を暫定社長にするが、自分に万一のことがあれば間を置かず社長が相談役に退き、福井修平を次の社長にして体制を一新すること」と、宣言し三者の覚書を作成したのである。

「修平がこんなに素晴らしい能力をもっていたとは、本当に驚いたよ」と、父は病床で何度も母や修平の妻英津子、他家に嫁いだ二人の娘に嬉しそうに語った。いよいよ、これから父と子の絶妙なコンビで会社経営を存分に発展させるスタートを切るはずだった。が、父は待ち望んだ念願が叶った安堵感からか死期を早めたかのように七十歳で逝ってしまった。

修平は、その後亡父の見込み通り社長として飛躍した。パソコン、携帯電話、AV機器、光学機器用の塗料の製造販売が大成功したのだ。携帯電話の塗料では国内シェアで六〇%を超える勢いとなった。さらに世界中に向けてシェアを広げた。その後十七年間で売上は三〇〇億円を超え、海外進出は十五カ国に及び更に増え続けた。二〇〇九年には複数のテレビドキュメンタリー番組でユニクロや日本マクドナルドと肩を並べて日本の勝ち組二十社の一つとして紹介された。新進気鋭の経営者として注目を集めた修平はインタビュで未来に向けた可能性を示して、「尊敬する人は亡き父です。私に世に出るチャンスを与えてくれました。その後起きた全てが自分が育ててくれたと言えます。自分がそうしても良かったようにこれから全ての人に何度でもチャンスを与え続けて未来の住宅産業、電気、通信、電波工学と宇宙工学分野に貢献する企業にします」と、目を輝かして語った。修平は、六十五歳のその日まで生命の全てを燃焼して疾走り続けた。

(修平、来るのが早すぎたぞ。でも、人の何倍も飛躍成功して見事だった)

(お父さん、こちらに来る前日、僕たち夫婦の初孫が生まれだよ。お父さんたちにとって曾孫だね)

絆で結ばれた父と息子の天国の会話である。

末裔地主

紙屋 里子

金田健次は三十歳前から定職を持っていない。いつかパーンと大もうけをするつもりだがなかなかそんな機会に巡り合えず三十六歳になる。いい年になったなと思うが、生きた年月だけ歳は取るものなのだ。

昼時になった。今パチンコ屋の裏スタンドに並んでいる。

「ハイ、つぎの方」と小さな窓から係員が呼んだ。

「これだけだ。現金に換えてくれ」

「はい、分かりました。一寸待って下さい」

何故かチラリと顔を見てから健次の持ってきたパチンコの球を測っている。

「一万九五〇〇円です」とつげた。

「何だ、今日はそれだけか。しけていやがる」と言いながらお金を受け取った。

健次の年なら普通何処かの会社か工場などで昼ご飯を食べべてはいるはずだ。今日は火曜日なのに朝の九時過ぎから十二時頃までパチンコをやっていた。二十代の終わり頃から、パチンコに傾いている。

生暖かい風が吹いてきた。冬がようやく終わり春めいてきたのだ。金を懐に仕舞い自動車で家に帰って来た。昼時なので道は空いており走りやすい。自宅に戻り車庫に車を仕舞い玄関まで来た。

江戸時代飢饉があつた時、住民の救済をせよと、命令が出て三年間かかって建てさせた家なので大変に大きい。地主制度がしっかりしていた頃は二十五人暮らして「東の大尽」といわれていた、敷地も減茶苦茶大きい家だ。

「おい、お袋、今、帰ったぞー」

小さな声で言い、そつと戸を開けて家に入る。パチンコを三時間近くもやった上に何も飲み食いしていなかったからよけいに疲れているのだ。同じ姿勢で指先だけ動かして肩が痛く目もしょぼしよぼし出した。同じ頃に入った周りの客はまだ指先運動を夢中でやっていたが、今日はここまでこれで限界だと思つて帰ってきた。儲けるのは儲けたいが、疲れと腹ぺこには勝てない。

居間に上がり食卓の前に座った。年取つた両親はもう食事を終えてテレビを見るときもなく見てうつらうつらしていた。家ではテレビが一日中点いている。テレビは一方的だが、点いていると家の中が賑やかで寂しさを和らげるのだ。健次が座るとお袋が目を開けた。

「お帰り、儲かったかい」

暢気な調子で話しかけてきた。もう仕事をしなくなつていぶんになり、パチンコで儲けるだけになっている。

「ああ少しだけな」とこれもいつもの調子。

「それは良かった。先に昼を済ませたよ。お前まだかい」

ニコニコしながら話してくる。もう、健次の日常に慣れているので、あれやこれや言わずに気楽に喋るのだ。

「食べてくつろいでいたのか。すまないね。俺、まだだよ」

「直ぐに用意をするよ。待っていておくれ。どっこいしょ」
かけ声をかけて台所に立った。なんだかしんどそうな様子でゆっくり動いている。この頃は、直ぐによいしょとか、どっこいしょとかかけ声をかけて動いている。今は食べた直ぐ後なのでしんどいのだろうが、もう歳なのだ。健次が腹減っているからしかたないと思って用意してくれるんだが、一つには母親の習慣のようにもなっているのだ。

ボンヤリ座っていると、まどろんでいた親父が目を開けて呟いた。

「儲かったかい」とお袋と同じことを聞く。やっぱり夫婦だ。

「まあまあだな」と軽く答える。

パチンコから帰るといつもこの調子だ。他に聞き方はないものか、俺だったらどう聞かかと思ひ、やっぱりこんなものかも知れないとつまらない事を考えていた。座っていると眠くなりうつらうつらした。

遠くで誰かが呼んでいるような気がした。誰が呼んでいるんだらう。あの声は、誰の声だらう。聞いたことがある声だが、思い出せないままうたた寝をしていた。

すると急に部屋の隅に設置されている電話が鳴ったので目が覚めた。受話器を取ろうとすると、親父が先に取った。歳を取っているのに驚くべき早業だ。

「もしもし、ああ金田だ。円香、なんだって。えっ、何だかって……」

声が大きくなった。耳が悪いので電話は聞きにくいようだが今日はなおさらのようだ。しばらく大きな声で話していたが、荒く受話器を置いた。親父が受話器を置くのが荒いことは今までになかった。

「大変だ。貞三が入院したんだと。今妾の円香が知らせてきた。様子を見に行つてきてくれよ」と吃驚したのか、慌てたように言いまたドツカリと座り込んだ。

親父は入院は、とても恐ろしいことだと思っているのだ。入院するということは今もう終末だと思っている。事実、親父達の年代の人はそう思っている人が多い。

「いつも元気な叔父貴なのに、急にどうしたんだらうな」

余りに急なことなので一寸直ぐには信じがたい気がした。

最近出逢ったばかりなのに。親父が溜息をついた。

「円香の話では、心臓が痛くて息がでなくなつたから救急車で病院に運ばれたんだと」

困つたことだと言わんばかりに、また大きく息をした。でも七十五才は若くない。こういうこともあるかも知れない。

貞三大叔父は、父、権十郎の叔父だ。だが叔父といつても、わずかに五歳しか違わない。昔は早く結婚したので歳の余りちがわぬ叔父と、甥や姪などがさらにあつたようだ。

子供の頃、二人で遊んでいると兄弟と間違われたという。兄弟のように喧嘩もしたという。大叔父は今七十五歳で宝石商を営んでいる。

円香は大叔父の妾だ。三十五歳だと聞いている。大叔父は四十歳も歳の違う妾と暮らしているのだ。よく気持ちがあ合ものだと驚く。四十歳違いといえ、親子以上の年の差があるのに、どうやって夫婦として気持ち合せているのだから

うと思議だ。一度も結婚したことはない健次には、いささか合点がいかないが、男女の仲の妙だろうか。聞いて見たいとは思っていたが、聞いて解るものではないかも知れない。

「救急車で運ばれたって、言っていたのか。大変だな。昼ご飯を食べたら様子を見に行ってくるよ」

大叔父が大変なのだが、腹が減っては戦は出来ぬ、まずは腹ごしらえだ。

「ああ、そうだな。頼むよ」

親父は座っていたが、やれやれというような顔になり、また、横になった。食べた後は一眠りしないと、身体が持たないのだろう。お袋が、台所において話が聞こえたのか、大急ぎで昼食の用意を持ってきた。

「貞さん入院したんだって。大変だ。それじゃ早く昼ご飯食べておくれ。後で行かなくちゃならないから」

今日の昼飯は、畑で作っているホウレン草の茹で物と鯉のたいたものだ。この辺りでは鯉のたいたものを『なまり』というが、どうしてかは知らない。

「ホウレン草、なかなか旨いよ」

「今朝、採ったところなんだよ。柔らかくて甘いだろ。なまりもおいしいよ」

「なまりはもさくさしているよな。一寸食べづらいよ」

「生魚がなかなか手に入らないから仕方ないんだよ」

折角お袋が作ってくれたものなので、文句をいいながらも食べた。腹が減っているのになまりでも食べられるのだが、旨くはない。

健次は家では草取りをしたり、木の剪定をしたりして過ごしている。手先が器用なので家の修繕などもする。器用貧乏

とはよくいったものだ。だが器用なだけで、習いに行ったり親方について修行した訳ではないので、剪定にしても、修繕にしてもプロの様な仕事は出来ない。自分の家の一寸した壊れを直す程度である。所詮は素人のやった仕事に過ぎぬが年取った両親はよろこんでくれる。

...

〃神様〃 は優しいそして悲しいお方であった 安西 悠子

日光街道の杉並木は、今市宿で一旦、途絶え、街の屋並が続く。ここに、〃今市報徳二宮神社〃が鎮座する。勿論、御祭神は、二宮尊徳翁である。

街はずれから再び、杉並木が東照宮に向って連らなりはじめる。そのあたりに、幕府の役所があった。現在は、その当時の建物は失われているが、土地だけは、そのまま残り、今、二宮尊徳記念館が建てられている。玄関前に、尊徳の銅像がある。成人した彼は、身の丈、一八二糶、体重、九四匁の堂々とした体軀で、容貌は厳しく、口をきりりと真一文字に結んでいる。尊徳は、没後、その功績により、〃神〃となった人物なのだから、銅像に現わされている様に、厳しい立派なお方であつたらうと想像する。

ところが、他の人々が引き受けない農村復興という難事業を成功させた尊徳は、銅像の厳しい表情からは想像もできない優しい心の持ち主であつた。

その事は、次の史実によつて証明される。

第一は、小田原藩主、大久保忠真の命令で、下野国物井村の桜町陣屋に赴任する事になるが、その道中の出来事から、尊徳の心優しさを窺い知ることが出来る。

桜町陣屋での農村復興事業は極めて困難である事は、金次郎が一番よく知っている。よつて、貧しかった少年、青年時

代に失つたものを粒々辛苦して取り戻した田島、家屋、家具、什器を売り払い、その金子を復興資金に当てようとしている。厳しい仕法事業への出発である。小田原栢山村を後に、東海道を東へ下る。緊張した生活に向つての旅の最中であるのに、江の島に着くと、宿をとり、若き妻、なみと、伴の、弥太郎に見物をさせている。御馳走を振舞つて、二人を楽しませている。

又、江戸に着くと、少しの間、滞在して、なみに、江戸見物をさせている。なみには、今までの平和な豊かな生活を捨てさせ、難事業に参加させるための東下りであつたから、なみにとつて、この江戸見物が、これから訪れるであろう困難な生活への不安を軽くしたことであらう。

又、尊徳の伴、弥太郎の妻、鉸の語るところによると、次の様なことがあつたという。史料に残っている事柄ではないが、大溝村に住む、鉸の御子孫の語るところによると、

「御父上様（尊徳のこと）は、私（鉸）を大層、可愛がつて下さり、お前（鉸のこと）は、絹の着物を着てもよいからね。とおっしゃつて下さつた。又、正月には、お年玉を下さつた。」

と、いうことを、故郷の親戚の人に伝えていたという。次には、この様な事実もあつた。

桜町陣屋を管理する人々への思いやりである。大久保家の分家、宇津家の領地を桜町陣屋にて復興を成功させた。金次郎の業績を知った幕府は、彼を幕吏として抜擢した。従って、住居も、宇津家の桜町陣屋から幕府の陣屋へ移らなければならぬ。即ち、桜町陣屋から真岡東郷陣屋への移動である。

真岡東郷陣屋は、古くから鎮座する大前神社と、道路を挟んで相對している。その間には、五行川が流れている。この川は、大前神社の傍を流れると、下流は、南の方に大きく曲り、桜町陣屋とは別方向に流れていってしまう。尊徳は、桜町陣屋時代、その領内の灌漑用水の水不足に大層な苦勞をした。今は、自分は、幕府の役人であるから、宇津家所有の三村、物井、横田、東沼村の灌漑用水については、もう関係は無い。けれども、尊徳は、新しく赴任した真岡東郷陣屋脇を流れる五行川の豊かな水を、前任地の三ヶ村へ送りたかった。大前神社の傍を流れる五行川に堰を築き、五行川の水を分水した。この用水を「穴川用水」と言う。穴川用水は、満々と水を湛え、桜町陣屋の支配地の田圃を潤してゆく。いつまでも、前任地の農民と農地を案じている。

幕吏に抜擢された金次郎は、尊徳という諱名を用いる。幕府の命令で、「日光御神領荒地起返し」を行う。この時、尊徳は、真岡東郷陣屋に住んでいたので、仕法を実施するには日光奉行所へ赴かねばならない。真岡を出発して、鬼怒川を渡り、宇都宮伝馬町から日光街道を北へ辿る。日光には、住居も無いかから、日光奉行所の隣の桜秀坊を仮の住居として、仕法を行う。

尊徳は、よく病気に罹る。日光にも医者居るけれど、なかなか恢復しない。役人は、真岡東郷陣屋に住む妻の歌（な

みは、この頃、歌と稱している）を日光奉行所へ呼び、桜秀坊にて看病させる。病が恢復しない。役人は、真岡東郷陣屋に戻り、養生せよ、という。この様な不自由な生活をしている尊徳の様子を見て、役人は、日光御神領内の今市に役所を造って仕法の指揮をしたらよかるう、と言う。けれども、幕府はその費用を出してくれない。見かねた、相馬中村藩主、相馬様が、尊徳への恩返しにと、役所を、今市に建ててくれた。二宮家は、やっと、尊徳夫妻と、尊行（弥太郎）夫妻、二代が揃って住める様になった。今市の役所に移ってから、尊徳は、今まで以上に、病気がちになり、壬生藩医、齋藤玄昌の診察、投薬をうける。

安政二年（一八五六年）七月二十一日、尊徳は、例年の暑中見舞状も書けなくなり、倅、尊行に代筆させるほど、体力が衰えてしまった。この様な体でも尊徳は、前々任地、即ち、宇津家の領地、物井、横田、東沼の三村の復興状態が気がかりでたまらず、心の底から案じていた。尊徳は筆をとることもできない身体なのに、宇津家の役人で、桜町陣屋に住む、村田与平と、岩本善八郎に、長い手紙を送っている。

「桜町御知行所の横山氏（宇津家の一族、尊徳が桜町陣屋を去った後は、この知行所を治める人物。子孫は、現在も桜町陣屋附近に居住している）が、永住していらっしやるので、今後の仕法などを話し、三ヶ月は、何れも、これからも永い間、仕法を続ける様、お話ししましたところ、御承知なさいました。元来、知行地の三つの村は、御承知の通り、薄地粗田の土地柄ゆえ、今までの様に手厚く復興の仕法事業をして下さり続ければ、今の姿にて復興がはかどりますが、お手を引きますと、たちまち、旧弊が戻り、再び荒れ、困窮におち入

ります。この事が、病中にて大いに心を痛めております。三年間は、私(尊徳)が、幕府の仕法の合い間をみて、お世話いたしたく存じますが、その後(病気)になってしまったので、はどうしたらよろしいやら、案じています。

安政三年七月二十一日 二宮尊徳

村田與平様

岩本善八郎様

と、自分の体力が衰えているのを悟りながら、前々任地の復興事業に心を寄せているのだ。

この日から、三ヶ月後、尊徳は、今市の役所で、死への旅路についてしまったのだ。自分の命の尽きる前まで、前々任地のことを案じていたのである。

この様に、尊徳は、「心優しき人」であったのだ。

心優しき尊徳は、又、「悲劇の人」でもあった。神と祭られたのだが、実は、その生涯は、悲劇の連続であったのだ。

こよなく愛した娘、文を、自分の仕法の遂行の為に、晩婚とさせてしまい、三十歳という若さで喪ってしまったのだ。

二十九歳で結婚、三十歳での初産で、この世を去らせてしまった。尊徳は、幕府の命令で、日光御神領内を仕法中に、愛しい娘の最後を看取することもできなかった。町谷の武兵衛宅の

離れで、真岡東郷陣屋から駆けつけた使者から、文、死すの報告を受け、尊徳は、十日間、武兵衛宅の離れから、一歩

も外に出ようとはしなかった。掌中の珠と慈しんだ文、二人三脚で幕府の仕法に従事し、その為の晩婚、高年齢出産で命

を落とす。

もう一つの悲しみは、尊徳が今市の役所で病に倒れた折の心中である。尊行と鉸、そして金一郎(尊親)という孫も誕

生した。けれども、尊徳は、その病床で悔恨の念に苛まれた。

彼は、日光御神領荒地起返し、の幕命を受けてから、必死で、

もくろみ書を書き提出した。幕府は、これを認めたが、実行

せよとの命令は下さないのだ。八年間も、ゴーサインを出さ

なかった。老人の八年間は、非常に貴重な時間だ。実施せよ、

との下命を受取った時、尊徳は、己れの命が短いことを知っ

た。もう少し早く、実施命令を下してくれていたら、今より

も少しでも多く仕法が進んだのに、と口惜しく思う。まだ、

やらなければならぬ事が山積している。それなのに、自分

の命は、もう僅かしかないのだ。尊徳の日光御神領荒地起返

しの仕法は、己れの命を懸けたものと覚悟していた。この仕

法は、単に、日光御神領だけに通用するものでなく、日本全

国のどの藩に於いても実行することが出来るものであった。

尊徳のこの仕法は、藩主が豊かになるには、農民が豊かにな

らなければならぬ。農民が豊かになれば、平和な生活が出

来る。日本の津々浦々、豊饒な国になり、世は太平になる、

と彼は考えたのだ。しかし、仕法途中にして、死を迎えねば

ならぬその口惜しさは、尊徳の心中を赤い炎となって駆けめ

ぐった。

神とあがめられる尊徳であるが、その心中は、優しさよ、

深い悲しみを持って生きて来た。一人の人間として、人々を

愛し、必死で暮らしながら、自分の生涯の仕事と励んだ仕法

を達成することができず、命を失ってしまった。

その無念さは、今もなお、漣を輝かせて滔々と流れる、「二

宮堀」の水面に浮き沈みしている。

ドンマイ

鈴木あぐり

寒があけ二月の柔らかい日差しがさしている。昼食を済ませた僕は、農園の隅にあるベンチに腰をかけた。しばらくすると高山がやってきた。彼はにこやかに切り出した。

「先輩、五月に結婚することになりました。挙式は済州島の教会で身内だけで挙げて、披露宴は地元のウエディングホールでやります」

「おめでどう。よかったね。それにしても済州島とは葉月ちゃんには韓ドラのファンなのかな」

「そうなんですよ。葉月も彼女の母親も韓ドラが大好きで、ずっとまえから済州島で挙げると決めていたみたいです。父親がせめて披露宴は日本だと説得してくれて、やっと決まりました。先輩にはいろいろ相談にのつてもらい感謝しています」

「感謝だなんて大袈裟だよ」

社内ではみな僕を「農場長」と呼んでいたが、高山は大学の後輩のせいとか、ふたりだけのときは「先輩」と呼ぶ。

高山は誠実でフットワークの軽い好青年だが、恋愛に関しては奥手。結婚相手の葉月ちゃんとは一度別れたが、半年後に元の鞘に収まった。なにはともあれうれしい知らせに僕の頬は緩んだ。

「それと先輩、披露宴でスピーチをお願いします。社長から

も先輩に頼むよう言われました」

「了解」

本来ならスピーチすべきなのは社長だが、近ごろの体調を考えれば無理もないだろう。

園芸作物を扱う僕たちの働く会社は、屋上や壁面緑化の部門が、都市部を中心に需要が多い。これから高山に家族が何人増えても暮らし向きは心配ないだろう。

〈スピーチか……〉

僕の胸のなかで若い日の苦い思い出が甦ってきた。

二十年まえ、まだ僕が大学生のころ、旧知の友人である大野君の結婚披露宴に招待された。しかも友人代表としてスピーチをしてほしいと頼まれたのだ。

僕は子どものころから剽軽で、人を笑わせるのが得意だと言われてきたが、真面目な話は大の苦手だ。高校時代も担任の教師や級友たちから生徒会役員に立候補するよう勧められたが、人前で話すことを思うと二の足を踏んでしまい固辞した。

そんな自分がスピーチなんて、まして結婚披露宴など初めてのことで、何をどう話せばよいのか皆目見当もつかない。母に相談すると、

「友人スピーチでしょう。お祝いの意を伝えたら明るいエピソードを入れた思ひ出話なんかどう？」当日は緊張するでしょうから暗唱しようなんて思わないで、あらかじめ紙に書いて持つて行くといいわよ。ちよつと下手でも大丈夫、大野君なら許してくれると思うわ」

母の助言に気が軽くなった僕は、早速思ひ出話を綴った。

僕が小学三年生のときに、小学校の近くに手打ち蕎麦の美味い店が開店した。その店のひとり息子が同級生の大野君で、僕たちはたちまち仲良くなった。僕は兄が入部していた学童野球クラブに所属しているため、放課後はほとんどグラウンドにいた。間を置かず大野君も入部してきた。僕たちは朝から夕方まで常に一緒だった。

ある日ひよんなことから僕の父が監督になった。僕は学年が上がってもレギュラーになりたいとは思わなかった。試合に出してもらえればうれしいが、ひとたび三振やエラーでもしようものなら父の檄が飛ぶし、「監督の息子だから下手なのに出してもらえた」と思われるのもいやだった。

父は僕の消極的な言動に齒がゆさを感じていたのである。練習が唯一休みの木曜日さえ、自分が勤務する会社のグラウンドに否応なしに僕を連れて行き、練習を繰り返した。

ある日僕は、大野君に試合に出たくない話をした。兄の試合を見続けているうちに気づいた。兄の前の打者は自信がないのか、フォアボール狙いに見えた。彼が塁に出ると兄はいつもバントをさせられた。点のためとはいえ、兄だってバントを大きく振り打ちたいはずだ。

このころの学童野球は、打席に立つと一球ごとに監督のサインを見るといふ暗黙の了解があった。サインを見逃してへ

マでもしたら大変だ。ならばベンチを温めるのも悪くない。僕の話をもじつと聞いていた大野君が口を開いた。

「史ちゃんって、いつも楽しそうにしているからわからなかったけど、いろいろあるんだね。それと僕も特訓つきあうよ」

大野君が特訓について知っていたのは意外だった。冬場になると僕は週に一、二回ほど、父とふたりで、地域に開放している夜の体育館で練習を重ねた。どうやら大野君はそれのぞいたらしい。

翌週から大野君がやってきた。おまけにお父さんからと言って、蕎麦で作った菓子やスポーツドリンクの差し入れまで持ってきた。父もふたりに「肉まん」を買ってくれた。

大野君はムードメーカーで県営球場へ行くバスのなかでも「おそ松くん」の主題歌をうたい、トンチの利いたクイズをだしては、レギュラー選手たちのプレッシャーを和らげた。特訓でもそれは遺憾なく発揮し、そのせいで僕は練習を辛く思わなくなった。

僕もお返しに試合で大野君が痛恨のミスをしたときは、「ドンマイ、ドンマイ」と大声を張り上げた。

六年生になると僕たちは夏の県大会に出場した。補手の選手が骨折をしたため急ぎよ大野君が選ばれた。傍目の不安などなんのその、彼の活躍は目を見張るものがあった。それはチームの士気を大いに高めた。僕も踏ん張り三塁打を二回打った。これには裏話がある。足が速ければ本塁打になるチャンスだったが、そのころの僕は太っていて誰かに代走を頼みたいほどだった。ちなみにそのときの監督のサインは、「待て」だったが僕は反射的に打った。得意な球だったからだ。この

とき僕は、父の「操り人形」だという思いから解き放たれた気分になった。

僕たちは中学生になった。大野君とはクラスは違ったが、部活動は一緒。野球部に入部するものと思っていた父の期待を裏切り僕たちはバスケットボール部に。父は「好きなことを続けるのが一番」と理解を示してくれた。

ある日の休み時間に、隣のクラスの大野君がやって来た。「突然だけど佐野市へ引越すことになったんだ」

大野君は焦るように早口で話した。お父さんが実家の近くに、蕎麦屋を開店するというのだ。驚いた。

二か月後に友人七人と大野君を囲んで送別会を開いたが、翌週には「ただいま」と元気な顔を見せた。大野君らしい。僕たちも佐野の大野君の家に何度も出かけた。美味しい蕎麦を期待してゆくが、大野君のお父さんがご馳走してくれるのは、決まって「佐野ラーメン」だった。あれから数年。会う機会は減ってしまったが、僕にとつて大野君はかけがえのない存在だ。

ホテルで開かれた披露宴、僕はマイクに向かいひと呼吸した。スピーチは極めて順調だった。三分の二を過ぎたころ気の緩みだろうか、原稿の一行を飛ばしてしまった。あとから思えばなんの支障もない一行だったが、とてつもなく大切なひと言に思えて頭のなかが真っ白になってしまった。それからはなにをどう話したか覚えていない。ただメモを持つ手だけが異様に震えていた。

大野君に謝らなければと僕は新郎席を見た。大野君は小学

生のころと同じ笑顔で「ドンマイ」と口を動かした。済まなさどありがたさがこみ上げてきた。

早緑に輝く葉桜の並木を縫い高山と葉月ちゃんの待つ披露宴会場に向かった。新郎の上司として僕のスピーチは自分でも完璧だと思えた。終わりにさしかかったとき、熱い視線を送ってくるひとりの女性と目が合った。

志穂だった。そういえば栃木に仲の良い従妹がいると言っていた。まさか従妹が葉月ちゃんだったなんて……。

志穂とは二十代のころ、まえの勤務先である千葉県の実業会社で出会った。ひとつ年上で社内でもしっかり者で通っていた。志穂とは僕の優柔不断さが招いた別れだった。

マイクをまえに偉そうに話す自分が滑稽に思えてきて、早々に切り上げた。やれやれと思いつつ一礼をしたそのときマイクスタンドに頭が直撃し会場中に強烈な音が響き渡った。笑いを堪える招待客たちの顔がいやがうえにも目に入る。「顔から火が出る」とはまさにこのことだ。僕は足早に席に戻った。

しばらくして先ほどの失態のほとぼりが冷めるのを見計らい僕は、勇気を振り絞りワインを手に志穂の席に向かった。もう恥ずかしいなんて気にしない。

志穂はあのころと同じ柔和な眼差しで僕を見つめ「ドンマイ」と、グラスを合わせてきた。

マタタビのReception

徳永 楽遥

「わたしは一年生です。皆さんは度胸のあるかわいい生徒とお思いでしょう。それで差し支えありません。えっ、かわいくないですって。どなたでしょうか、手を上げてください。あなたね、ご承知のようにあばたもえくぼと申します。残念ながらあばたのないわたしをその距離で片目でもってご覧になってください。かわいいを通り越して美人に見える筈です。ありがとうございます、美人になっちゃいますよね。」

話が横道にそれ、遅くなりましたがわたしが生徒会会長に立候補しました檉田沙絵でございます。漢字で書くと難しいのでひらがなでかしたさえと覚えていただければ幸いです。さて入学して短い月日ですが学校を隅から隅まで、先生方の授業法、教科の資料問題集、学食等を調べメモしました。次の三つの項目をご披露して生徒会会長選の公約と致します。一つ、先生方には時間を守っていただきます。チャイムとともに授業を始め、チャイムで終える。まあまあ、生徒諸君、お静かに。消しゴムを投げないでください、これ、頂戴します。わたしたちは空気を吸うのと同じように高校生にとつて授業は空気なのです。その空気が少なくなれば苦しくつてのたうち回ります。

二つ、学食の正常化。学食のおばさんおねえさん方に申しているわけではありません。おいしい食事にいつも感謝して

います。四時間目終えてすぐに学食に駆けつけたとします、するとあろうことか先生方が談笑のうちにすでに食事されている。これでよろしいのか。はいはい、床を鳴らさないでください。そこで先生方の勇み足を押しとどめたいと思います。三つ、みつつ、アラ原稿が、ポケットにもない。どうしましょ。ウン、そうか」

赤いスカートのセーラー服の胸元に手を入れ原稿を取り出す。その原稿を高く掲げると男子は拍手、女子はブーイング。ともかくも会長に当選した檉田沙絵は公約を実行し、ジャンヌ・ダルク然として三年間を過ごし卒業した。生徒指導部長は忙しい。息をつくことがせめてもの慰め、昼食にありつけば御の字というハードな役職。ある日、昼休みの会議が長引き安原部長は腹が減り過ぎていた。ようやく学食に着き食券を出した。

おばさんは素気無かった。

「もうご飯もおかずもないよ」

安原部長は膝からくずおれながら、あのジャンヌ・ダルク沙絵のせいだと空きつ腹に刻んだ。

沙絵が大学四年になり、弟の慎治は同じ高校に入学した。取り柄と言えば大食漢、もつと食べたいと柔道に励んでいる。入学三日後には学食の厨房で皿洗いの手伝いをしていた。

おばさんを美子さん、おねえさんを美鈴さんと呼び、慎ちやんと呼ばれた。竹を割ったような性格の美子さんは慎治の食べっぷりが気に入り、ハイタッチをする仲まてになった。

朝のすがすがしさを追いやる大声が職員室中に響いた。

「誰なんだ。学食のおばさんと、ハイタッチしてる生徒は」

安原部長が顔を紅潮させ先生方を見まわした。学食のおばさんに個人的低次元で腹を立てているのを先生方は知っている。

「そういえば、皿洗いもしてたな」

「だから、誰なんだ」

「あの生徒会長だった、かしだ、樫田沙絵の弟かな」

安原部長の唇は紫色となり、全身を震わせ膝を床に落とした。

「またしてもジャンヌ・ダルク沙絵が立ちはだかる、弟までもが、憎き学食のおばさんをも取り込んで俺を、オレを……」

先生方は離れていった。

慎治は二年になった。部活後体育会系の部員は一団となって校門を出る。耐えられないほどの空腹に気力までがしぼむ。

「慎治、あれ」

学食の美子さんだ。大盛りご飯で皆が世話になっている。声をかけようとしたそのとき黒い影が美子さんのバッグを奪って逃げた。倒れた美子さんが動かない。慎治は美子さんに駆けつけた。陸上、バスケット、柔道がドロボーを追った。

相撲と弓道に美子さんを頼み、慎治はひと足遅れて走った。勇ましい声を上げているのに及び腰の部員たち。男の手に

は夜目にも光るものがあった。慎治は怒りで怖さを忘れた。

「ウオオー」

その叫びで男がよろけた。そこを慎治は背負い投げにした。地面に大の字になったその上に部員たちがのしかかった。相

撲部が部員の山にドッコイショとダメ押しをした。

近くの病院に美子さんは救急車で搬送されていた。

受付を探した、ない。相撲部があそこに坐っている女性は何んだと言う。机の上はHospital Reception Deskとある、意味不明だ。だが全員の目がその女性に引きつけられた。目尻が下がった。弓道のイケメンが代表で進み出た。

「ウツン検査中ですよ、お待ちになって」

広い待合室なのに謎のHospital Reception Deskのまわり部員たちは固まって座りこんだ。蘇った気力をもて余した。

新聞社に入社して一年目の沙絵は資料室主任の肩書で毎日冊子や写真等の整理に明け暮れた。沙絵は新聞記者、ジャーナリストとして華々しい活躍を夢見ているが現実には悲嘆の日々を送っている。デスクは何ごとも勉強だという。恨めしい

「ひったくり。怪我した被害者の病院に行け」

く流れている背中を素手で追いやるなんて私の誇りが許さない。フランスの香水をふりかけたハンカチーフを額にあてる。坊主頭が鼻をよせてくる。

「ギヤウー、ゲルルー」沙絵が吠えた。

ようやく机にたどり着いた。苦手だなあ、こういうの。Hospital Reception Desk。キザにもほどがある、病院長、出てきなさいよ、と叫びたい気持ちを押しとどめる。やめよ、うかな、取材。気が進まない、けど沙絵は前進あるのみなの。こういう者ですがと名刺を見せベテラン記者らしく振舞う。「ひったくりの被害者についてお伺いしたいのですが」

ズット、ズットと年上らしい女性Receptionはクリスタルシユガーをも溶かす情熱的な二重瞼の瞳と芸能人張りの真っ白い歯を見せた。

「当局から丁重にお断りするようにとのお達しですよ」

甘ったれの猫みたいに身をくねらせる。マタタビでも食べたのか。これらの坊主頭はマタタビを押しただいたというのか、デレデレしおって、この若造ら。

事件記者で選りすぐりのルーキーに門前払いを喰わせずちやつていいの。こう見えても、こうしか見えないけれど、デスク直々の指示で来てんの、そんじょそこらの記者と記者が違うのよ。ふん、Receptionやマタタビたちは私が未来のピユリッツァー賞候補だということを知らないなんて無知もいところよ。それにしてもなんで離れないの、この子ら。

「何してんの？」

背後からの声。気安く声かけないでよ、馴れ馴れしい。

「おれだよ、おれ」

何がオレよ、オレオレ詐欺か。坊主頭の甘ったるい汗の臭

いが鼻につく。

「シンジだよ」

振り向いた。がっかりした。オレオレ詐欺だったら記事になるのに。慎治じゃ、ねえ。有象無象の汗臭いマタタビどもの鼻息が露出した腕にかかる。鳥肌が立ちつばなし。何なのよ、なんで来んのよ。シツ、シツ。笑いをこらえきれないまま慎治は事の顛末を説明した。学食の美子さんのこと、部員たちのチームワークと機敏な行動力を微に入り細にわたり説明した。それは俺、そこはおれ、そこんところはオレと自分の鼻を指さす。

汗臭い目が沙絵に集中する。しだいに親しみが湧いてきた。うそでしょ、坊主頭のマタタビに親しみなんて、でも気持ちが変わるかにオープンになりつつある。止められない私。

でも、なんてこと！取材とはこうなのだろうか、向こうから情報が転がり込むなんて。相撲部の太鼓腹が鳴いた。エントランスホールは腹の虫の大合唱となった。

「慎治、これ、ラーメン代」

マタタビたちの写真でも残しとくか。

「写真、撮るよ。新聞に載るかもよ」

「閑取、動かないで、もう一枚とるんだから」

「新聞に載るなら、ワタシもだつて」

こぼれんばかりの笑みを浮かべてReceptionが汗臭い中に場を占めた。

「ダメなんですよねー。ひったくりを取り押さえた勇者たちの写真撮影なの。あなたが入っちゃ困るん……エッ何ですつて……一緒に撮ったら、内緒で教える？検査結果を……よし、了解。わが社の独占取材よ」

鉢試し

相馬 龍久

幸右衛門が来る。

その噂は瞬く間に城下の町人街に広まった。普段は大人しい男だが酒が入ると質が悪い。蕎麦屋で酒を飲んでいると三合あたりから怪しくなってくる。何が気に入らないのか、だれ彼かまわず絡み出す。侍とて絡み、何度か揉め事をおこした。しかし將軍も徳川家光の代となり戦国の世の気風も抜けてきた頃で、侍も下手な刃傷沙汰など起こせなかつた。小さな事件でもお家おとり潰しになつた件がいくらでもあつた。泰平の世となり禄を食む者が溢れてきていた。

とはいえ年寄りの中にはまだ戦国の気風を残している者もいた。のんびい鍛冶と呼ばれていた幸右衛門もその一人だつた。

「幸右衛門は野鍛冶だつたよな」

「そうよ、庄屋さんが拾つてやつてよ仕事あげて世話してやつてんだよ」

幸右衛門の村鍛冶としての仕事は評判が良かった。たまに刀も打つという。弟子も何人かはいるが出入りが激しい。幸右衛門の酒癖と貧乏もあるが鍛刀なども、あっさりと教え数年もすれば弟子たちは去つて行つた。幸右衛門は相州伝や備前伝の流れをくむ刀工に師事した。皮鉄、棟鉄、心鉄、刃鉄の組み合わせ、最初の大沸かしから焼き入れまで仕事を見

せる事は出来るが、自分のものとするには時間をかけた経験しかないと言う。近頃は刃文の形や周辺にでる沸や匂い、全体の優美さなどが評価される。そういう作刀を伝授しないと弟子は去つていく。

「そりやそうよ名人となれば才次郎みたいにお召し抱えになれるもんな」

ところが幸右衛門はこの泰平の世に誠に切れる刀など作つて意味があるのか自問していた。百姓や職人のために役立つ道具や刃物を作ることのほうが世の理にかなつていのではないか。二つの思ひの狭間で幸右衛門は揺れていた。

幸右衛門は村の鍛冶屋として庄屋から重宝がられ家と仕事場を与えられていた。この暮らしていいのではないか、そう思う一方幸右衛門にはいくら酒を飲んでも晴れない霧が心の奥底に漂つていた。

「今日は変だぞ。庄屋さんが付き添つてる」

町衆の誰かが言つた。二人とも紋付き袴の正装で家老屋敷に引き立てられるように入つて行つたと。さてはいよいよ成敗されるかと町衆は色めき立っていた。

城下のお抱え刀鍛冶の才次郎は藩主から頂いた大そうな銘を切っている。良い刀を鍛刀すると江戸の目利き者にも評判がよく高値がついた。短刀など打たせ將軍家へ献上したとい

う。評判となっていた。才次郎の打った刀は沸も刃文も美しい。

今の世に切れる刀なんぞ必要ない。綺麗に作って商人たちが高く売り買ひしたり、お殿様が集めて喜んでいたりしている。本物の刀ではない、抜かぬ刀は竹光だ。酒を飲んで、幸右衛門はそんな暴言を吐いたこともあった。あいつはいつ成敗されるかと町衆は噂をしていた。

「今日はとうとう呼び出され成敗されるか」

町衆は顔を見合せ話していた。

ある時、城中控えの間で若殿と縁戚にあたる支藩の若殿との間に戯れ話しがはじまった。実戦を知らない若者ほど武勇伝が好きだ。老人から聞いたり書物を読んだり誇張された話しに胸を踊らせていた。

「当家には戦の世を戦い抜いた荒武者の名物兜がある」

「ご当家の名鍛冶の刀で兜が打ち割れるかな？」

支藩の若殿は明珍鍛冶の南蛮鉄の兜を自慢した。そして鉢試しを申し込んだのであった。

ついにはそんな話になってしまった。

周りで聞いていた者たちも、これは面白いと囁し立てた。武士の面目上双方とも引つ込みがつかなくなってしまう。家老から事の次第を聞いた才次郎は腰を抜かしてしまった。

「わたくしの刀は優美で刃文も沸もよく切れます。されど甲冑武者相手の斬撃には耐えませぬ。ましてや兜割りなどはとても、とても・・・」

ついに下を向いたまままだまりこくってしまった。

「いやいや時はまだある。鉢試しように一振り鍛刀してくればよい」

才次郎は下を向いたままだった。

「金子か？金なら十分用意しよう」

才次郎は首を横にふった。

家老も目を閉じたまま黙り、まんじりもしない時が過ぎた。

「何とかならぬかのう・・・」

突然才次郎がボンと膝をたたいた。

もしかしてあいつなら出来るかもしれない。と、とんでもない者を名指しした。

「あの飲んべい鍛冶か！」

「出来るか。幸右衛門」

深く沈む声で家老が念を押すように言った。

大方の話しは聞いていたので覚悟は出来ていた。

「はっ」

と、付き添っている庄屋も驚くほどの冴えた声で幸右衛門は答えた。この男の中にこのような凜とした気力があつたのか庄屋は驚いた。面をあげた幸右衛門の顔つきは別人のように引き締まっていた。

町衆たちは幸右衛門が村へ大人しく引きあげて行ったので拍子抜けしていた。

鉢試しの話しはなじみの代官が庄屋のもとへ持ってきた。才次郎の言う事は本当か？信じられぬ。あやつめいいつも悪態をつけておるといではないか。

庄屋は言う。

仕事の時は冬でも褌をして神に何やら誓いをたて火を起こしております。百姓の鎌を打つ時でもです。ましてや鍛刀となれば人間業とは思えない働きぶりです。

幸右衛門にかけるしかない。

「よしっ」と腹を決めたようだ。

見分役として決めた以上自信をもって家老に報告できると笑った。

お願いがごさいます。ご家老様のお力で奥出雲のタタラ吹き玉鋼たまがねを手に入れてくださいませ。幸右衛門はタタラ吹きたまがねの凄絶な仕事を聞き及んでいました。名刀は玉鋼で決まる。あとは神に祈り全身全霊で仕事をするだけだ。

それでは誰が切るか。武士の面目もあるので家老は密かに選ぶことにした。内々に話を進めると誰も受けない。まだ剣術の理法も整わぬ時代若い剛の者も自信はなかった。戦経験のある初老の武士に決まった。

その武士は引き受ける前に家老に幸右衛門の素性を確かめるよう頼んだ。家老は幸右衛門が以前の里に人をやり調べた。

「やはりそうか、佐和山から落ちてきたのだな。あの島左近に集められた職人たちだな」

島左近は石田三成の片腕で戦上手、戦仕度も抜かりのない武将であった。黒田家の者など今でも島左近に攻め立てられる悪夢を見るところ。島左近は早朝より夕刻まで戦い続けられる刀を作れと命じていたという。

鉢試はちまての日は晴天であった。

古武士はひらりと造作なく刀を抜くと中段に構えた。その刀身は幅広く武張った感じであった。一呼吸おいてからゆっ

たりと振りかぶり一刀のもとに切り下げた。

幸右衛門は自分の鍛練した刀が兜を割ったことに満足した。そしてこのような刀が無用な物になっていく事も悟った。心の奥底に漂っていた得体の知れないものが消えていった。

名人は酒に溺れ金に縁がないと弟子が嘆いて去って行った事もある。兜割り以後酒は控えた。

百姓や職人の実用になる刃物なら鎌、包丁、鉋なども心血を注いで鍛えるようになった。これらを「百姓、職人の戦道具」というのが幸右衛門の口癖となった。

刀鍛冶の流れ修行者が来ても入門者が来ても受け入れた。隠すことなく教えると去っていく弟子も多く世に言う秘技などなかった。心を練り込んでひたすら打ちこむ。玉鋼を作った大鍛冶から使い手に渡す途中の仕事と思い幸右衛門は生涯刀に銘を切らなかつた。

向こう鎚は相鎚とも言われ弟子が打った。師弟で調子を整え鎚を打つ。その中に無言の教えがあるのか余人にはわからない。多くの職人が出入りしたが何人が幸右衛門の鎚音を聞き真に相槌を打ったのかは分からない。

筆名の由来

森 羅一

筆名の背景と始まりについて報告したい。逸見猶吉と言う筆名は『逸見猶吉ノオト』に昭和3年とある。これは日本詩壇への登場の契機となった詩誌『学校』に載ったウルトラマリン第一「報告」末尾にある「一九二八・秋函館ニテ」が根拠となっているものと思える。

一 逸見猶吉の筆名について

筆名については田中正造の後援者・逸見斧吉の一字を換えて筆名にしたのではないか。と言う説がある。だが、「猶」についての言及がない。

昭和四年、詩誌「学校」に大野四郎はウルトラマリン第一「報告」を逸見猶吉の筆名で発表する。次いで詩誌「学校」アンソロジーに第一「報告」、第二「兇牙利的」、第三「死ト現象」を発表する。これによって日本詩壇に登場することになる。

筆名の逸見猶吉について私は次のような仮説をした。

研究を終了した後、関合資料が出てきた。関合正明は長谷川濬と共に昭和21年7月17〜18日、逸見の葬儀に立ち会った一人である。関合のエッセイの中に終戦間近に生活必需品会社の逸見からの依頼でポスターを依頼される。打ち合わせの時に、「机に西郷隆盛遺訓(岩波文庫)があった」と言う箇所に興味をもった。子供に切腹の仕方を教える四郎の当時の心

情を考えた時、国に殉じた西郷に傾倒していたとしてもおかしくはない。西郷遺訓を取り寄せ読んでみると遺訓の他に岸良眞郎の問いに次のような熟語の質問に回答している。それは「猶予狐疑」*である。意味は「義心の不足より發るものなり」と言っている。前後二字とも「ためらう」である。西郷は回答の初めに「毒病」と答えている。ことに当たってためらうことが「毒病」と言わんとしているのか。逸見は斧に換わるべき語彙として冒頭にある「猶」を用いたのであるまいか。即ち「吉にためらう」である。この吉が斧吉の吉なのか、西郷吉之助の吉なのかは不明だが、いずれにしても「吉を躊躇う」意になる。

猶予狐疑について平成32年に益子の山本志朗さんから「中国の【楽毅】の物語を読んでいたら狐疑が出てきました。孫子の兵法の教えのようです」と言う葉書を読みました。調べたところ孫子は「猶予狐疑を用兵之害他で呉起先生がおっしゃった。」と言っていることから出処は呉子*（中国の兵法家）の記述にあることが分かった。つまり、西郷はこの猶予狐疑を流入した兵法書から学んだことになる。

しかし、筆名が出現するのは昭和4年である。遺訓のエピソードは昭和18年である。この疑問を払拭する背景を考えると、「逸見猶吉ノオト」に十三歳の時、四郎は「擬古文を書き、

表装して大事にした」(豊家衰亡記) と言う趣味があったとある。国民的ヒーロー西郷に幼少の頃から傾倒していたことは容易に頷ける。吉の上の猶はそのまま読めば「吉をためらう」と読める。吉の反語は凶である。しかし、四郎は吉でやりたいと願ったのではあるまいか。猶はそのような希望が込められていたのではないか。四郎にとつて反語である凶は自らの基体であったのではないかと推測する。

緒方昇が筆名について《お前の名前は不吉だぞ。逸見猶吉は「はやまりてみればなおきちなるがごとし」じゃあないか。逸見は一瞬ぎよつとした表情になって、返事もしなかった。》と言うエピソードがある。私はこれを「吉」の裏にある「凶」を衝かれた逸見の狼狽とみる。

二〇一六年に遺児・大野裕史さんにお会いした時に仏壇に遺品の徳利を確認した。これは火葬の際、入棺したものである。入棺には二つあったが、そのひとつが破損せずに火葬後、長谷川く緒方、緒方く裕史さんに渡ったものである。この徳利を拝見した時は気づかなかったが、記録に撮った写真には中央に「吉」の字が染め付けされていることに気づいた。この「吉」が偶然か意図されたコードなのかと考えた。



▲遺品の徳利(磁製具須赤絵)
葬儀の時、愛読書と共に棺に収められた2つの内の一つ。無傷で残り裕史さんの元に戻った。

筆名の猶吉には吉をためらう四郎(逸見)がいて、しかし吉でありたいと願っている四郎もまたいるのであると仮想する。筆名には四郎の生き方そのものが投影されたコードを含んでいたのではないかと思える。

逸見の詩は判じ物である。しかし、この筆名由来により筆名もまた作品と同じく判じ物であることを感じた。そして、吉の反語である凶(兇)の存在が見え隠れする。

一 筆名の始まり

田中正造研究家の赤上剛さんから平成28年に宮俣裕介『前衛詩』の時代』の部分コピーが送られてきた。内容は矢橋丈吉*の自伝『黒旗のもとに』に収められている「詩と舞踏と演劇の夕」と「第2回文芸講演会」プログラム。次いで平成29年には神田の古書店で発見した矢橋丈吉の自伝『黒旗のもとに』*原本が送られてきた。概要を報告します。この中に逸見猶吉の筆名が記載されている。

詩と舞踏と演劇の夕

大正十五年十一月三日(水) 四日(木) 后六時 於読売講堂

主催、太平洋洋詩人 女性詩人 小石川区表町一〇九

プログラム 第一日

(1) 宣言・・・渡辺 渡

(2) 自作詩篇朗読

尾崎喜八 岡本潤 安藤華子 深水澄子 黄瀛 野村吉哉 神戸雄一 小野十三郎 矢橋公磨 楠田重子 西谷勢之介 北村英子 菊田一夫 岩田よしの 大関五郎 中西悟堂 尾形亀之助 大野勇次 岡田光一郎 岡村

二一 友谷静栄 逸見猶吉

以下詳細を省略。

(3) 舞踏(A)(B)(4)(朗読)(5) 太平洋詩人協会(演劇部) 第一回公演(6) 和蘭陀座第三回公演
プログラム 第二日

(1) 宣言(2) 自作詩篇朗読(3) 童謡独唱(4) 舞踏(5) 和蘭陀座第三回公演 第二回文芸講演会 場所 読売新聞社講堂(数寄屋橋側) 期日(一九二七年) 四月十六日(第三土) 午後六時

以上のように大正十五年十一月三日(水)、四日(木)に行われた『詩と舞踏と演劇の会』第一日(2) 自作詩篇朗読(者末尾)に逸見の名が記録されている。

赤上さんはこの時期の「都新聞」「東京朝日新聞」等の掲載記事も確認されたが、これらのイベントの記事は無かったと報告している。これは治安維持法の影響下による情報管理ではなかったかと推測できる。

矢橋との交流「逸見ノオト」一四三ページに「アナキキストの矢橋丈吉や北浦馨と交遊関係にあったが、(略)時事新報公告代理店に勤めていた」昭和7年。この資料によりこの交遊も、もう少し遡るものと推測できる。なぜなら、この朗読会に矢橋も参加している。

このプログラムに登場しているメンバーから推測できるのは大正末から昭和初期にかけてのアナキズム、自由主義、モダニズム、反モダニズム(赤と黒「詩戦行」「バリケード」「銅鑼」「学校」「弾道」「詩と詩論」「新詩論」「歷程」)の詩的変遷の推移が窺える。大野四郎が逸見猶吉に変貌するスタートに立って、自らの詩の基底を掴み取る時期と言える。突然変

異と言われる詩的変貌はこの時期から始まり「ウルトラマリ」の発表、旺盛な詩的活動、そして「歷程」の創刊へと繋がってゆくことになったのではないか。

もう一つ加えるなら、『逸見猶吉ノオト』に「大正13年に村山知義「MAVO」を訪問する」とある。この頃、大野四郎は画と詩に取り組み、キュビズム風な画を描き同人誌の装幀や画論や建築論を発表している。MAVOとの邂逅以後アナキズム系詩人たちとの交流が増え、このイベントに参加する契機となったものと思える。

このプログラムから想像できることは四郎のクロスオーバーな行動と私が次第に詩の基底に収斂してゆく転換点であったことを予想させる。

筆名の始まりは菊地の『逸見猶吉ノオト』に昭和3年とある。この資料により、一年半程遡ることになる。つまり早稲田大学に入った年に筆名を使っていたことになる。年譜の改訂を行う必要があると思っている。

*猶予狐疑・ぐずぐずと疑い躊躇うこと。

*呉子(前四〇〇〜三八一年頃) 中国戦国時代の兵法家。名は越。孫子と並び称される。

*矢橋丈吉・略歴(一九〇四〜六四) 北海道に生まれる。大正9年上京。美術集団「MAVO」の初期同人。詩人、劇作家、画家、装幀家。詩人としての筆名・矢橋公磨。

*矢橋丈吉『黒旗のもとに』組合書店・昭和39年刊。

汚れ無い心で誠実にひたむきに

― 相田みつをの人生指南 ―

宇賀神 忍

足利生まれで、詩人で書家の相田みつをさんが亡くなられて、はや三十年の月日が経つ。しかし、今でも相田みつをさんの残した名言や箴言は色あせる事なく、混乱した社会にあつて戸惑いながら生きている私達に貴重な生きる指針を残し、生きる勇氣と希望を与え続けている。

相田みつをさんは、栃木県人らしく誠実温厚で偉ぶらず、幼い児を諭す様な優しい口調で、人間として生きて行く上での本源的かつ普遍的な道理を明快に語りかけ、読む人の心を和ませ共感させ、「そうか。そうなんだよなあ。」と納得させてくれるのである。

『アノネ／にんげんはねえ／自分の意志で／この世に生まれてきたわけじゃねえんだなあ。だから／自分の志で／勝手に死んじゃいけねえんだよ。』

『アノネ／自分にとつて／一番大切なものは／自分の命だよ。／だから／すべての他人の命が／みんな大切なんだよ。』

相田みつをさんは、栃木弁を多用しつつ、「アノネ」と親しみを込めて優しく私達に語りかけてくる。しかし、その言葉の意味する所は深く重い。

人間にとつて最も大切なものは、「命」である。命を失えば総てが終つてしまう。親も子も、親しい友や恋人も、家や財産すら無に帰してしまふ。それ故に相田みつをさんは、自分の命を大切にし、無暴な事や自殺行為等自分の命を粗末にする事をもつての外の事として厳しく戒めるのである。

と同時に相田みつをさんは、自分の命が大切な様に他人の命もかけがえのない大切なもの故、他人の命を奪う様な暴挙は絶対に許せない事として固く禁じているのである。

確かにこの二つの暴挙は、人間として最悪の大罪であり、誰もが肝に銘じて死守せねばならぬ摂理であろう。にもかかわらず、今もつて地球上から戦の狼煙は絶える事が無いし、自殺者や他人を殺める事件は後をたたない。何とも嘆かわしい限りである。

この世から戦争や諍いや差別を無くし、互いに信頼し合い、労り合つて、安穩に平和に暮せる世の中にする事が世界中の人々の必須の課題であらう。

嘘偽りの無い生き方を

相田みつをさんは、人間にとつて命に次いで大切なものは「信用」だと言う。故になるべくなら人間嘘をつかない方が

いいと言う。

『アノネ／なるべくなら／うそをつかないほうが／いいんだなあ／オレ／そんなこと／言う資格はねえけど。』

相田みつをさんは、自省を込めて、社会生活をして行く上で大切なものは信用故、なるべく嘘をつかない様にと私達に忠告する。嘘をつく、社会的な信用を失なうばかりか、友達や近隣の人々との絆も壊れ、住みにくい世の中が益々住みにくくなると言うのである。

人間は弱い存在故、自己防衛の為嘘をついたり欺いたりしがちだが、嘘をついたり人を欺いたりせぬ様心を引き締め強くもって、真摯に誠実に生き、周囲の人々と互いに信頼し合い助け合って、明るく楽しく生きて行きたいものである。

幸わせは自分の心が決める

私は、相田みつをさんの『しあわせは、いつも自分の心がきめる。』という言葉が好きだ。例えば、どんなに素晴らしい豪邸に住み経済的には満ち足りた生活を送っていても、心に不平不満があり、心が満たされない人は、自分を幸わせとは思わないであらう。

一方、あばら屋に住み粗衣粗食に甘んじていて、はた眼には不幸わせそうに見える人でも、愛する家族や信頼できる友人が居て夢があり、不平不満も無く楽しく暮し、心から自分は幸わせたと感じている人は、真に幸わせ者なのであらう。

正に幸わせは、他人が決めるものではなく、本人が自分の

心で決めるものなのである。

幸わせな生き方について相田みつをさんは、こうも言っている。

『一途に一本道／いちぢずに一ツ事／観音様に助けられ／佛さまに守られて／曲りなりに／一本道／迷いながらも一ツ事。』と。

人間が生きがいを持って幸わせに生きる秘訣は、自分の好きな事・やりたい事を一つに定め、苦しくとも辛くとも逃げず・あきらめず一途に精進努力する事だと相田みつをさんは言う。

確かに人間好きな事ややりたい事に真剣に取り組んでいる時は、あまり辛いとか苦しいとかは感じずに、心に張りや希望がみなぎり、生きがいさえ感じられるから不思議である。

人間一度きりの人生故、幸わせに悔いの無い人生を歩む為にも、夢を持ち欲をかかず、自分の好きな事・やりたい事を心に決め、一途にひたむきに精進して行く事が肝要の様である。

失敗は成功の糧前向きに

相田みつをさんの代表的な詩句に『つまづいたっていいじゃないか／人間だもの。』とか『弱きもの人間／欲ふかきもの人間／偽り多きものになげん。』等がある。

相田みつをさんは、自分自身の弱さや甘え・だらしなさ等をありのままにさらけ出し、自分とは何か——人間とは何か

を探究し続けた人である。人間は孤独で弱い存在である事は認めた上で、本気になって生きる事の大切さを訴え続けた人である。

その上で相田みつをさんは、自戒を込めて次の様なメッセージを私達に贈ってくれるのである。

『つまづいたり／ころんだりしたおかげで／物事を深く考えるようになりました／あやまちや／失敗をくり返したおかげで／少しづつだが／人のやる事を／温かい眼で／見られるようになりまして／何回も追いつめられたおかげで／人間としての／自分の弱さを／だらしなさを／いやというほど知りました。』と。

相田みつをさんは言う。人間は、本来弱く不完全な存在故、嘘をついたり怠けたり、欲をかいいたり戸惑ったりしながら生きていく故、時に失敗したり・つまづいたりする事は仕方のない事。人間にとって大切な事は、失敗したり・つまづいたり間違いを犯した時に、あわてず・くじけずに、その壁をどう乗り越えるか試行錯誤し・熟慮して行く事が肝要だと言うのである。

相田みつをさん自身・人生遍歴の中で、つまづいたり転んだり失敗した事もあった様だが、その都度反省熟慮して壁を乗り越え、人間的にも成熟し、精神的にも成長して周囲の人々を温かい眼で見られる様になったと述懐しているのである。

私も、相田みつをさんにあやかっつて、つまづいたり転んだり・へこたれそうになった時には、"失敗は成長の糧"と前向きに考えて試行錯誤しつつ、くじけず・へこたれずに少し

でも人間らしい行いができる様精進して行きたいと思う。

汚れ無い心で至福の日々を

最後に相田みつをさんの美しい心を具現化した詩を紹介しよう。

『あなたのところが／きれいだから／こんな小さな野の花が／寶石のように／きれいに見えるんですね／あなたのところが／うつくしいから／遠い谷間の小鳥の声が／うつくしい笛の音に／聞こえるんですね／あなたのところが／きれいだから／見るもの聞くもの／すべてがきれいに／うつるんですね／うつくしいところの人には／うつくしい姿を見せるんですね／花でも小鳥でも……。』

相田みつをさんは言う。きれいな心・美しい心を持つている人は、この世の美しいもの・きれいなものを感じ取る事ができると言う。また、この世にある美しいもの・きれいなものは、美しい心を持つている人・きれいな心を持つている人へのみ美しい姿を見せると言う。ならば、できるだけ、汚れた心や卑しい心は洗い流して、温雅で汚れの無い清廉な心で自然を社会を見つめ、この世の美しいもの・きれいなもの、素晴らしいものを沢山感得し味わい、楽しく至福に満ちた日々を送って行きたいと思う。

能代海岸砂防を決定づけた「陳情書」(大正九年)を読みとく

柴田 裕巳

その陳情書(控)は、「海岸砂防雜録 其五」と題された分厚い史料集にあつた。まさか、あるなんて。陳情があつたことだけは伝わっていた。しかし、書面の存在はいかなる文書記録にも記されず、語られず、見た者はいなかつた。

発信者は能代港町(現秋田県能代市)町長。四か所に届けられた和綴じ二丁の候文は、飛砂激甚のさまを憂え、一町の安危存亡をかけて、荒廃した後谷地国有林とその地先にある砂地を、海岸砂防林事業で再生してほしいと要請していた。

【陳情書清書文】

能代港町ハ日本海ノ辺、米代河口ニ位シ戸数三千三百、人口二万二千余。近時町勢ノ振興ハ逐年著シキ進歩ヲ来シ、其ノ發展ノ状刮目ニ値スルモノ有之候。

由來東北海岸ノ諸港ハ、風潮飛砂ノ害ヲ蒙ルコト多ク、我能代港町又是レニ洩レズ。殊ニ、地益々北方ニ辺スルヲ以テ、海風飛砂ノ襲ヒ来ルコト、是モ甚タシク、今日後谷地国有保安林ノ存スル往昔、識者ノ之ヲ憂ヒ、黒松林ヲ植栽シ、防風防砂ノ目的ヲ達シ、以テ市街ノ安寧ヲ保タントシタル意ニ外ナラズト被考候。

抑モ此後谷地国有保安林ハ、能代港町市街ト能代海岸トノ間ニ存スル黒松林ニシテ、実測面積一〇〇三町五反六畝歩、

松樹八万本余ヲ算シ、近ク大正七年九月、能代港町ニ委託保護ヲ許可セラレタルモノニ有之候。然ルニ近年日本海風潮ノ寄スル処、飛砂ノ襲来一層ノ猛威ヲ示シ、海岸前面黒松林ノ幹部樹皮ヲ害シ、砂ハ林中ニ堆積シ、樹林ヲ埋没シ、益々内部ニ浸入セントスルノ勢ヲ呈シ、今ヤ、本国有保安林内ニ存スル稲荷神社(能代公園下記念運動場ヲ距ルコト斜メニ三百八十間)ニ迫リ、既ニ其ノ鳥居ヲ埋没シタルヲ見ルニ至リ候。若シ夫レ此儘ニ之ヲ放任スルニ於テハ数年ノ後ニハ能代港町市街ノ西端ハ、將ニ此飛砂ノ襲来ヲ受ケ、埋没ノ不幸ヲ見ルノ虞有之候。而シテ後谷地国有保安林ト雖モ樹齡既ニ、百年ヲ超ヘ、年々枯死倒木ヲ出タシ、逐年林相ノ衰頽ヲ来スニ至レルヲ以テ、能代小林区署ニ於テ更新ノ計ヲ立テ、今其ノ実行ノ期ニ入り居リ候。町民ハ力ヲ協セテ、本国有保安林ノ愛護保全ニ尽シツ、アリト雖モ、前方海岸ヨリ吹キ寄スル飛砂ノ惨害ハ、益々此保安林ヲ損傷シ、其林相ヲ破壊スルハ、独リ本保安林ノ衰滅ヲ来スニ至ルノミナラズ、実ニ、一町ノ安危存亡ニ関スル至大ノ問題ニ有之候。

今此保安林ノ安全ヲ保チ、市街ヲ危機ヨリ救済セントスルニハ、海岸一帶ニ前砂丘ヲ設クルヲ以テ、焦眉ノ急務ト信ジ候ヘ共、能代港町ノ財政ハ今直チニ此計畫ヲ遂行スル余力ナキヲ以テ、希クハ、一町公益ノ為メ、応急ノ計ヲ立テラレ

適當ノ御施設ヲ仰ギ度、

右本町会満場一致ノ決議ヲ以テ此段及陳情候也。

大正九年七月十二日

能代港町長 笹森基延

農商務大臣 山本達雄殿

内務大臣 床次竹二郎殿

秋田県知事 名尾良辰殿

秋田大林区署 岡田章殿

被害地図面添付

※農商務省は現林野庁、秋田大林区署はその地方支部局（下部に小林区署）。大正一二年より秋田営林局（下部は営林区署）。平成一一年より東北森林管理局（下部は森林管理署）。内務省は後述。※前砂丘とは海岸に近いところにつくる人工砂丘で、飛砂が直接海岸線におしよせるのを阻止する効果がある。※ルビは筆者。漢字は新字に、片仮名は原文通り。句読点を補い、段落はじめは一字下げとした。

―紙片が語りだす―陳情書冒頭の上方に、七行百字あまりの、小さな留書きが貼つてある。

「この陳情こそ能代海岸砂防の発端となつたものであり、それは大正九年全国山林大會のあつた時本多静六博〔士〕の講演によつて刺戟醒め、この陳情書を出すようになったもので、其の扣ハ持つてるものは私一人でせう。」

※ルビと読点及び〔〕内の補語は筆者。訂正の二重線や漢字・仮名の新旧まじりはそのままとした。

鉛筆での走り書き。筆跡はまちがいがなく、「海岸砂防雑録其五」の史料収集者・富樫兼治郎（一八九六一一九六五）のものであつた。

秋田営林局は『八十年の回顧』（昭和三九年刊）で―當局

在勤の昭和一四年頃、海岸砂防事業を成功させた全国三大施行方式（鳥取・茨城・秋田）の「秋田方式」を確立して有名になつた。のち当局営業部長。―として富樫の名をたたえて

いる。

富樫は大正一〇年四月に、東京帝国大学農学部林学実科（旧制中学卒業で入学できる実学コース。のちの東京農工大学）を卒業。農商務省技手として五月に能代小林区署に着任する。海岸砂防事業は同年秋から始まり、富樫は翌大正一一年五月から担当となつた。とにかくこの地でスタートを切つたのだ。

―陳情書提出までのいきさつ―物事には原因があつて結果がある。その経緯を富樫文「砂に親しむ三十年」（『林業経済』第八三号、昭和三〇年九月刊）から引用する。

「大正九年に大日本山林会の大会が能代で開催されたのを機会に、全国の会員に現地の後谷地国有林の飛砂で破壊されつある砂防林の有様を視察させた。此処で本多静六先生が現場で砂防林の講演をされ、寸時も棄て置けない。此のままでは能代の町を埋めるのも遠くはないと警告を發せられた。天下の先生の御意見であるから市民を啓発し、能代港町で急遽町会を開きその善後策を相談した結果、各方面へ陳情することを満場一致で議決して、町長笹森基延は大正九年七月二日農商務大臣、秋田県知事と大林区署長に速に砂防施設をされるようにと陳情した。そして翌大正一〇年には早くも砂防工事の実施を見るに至つたのである。こんなに速に実現したのは陰に吉成貞助氏が在つてその指導宜しきを得たからであつて、先見の明の鋭かつたことに頭が下がる。」

※大日本山林会は、正しくは「秋田山林会 第一三回總會」（『秋田山林会報』第一九号に詳細あり、会期は大正九年六月二日―四日）。晩年

の回想文にありがちな、思い出すままに書いたためか。

―面白くて大音声、本多博士の名講演―『現代名士の演説振』

(小野田亮正著、明治四一年刊)は、次のように活写している。
―「稍もすれば乾燥無味に流れ易い林業上の講話を、いつも其滑稽洒脱なる弁舌を以て、識らず知らず、人の頭脳に注入するの手腕は、実に敬服の外はない」「冒頭に於いて十分に聴衆の感興を惹き、透かさず主題に入て極めて要を得たる説明をさるゝのが例である」※原文は旧字旧かな、総ルビ。小野田は著名な速記者。

大音声は自伝によれば、ドイツ留学中の冬、ドクトル試験に備えて雪のイザー川に通い、滝の轟音をも抜けよとばかりに鍛えたものという。『大日本山林会報』第四五二号は、本会第三〇回大会(大正九年四月一一―一五)の特集で、一三日の明治神宮視察会では秋の創建を前に、本多博士設計の林苑七〇ヘクタールの視察会を開催。会員七五〇名を前に野外講演をした記事と写真をのせている。

後谷地の視察会は二三九名。声は十二分に届いたことだろう。

―富樫文の陳情先に「内務大臣なし―これは単なる失念か。

富樫は、従来は海浜が荒廃していても他省(内務省)の管理のため直接手を下せず、消極的な施業をとってきたことを知っていた。砂防工事の現場では、さらに内務省と大蔵省へ主管替えの申請をだす必要があった。(後谷地国有林海岸砂防計画書―大正一二年編成―全二六丁の二五丁目、(参考事項・内務省及び大蔵省主管地)など)

―内務省とは―明治六年に創設されて以来、霞が関に君臨した巨大官庁。現在の総務省・警察庁・国土交通省・厚生労働省に該当するほか、県知事の人事権及び府県庁の組織と人事権を内務大臣が所掌することで、内政の中心として存在していた。昭和二年GHQにより解体された。

管見を添えると、大正一〇年の『国有財産法』第三条により、『国有財産二関スル事務ハ各省大臣之ヲ管理シ国有財産二関スル総括事務ハ大蔵大臣之ヲ管理スベシ』と定められ、営林財産を管理する農商務省と、公共用財産としての海浜を管理する内務省の間で主管替えをするときは、両省間だけで行わず、大蔵大臣が総括することになっていたのである。

戦後に同省を書こうとすれば、記述はやかいで省きたくもなる。が、事実を書かなければ歴史は見えてこないだろう。しかし、『砂に親しむ三十年』の、(富樫の)思い出すままの記述は、史実との不整合を正されることなくくり返し引用され、その引用文も再び引用されて、今も拡散しているのである。

しかし、『砂に親しむ三十年』の別所、三一頁に書かれた二行ほどの文字が、思いがけない史実を掘り起こすきっかけにもなった。―「大正九年七月伊藤武夫先生(大ニ東大林)に引率されて修学旅行で此処に来た時」―。当時の修学旅行は夏季休業に入る七月一日から半月ほど。陳情書がだされた七月、富樫はまさに能代にいたことになる。

控の入手時期はわからない。複写紙に印刷された「秋田大林区署」から、同署ゆかりの機関による控で、時代はそう下らないだろう。大林区署が営林局と変わるの、大正一三年一二月二〇日なのだから。

―東京帝大、海岸砂防学の師は―明治四五年、「林学第四講座」(砂防講座)の日本人初の教授となった諸戸北郎(一八七三

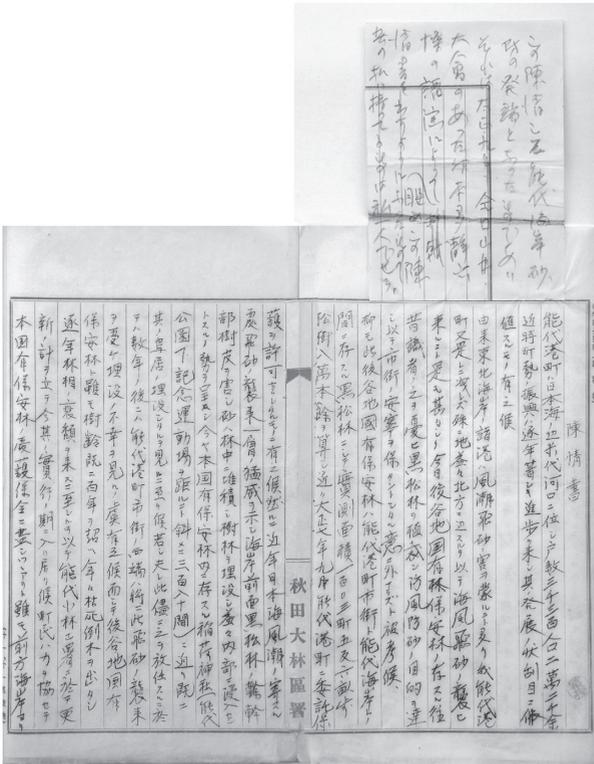
一九五一）は先導者となった。秋田営林局の砂防技術も直弟子たちが後輩の指導にあたったため、後進地ながら中央の技術に劣ることはなかったとされる。

以下は筆者の拙い試論である。伊藤武夫（一八八七—一九六八）は大正二年同大卒業ながら、諸戸の主著『理水及び砂防工学』全五冊（大正四—一〇年刊）の緒言すべてに、

伊藤の名を挙げての謝辞があり、ことに「海岸砂防編」は、伊藤が大正九年一二月に林学博士の学位を受けた論文「海岸

砂防工ニ関スル研究」なくしては、ありえない内容であった。伊藤博士による富樫への助言や、秋田営林局への「復命書」が、富樫の成功への道に資したことと思う。（詳細別稿）

最後に、「陳情書」及び「留書き」の清書文は、大田原市黒羽芭蕉の館学芸員新井敦史先生のご校閲をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。またその控を収録する「海岸砂防雑録 其五」を梅津勘一氏が快く貸与くださったことに、改めて深甚の謝意を表します。



雨情とつる夫人

小島 延介

今年の四月に、福島県いわき市在住の大学時代の同級生からメールが入った。久しぶりだったので、首をかしげながら少し長めのメールを開いた。この年齢になると、同級生の消息のほとんどは訃報、それだけに平常心で読むことができる。

そんなメールの意に反して、いわき市の勿来関文学歴史館で「野口雨情」〜童謡詩人いわき〜という企画展を見てきたが、終焉の地は宇都宮市鶴田町としか記されていない。キミから聞いていたつる夫人や子どもたちのことにまったく触れてないのはなぜか。どんな訳があるのか、と尋ねてきた。

一方では、北茨城市にある野口雨情記念館に行ってみただけ、やはり最期の一行で触れただけで、つる夫人が戦後の食糧難時代に田んぼまで買って、九人の家族を養ったなどには触れてなかった。これはなぜなのかと尋ねられた。

雨情が息を引き取った旧居は、当時、私の家の三軒隣、そんな縁で野口雨情論を読みふけた時期があった。

読むほどに、雨情が二人いるのではないかと思えるくらい、その像は分裂している。

それは雨情が持った二つの家庭、最初の妻（高塩）ヒロと二度目の妻（中里）つるの視点の違いとみることができる。

無頼に泣かされ、愛情を注がれることのないまま離縁にい

たったヒロが心に納めた雨情と、二十歳年ながら雨情の性格をよく知り、彼をたてて家の長としての自覚をうまく引き出していったつるが伝えようとする雨情とは、おのずと印象が異なってくるのは当然だろうと思う。

放浪と虚無と憤りの詩人と、柔和でむしろ教訓臭のたちこめる教育者あるいは人格者と、雨情を考えるとときには、どちらの人格がより表れたのかを知らないと偏った雨情論になってしまう。

野口雨情研究を一手に引き受け、発展させたと言われる、長男の野口存彌のぶやの存在がある。

戦火を避けて宇都宮市の鶴田に疎開していたとき、存彌は学制改革によって旧制宇都宮中から新制宇都宮高に学んでいた。その頃は、地元の小学校に通い、途中まで存彌と同じ通学路を歩いていた。

物が無い時代、存彌は真冬でも素足ですり減った下駄を履き、早足で私たちを追い抜いて行つた。移り住んだ屋敷には、柿林の中にイチゴ畑があったが、育ち盛りの一男八女を養っていくには、どうしても米作りをするその性格は、田んぼが欲しい。つるは近くの谷地田を購入して、慣れない稲作までして米を確保した。

初めての農作業は迷うばかり。私の父や母にアカギレだら

けの手を囲炉裏にかざしながら、細かく教わっては頑張っていた。

つるは十七歳で雨情と出会ってから、生涯を雨情とともにした。雨情論からは従順でありながら、芯の強いしっかり者の印象を受ける。

雨情に愛されたという点では幸せであったが、野口家の籍に入ったものの、いつのまにか前妻が戻ってきて野口家を継いでいた、という事情もあって、妻として、かたちの上からは気の毒な面もあった。

このため有形無形の母の苦勞を眺めてきた息子としては、母を傷つけるような事実を避け、ひいては夫として父として恥ずかしくない雨情像を打ち立てたかっただのではないだろうかと思えてならない。

存彌の正確な雨情像を伝えたいという思いの裏側にある、母を守るという強力な意思を、私は一連の研究活動から感じる。

セルフレジ

柴崎 幸子

ついに、働いているコンビニにセルフレジが導入された。始まるまでは、本当にうまくいくのか、操作を間違えたらどうすればいいのか。やはり、今までのレジのほうが効率がよいのではないか。物事が変化するときの、お決まりの心配をあれこれとしていた。

新しいレジは、店員が商品をスキャンして入力する。あとは、反対側に向けたレジ画面で買い物をした本人が、現金やクレジットカードなど各種支払い方法を選んで操作する。

「セルフレジが入りました」

当初は親切丁寧に説明して、戸惑う相手には自分も会計画面の前まで行って行って一緒に操作した。

毎日来る常連さんは、私たちと同時に機械を使用する。

「だんだん慣れてきましたね」

「お互いに」

などと、和やかに成長してゆく。

流れを理解してくると、導入前の不安は彼方へ飛んだ。

考え抜かれた最新マシンはさすがだ。私でも三日で慣れた。なにより、お金に触れなくていい。つまり、お釣りを間違えることもない。最近はいバッグ持参なので、レジ袋に商品を入れる機会も少ない。

現金支払いでお財布を振りながら、一生懸命に小銭を探し

ているお客様を舐めまわすように見つめながら、私はひたすら笑顔で立っている。すると。

（この仕事はなくなる）

という信号が頭の奥で点滅する。その光を感じながら、次のお客様を対応する。口角を引き上げて、おだやかにゆっくと支払いを待つ。

「あら、自分でやるのね」

などと言いながら現金を取り出し、無理矢理お札を押し込んでいる。

「すみません、現金を入れる前に、パネルに表示されている現金の文字をタッチしてください」

「えっ、どれ、これかしら」

「チャージする現金の額をタッチして下さい」

意図することとは別の案内が機械音でしゃべり出す。

「大丈夫です。もとに戻ります」

こういう流れは高齢の女性に多い。（明日は我が身）と、自分の未来を見るようで、つい優しくなる。

困るのは、少し前に管理職を引退したような男性。すでに何回もセルフレジで会計しているにもかかわらず、毎回同じように不機嫌で

「どこ押すの。やりづらんだよね」

早く慣れてくれますように、祈りながらやり過ごす。

若者はスムーズだ。店に入る前から手に吸い付いているスマホを、そのままレジにかざし、機械音のピローンと同時に去って行く。会話もしなければ、目も合わせない。早い。そして、味気ない。

セルフレジが始まって一ヶ月もすると、なんとなくみんなが慣れてくる。支払い画面まで進むと、店員は隣の空いているレジに移動して、次の客の対応をする。

「二番目にお待ちのお客様、こちらへどうぞ」

商品をスキャンして支払い方法を促す。そのころには、先客は店を後にしている。素早く空いたレジに移動して次の客を迎える。

一人で二つのレジを行ったり来たりしても間に合うこともある。つまり、時間を決めて効率よく人員を配置すれば、従業員は少なくともよい、ということになる。

これが日常になってくると、我々の仕事がなくなる日が、ヒタヒタと近づいてくる。

都心の駅構内では無人コンビニが展開されはじめている。

やはり、次の仕事を探さなくては、頭の中の信号が再び光りはじめた。

すでに、思考も体もフル回転できる時期は過ぎている。現状の動きを維持するので精一杯だ。これから新しいことに挑戦なんてできるのであるだろうか。若いころに何か資格を持っていればよかった。

いや、まてよ。知り合いの女性で、これから短大に通って勉強したいという人がいた。たしか、彼女は八十歳を過ぎているはず。ならば私なんか、まだひよっ子ではないか。

そうだ、今からでもできることがあるかもしれない。

でも短大に通いたいと言った彼女は、すでに英語もできて中国語にも精通している。御歳だけをみれば八十ではあるが、元々の頭の中の構造が違うのかもしれない。

武器を持たない私の、やみくもな努力だけではどうにもならない状況のようだ。

この仕事は人間ウオッチングができて、流行りの商品をすぐに知ることができる。かなり興味深い体験が味わえて、大好きだったのに、残念だな。

さあて、どうしたものかと笑顔を貼り付けてレジに立っていると

「すみません、ここに入れちゃいました」

白髪の女性がレジ脇にある募金箱を指差している。

あちゃあ。額に手を当て天井を眺める。

「お待ち下さい、今行きます」

自分、仕事はありそうだ。

今夜はどちらに

大出 京子^{たかこ}

一万円札の肖像が、福沢諭吉から渋沢栄一にかわるという。何だか、身近なお札になるような気持ちになった。田園調布に、渋沢栄一氏のご子息・渋沢秀雄先生をお訪ねした思い出があるからだろう。

あれは、昭和五十二年十二月三日のことだった。日本随筆家協会理事・神尾久義先生に連れられて、渋沢秀雄先生を田園調布のご自宅にお訪ねした。渋沢秀雄賞受賞のご挨拶のためであった。初めて目にした田園調布の街並みは、整然と放射状に広がる美しい道路に沿って静まり返っていた。

先生自筆の門札「渋沢秀雄」を確かめて、神尾先生の後に続いた。庭を横切って玄關へと続く敷石を踏みながら。庭木の多いお屋敷で、落ち着きのない私を包むかのように、木の葉がしきりに舞っていた。

案内されたのは床の間のある日本間で、テーブルを中心に、庭を眺めながらお話をうかがった。庭のほほ真ん中に、築山が見えた。と、そこに視線を向けながら、渋沢先生が話を切り出された。

「食用になる草が生えるんですよ。春先に、天ぷらにしました」

それを摘み採って知人をもてなした時の話だった。その庶民的な話題と穏やかな口調に、私の緊張感が緩んだ。

それから、神尾先生が私を紹介して下さった。続いて、「私の好みの作品を選びました」

と、今回の「渋沢秀雄賞」選出理由を話してくださった。この一言で、ふっと、心が軽くなるのを覚えた。それまでは、賞の冠の重さに、喜びよりも気が重い日々を送っていたからである。

ややあって、ご自身の本の話題に移った。

「随筆っていうのは、売れないものだね。それでも、今回は二千五百位出たかな？」

本というのは、『渋沢秀雄自撰随筆集』（日本随筆家協会刊）のことであった。それが、二千五百程の売り上げだったとは。先生の著名度を考えると、信じ難かった。

私は既に、買い求めて読んでいた。直ぐに思い出したのは、「つや物語」の中の一節であった。

「タマネギが効くと聞いて、摺りおろして頭に塗った」

「人に逢ってお辞儀をするたびに、玉葱の匂いが夕飯時を偲ばせるのには困った」

日頃、気になさっておいでなのか、本が話題になったためか、先生は初対面の私に、

「齒は、然程手入れしないのに、全部自前ですよ。頭はこのとおりですが……」

と、頭に手を遣りながら笑われた。

まさか一緒に笑うわけにいかないし、まともに先生のあたまに目を向けることもできないし……。私は視線を落としたまま、黙って紅茶を頂いた記憶が残っている。

さりげない笑い。つい、頬が緩む笑い。読む人に笑いを強要しないユーモア。笑いの本質を衝いた先生の作品。『渋沢秀雄自撰随筆集』には「つや物語」以外にもユーモラスな作品が何編も収めてある。

その書き手ご本人が目の前にいらつしやることに、私は不思議な思いを味わっていた。

思いがけず長居になり、トイレに行きたくなかった。でも、奥様は席を外していらつしやる。お聞きできない。困って、隣席の神尾先生に、そつと声を掛けた。それを耳に止められた渋沢先生は、すつと立たれ、「こちらですよ」と、案内して下さった。その上、「この紐を引くと水が出ます」と説明なさる。見上げると、天井に近い位置に水槽があった。

どのようにお答えしたらいいのか。恐縮と戸惑いとで、私は何度もお辞儀を繰り返すばかりだった。

あの時が私の水洗トイレ使い初めである。

次に先生のお宅に伺ったのは、先生の葬儀の直後だった。白い花々に囲まれて、穏やかな先生の遺影が祭壇の奥に祀ってあった。心底、寂しかった。

あの日が、渋沢先生のお宅をお訪ねした最後となった。

今、我が家の玄関に、先生が私の目の前で認めて下さった、

木枯らしの

吹くだけ吹きし

空の月

渋亭

の色紙が飾ってある。多くの方が目に留めることなくお帰りになる。稀にその前で立ち止まる方もいらつしやるが、「渋亭」の名に「どなたですか」と尋ねる方が大半である。その度、明治も昭和も遠くなったことを実感する。

渋沢栄一の写真を使った新一万円札の発行が近くなった。ホログラフの技術の限りを尽くしたという新一万円札。向きを変える度、写真が光って見えるらしい。

手にする度、

「父（渋沢栄一）が出かける際、母は決まって『今夜はどちらに？』って言っていました」

と笑っていらした、あの日の渋沢秀雄先生を思い出すことだろう。

木根川橋

松林 厚子

NHK総合の「サントのお風呂いただきませす」にさだまさしが出演した。長崎出身のさだが上京して最初に住んだのが葛飾区四つ木の親戚宅だった。四つ木の銭湯を中心に、通った中学校やお寺などいくつかの場所でロケが行われた。番組中に自作の「木根川橋」のBGMが流れた。

さだの「木根川橋」を知ったのは数年前のことだ。木根川橋をモチーフに曲を作ってくれたことが嬉しかった。

私は四つ木から荒川を挟んだ反対側の向島で育った。近所にいくつも幼稚園があったのに、通ったのはなぜか橋の向この木根川幼稚園。通園バスで川を渡るとき、不安で胸がどきどきした。幼稚園に行っている間に、大きな事故がおきてこの橋が壊れちゃったら、おうちに帰れなくなる。今この橋からバスが川に落ちちゃったら、泳げないからあたしは死んじゃう。本気でそう信じ込んでいた。

番組では、私が幼稚園に通園した頃にあった木造の木根川橋の写真もあった。一九六九年に建て替えられた鉄筋の頑丈な橋に比べて水面が近く、あれでは幼い私が怖かったのも仕方ないと納得した。

小学校三、四年の頃荒川の土手に遊びに行つた。今は整備されて運動場になっているが、当時は時代劇に出てくる水辺のように笹が鬱蒼と生い茂っていた。

その日は、京成電車がストライキで鉄橋はいつまでも静かだった。三、四人の友達と土手に座って行き来するボンボン舟をぼーっと眺めていると、A子が、

「今日、電車来ないから橋渡ろうよ」

と言いつ出した。私は心の中で絶対無理、怖い、と呟いたが、声には出せなかった。他の誰かが「やめようよ」と言い出すのを待っていたが、意に反してみんな面白がつて、立ち上がった。

「やろう、やろう」

「川の向こうまで行こう」

走り出した友達にしぶしぶついていき、線路の上に入り込んだ。線路を歩きだすと、河川敷が下のほうに見えた。怖くて足が出ない。先頭を歩いていたA子が振り向くと、

「下を見ちゃだめ。前だけ見るんだよ」

と大声で怒鳴った。

「だって……」

道を歩いているわけじゃないから、下を見ないと落ちちゃう。私は泣き出しそうになった。川の風が頬にあたり、時折強い風が吹くと、体が揺れる。

下に水面が見えて、いよいよ私の足は止まった。明日学校で、「怖がり」とからかわれてもいい。もういやだ。私は開き直って列の一番後ろから怒鳴った。

「あたし、うちに帰る」

前を歩いてきた友達は、意外なことに誰一人として私を嘲笑せず、それどころか、「そうだね、帰ろう」とあつさり引き返してきた。明日、教室でバカにされないとほっとした。

夕飯の時、茶碗を手に持ちながら、

「今日さあ、ストライキだから鉄橋渡ろうとしたけど、怖くてできなかったよ」

と話した。八歳年上の兄が、

「それ、よくやるんだよな。だけど、やめてよかったよ。本当に落ちる子もいたんだから」

「落ちた子、どうなったの」

「知らない」

兄はご飯をかきこみ続けた。

中学二年生の時の初恋の相手は、木根川橋のすぐ近くに住んでいた。一度だけ彼の家の裏にある神社で二人つきりで話し込んだことがある。大好きな人とおしゃべりできて、有頂天になった。高校は、彼と別の学校になった。偶然を装って彼に会えたら、と土手に何時間も座っていた。何日も待ち伏せをして、やっと彼を見つけたとき、足がすくんで声をかけられなかった。彼は四十代で亡くなってしまったので、もう会うことはかなわない。

今でも向島には親しい友人たちが住んでいる。コロナ禍でしばらく東京に行っていないが、

「落ち着いたら、一緒にもんじゃを食べようね」

と約束してある。そのときは、「さだまさし、四つ木に住んでいたんだね」とアツアツのベビースター入りもんじゃを食べながらおしゃべりしたい。

恥ずかしながら

古谷 耀子

令和三年、わが家の幕開けは寂しいものとなった。

東京で職に就いている次女は、年末から宇都宮に帰省して新年を両親といっしょに迎える予定だった。しかし直前になって新型コロナウイルスの感染拡大の情報が流れ、自宅での家籠りを決めた。

こちらではすでに新年の祝い膳用の食材を購入して、冷蔵庫には普段の倍以上のものがギュウギュウに詰め込まれている。これを老夫婦だけで使い切るには、相当の日数を覚悟しなければならぬ。

一月の半ばを過ぎたころ、ようよう冷蔵庫に空きが見えてきた。

久しぶりに夫とスーパーへ買い物に行くと、売り場はすでに正月ムードは去って、節分用の煎り大豆や酒粕などが並んでいる。

（そうか、もう節分の準備なのね）

わが家の「しもつかれ」事情は、結婚当初から夫の母の手作りを賞味させてもらっていた。母が亡くなると、義妹がその味を引き継いで私たちに届けてくれた。

妹の住まいは、宇都宮でも私の家からは少し遠い。これまでは車を運転していたが、昨年の秋に運転免許証を返納して

からはバスを使うようになった。

桜通りのわが家まで来るには、JR宇都宮駅でバスを乗り換えなければならぬ。バスも大変だし、今はコロナ禍で不要不急の外出は自粛を促されている。

そんなことが頭をよぎって少し心が沈みかかったとき、ふといい解決策を思い付いた。今年のしもつかれは私が作ればいいんだ。

そうと決まれば本番前に試作が必要。がぜんやる気が湧いてきた私は、はやる心を押さえて渋々感を装いながらさっそく夫に報告した。

「こんな時期だからA子さん外出するのは大変でしょう。今年のしもつかれは私が作ることにするわ。早く連絡をしなくてはね」

その場でバッグからスマホを取り出すと、それを見ていた夫は一瞬顔を曇らせる。もしかしたら妹の来訪を心待ちにしていたのかも知れない。

妹宅の固定電話につなぐと、電話口には彼女の息子が出て、母親は買い物で留守だと言ったが、そのまま話を続けた。

「今年は私がしもつかれを作ろうと思うの。お母さんにそう伝えてね。今、スーパーに来てるんだけど材料には何を入

れるんだったかしら？ 大根、人参、鮭、大豆、油揚げと……」

「おばさん酒粕を忘れないで。たぶんその店の総菜売り場には調理されたものが並んでると思うよ。それを見るといいんじゃない」

なるほどその手があったか。

私はしもつかれを作ったことは無いけれど、毎年かかさずに食べているのだからその味は知っている。

シーズン近くになれば、友人たちとその話題で一度や二度は盛り上がる。材料の鮭には作り手の思い入れが深いことも承知している。

鮮魚売り場でパックに入った鮭の頭を吟味し始めると、

「頭はやめてね。身だけにして」

夫からの思いもよらない注文が。

食材を一通り揃えて、必需品だと聞いていた「鬼おろし」を探したがそのスーパージには置いてなかった。

帰宅するとさっそく調理に取りかかった。鬼おろしの代わりには台所にあった特大のおろし金を代用したが、目が細かいのでかなり手間取った。

二時間ほどかかって、それらしく出来上がったものをおそるおそる試食してみると思いのほかいける。少しばかり得意になって晩酌の肴としてテーブルに乗せると、夫から

「ちよっと水分が多いかな」

などとひとくさりあったものの、箸は進んでいるようすにほっとする。

翌日ホームセンターへ鬼おろしを買いに行った。いくつか並んでいる中から選び出して手に取ると、竹製の鋭く尖った

歯の部分がイラストなどに描かれている鬼の牙にそっくりだった。鬼おろしとは言い得て妙だと大いに納得した。

初午の日、鬼おろしの扱いに少々手を焼いたものの、しもつかれは大鍋いっぱい出来上がった。普段には使わない益子焼の小どんぶりに盛りつけて、同じ敷地内に住む長女に届けると、

「お母さんが作ったの？」

と、私を見て可笑しそうにしている。きっと、小学生がテストで百点でも取ったかのように誇らしげな顔をしていたに違いない。

恥ずかしながら、宇都宮に住み始めて五十五年目にして初めて作った郷土料理。

その晩、酒粕の香気に高揚した私は、知らず知らずのうちに「県民の歌」を口ずさんでいた。

青い海に囲まれた南の島は

大野 比呂志

Sさんと初めて戦争の話をしたのは、奈良のホテルで会ったときだった。

その夜、各県から仲間（海外研修）が集まるはずであったが、ここへ来る途中、それぞれ寄り道しているらしく、夕飯の時刻になっても三人しか到着していなかった。埼玉のYさん、沖縄のSさん、そして栃木のわたしである。

「Sさんには何回も会っていますが、一度も戦争の話をしたことはありませんでしたね」

「そう言えばそうね」

Sさんはわたしより一つ年上である。多分そうだ。しかし、そんなことどうでもいい。Yさんは戦後生まれだから、Sさんから沖縄戦の話を知りたいとは思わないかもしれない。だが、Sさんと同じ年代のわたしとしては、Sさんがどんな終戦を迎えたのか、この機会にぜひ聞いてみたかった。

「本土では八月が終戦だけど、沖縄の終戦は六月二十三日なのよ。だから、その日が慰霊の日となっているの」

「沖縄戦では、たくさん死者が出たわけですが、先生は、どんなふうに生き延びたのですか？」

思い出したくない過去には違いないとわかってはいたが、どうしても知りたいことだったので、あえて尋ねた。

「米軍は、一九四五年の四月一日、中部の読谷村に上陸した

の。南へ逃げた人もいたけど、わたしたち家族は北部の山の中へ逃げたのよ。でも米兵は山奥まで追って来てきたの」

「最後は、みんな捕まり、トラックに乗せられて収容所へ送られたの。死んだ人もいっしょよ。まるで家畜を運ぶように」
収容所といっても、テントが張られていて、地面に草が敷かれていただけだったという。そこが寝床だった。食事はあつたりなかったりで、みんな痩せこけ、死ぬ人もいたという。

小学校中学年の最も多感な時期に想像を絶するような過酷な体験をされたのだなど、改めて思い知ったのだった。

そして今年（二〇一九年）、会合は別府で開かれた。

Sさんは、わたしのところに来て言った。
「本土から沖縄を訪れる観光客は多いけれど、沖縄の人が見てほしいところは見てくれないのよ」

修学旅行や一般のツアーには、ひめゆりの塔や平和祈念公園の見学はコースに入っているにちがいない。しかし、個人旅行者やサンゴ礁の海を満喫するツアーには、初めからそういうところは除外されていることが多いということか。

「国際通りは、昼も夜も観光客で賑わっているわよ。でも、沖縄の人が住むことが許されているのは、凸凹したごく狭い土地なの。通りの両側には金網が張られていて、その向こう

は全部基地。そういうところをしっかりと見てほしいの」

語気を強めて言ったSさんの思いを、わたしは受け止めかねていた。沖繩に行ったことがなかったからだ。だが、Sさんのことばがわたしの重い腰を上げさせたのは確かだ。

それから数ヶ月後、わたしはさまざまな考えごとに押し潰されそうになりながら沖繩の地を歩いていた。

首里城は、多くの観光客でごった返っていた。その人たちが沖繩の経済を支える大きな要因になっていることを改めて知った。テレビで琉球王朝のドラマを観たことはあったが、「ここがドラマの舞台だったのか」と、沖繩の歴史が身近に感じられたのも事実だ。(その後、首里城は全焼！)

ひめゆりの塔は、実に閑散としていた。修学旅行の一団が去ったあとだったようだ。ガイドの説明を聴いていたのは、高齢女性の一団だけであった。

塔の手前には暗い穴が口を開けている。そこから垂直に掘り下げた洞窟の底の部分がいく分広くなっているように見える。樹木に覆われ、岩のゴロゴロしている山林の中では、容易に発見されない隠れ場所だったのだろう。

そんな中で十七、八歳の娘たちが命がけで負傷兵たちの看護をしていたのだ。想像しただけで身震いし胸が痛くなった。「こんなところで、たくさんの人が死んでいったのね」

涙の混じった老婦人の声に、息苦しささえ覚えた。

海浜公園に行くと、その駐車場には沖繩じゅうの観光バスが集合したかと思われるほど、たくさんのバスが並んでいた。ゆうに七、八十台はありそうだ。

「観光客の多くは、水族館でイルカのショーを観たり海に潜って魚を観たり、海水浴をして楽しんでいたりするようにです」

と、Sさんが言っていたのを思い出していた。

広大な敷地に惜しげもなく豪華な建物を並べた海洋博公園には度肝を抜かれた。国から沖繩への心のこもった贈りものであったのだろう。

平和祈念公園も、人影はまばらだった。沖繩戦で亡くなった二十数万人の墓標が並んでいる。デイゴの赤い花が、何かを語りかけるように、旅人の木陰をつくって、ひっそりと咲いていた。

亡くなった人たちやその遺族の「戦争を二度と起こさないで」という願いは、日々陰りが増してきているという。

那覇のホテルに戻る道すがら、わたしは道路の両側ばかりを眺めていた。有刺鉄線のついた金網は、寸分の切れ間もなくどこまでも続いていた。

その夜、わたしはベッドに入って、子ども連れの家族が繁る木々の枝を払いのけ、必死で山の奥へ奥へと逃げる様子を想像していた。親といっしょだったとはいえ、十歳前後のSさんは、どんなに怖かったことだろう。

海岸の岩に腰を下ろし、恐怖に震えている少女の映像をテレビで観たことがある。アメリカ軍が撮った映像だった。Sさんもまた、母親にしがみついて震えていたに違いない。

米兵は、もはや銃を使うことはなかったという。絶望の淵に追いつめられた人たちに、銃は必要なかったのだろう。Sさんは、「沖繩の終戦は早かった」と言っていたが、それでは、戦争は終わった」と思っているのだろうか……。

隙の裏に、延々と続く有刺鉄線の金網、後継ぎがなく放置されたサトウキビ畑、青く澄んだ美しいサンゴ礁の海に囲まれた島が、交互に浮かんで消え、浮かんで消えた。

他方本願

小林 博

古くなって、いくら磨いても光らないと言って、妻はヤカンを買い替えた。

早速、新品を手にしてみると蓋の締め付けが頼りなく、湯を沸かしてみると警笛も遠慮がちだった。使い始めて三日目、笛の付け根のプラスチックが熱で溶け落ちてしまった。

妻に促されて購入した店に渋々掛け合いに出かけた。面倒な役はみんなこちらに回ってくる。レシートを捨ててしまったので、こちら側にも弱みが無いわけではない。ピカピカのヤカンが買って間もないことを証明してきた。

「普通に使っていたら、警笛が外れてしまった」と、レジで物を見せながら手短かに説明した。直ぐに売り場担当の女性店員が駆け付けたが、聞く耳を持たないのか、手にした事故品を調べるでもなく、早速陳列棚に案内された。

「どれをお持ち帰りになりますか」

彼女は、新品との交換が既成の事実のような口ぶり。

いわくつきと同じタイプの製品ばかりが並んでいて、交換品の選びようもないし、選ぶ気も起きない。やんわりと、胸のつかえを口にした。

「蒸気が噴き出すものですから、火傷の恐れがありますよね」

返事に窮した売り場担当者の知らせで、急ぎよ駆けつけた男性の売り場主任がきっぱりとした口調で、

「この値段じゃあー、国産品は買えませんよ。どの製品と交換しましょうか？」

今どきは外国製が当たりまえと言わんばかり。私も切り出した手前、引き下がるわけにはいかない。

「同じタイプの物とは交換したくない。別の物か、でなければ金を返して欲しい」と、その場で駄々をこねた。

粘った甲斐あって、別のサービス・カウンターに案内されて一筆とられたが、返金に応じてくれた。

「大変ご迷惑をおかけしました」と、頭を下げたのはサービス・カウンターのお嬢さんだけ、現物交換にこだわった二人の姿は見当たらなかった。

妻は「大手柄だ」と、褒め讃えるのでその足でデパートに行つて日本製を買った。値段は返金額の四倍弱であった。

今度こそは騙されないぞ、と現物を手にして入念に確かめた。ヤカンの底には原産地国「日本製」の刻印がある。

取扱説明書が添えられ、メーカーの住所は金物で有名な新潟県、会社名と電話番号も記載されている。その上、型式認証試験の詳細と合格証のタグまで付いていた。

同じころ、目覚まし時計がやけに遅れるので電池を交換したが、やっぱり遅れは直らなかった。

よくよく見ると、最近の猛暑でか、長針が外側に反っていて秒針がそれに乗り上げるので一瞬止まる。それが積もり積もって一晩に十分ほどの遅れになってしまふようだ。

国内の有名時計メーカーのロゴが文字盤に表記されているので、日本製と間違い易い。暑い国で作られたものだから、三か月も現地で使用してみれば、同じ故障が再現したはず、初步的な品質管理に手落ちがあったようだ。

夕食の買い物ついでに、懇意にしている時計屋兼ねがね店の親父を訪ねると、「安いものだから、直すよりも買い替えたほうがいいさ」と、軽い返事。

新品同然の目覚まし時計をゴミにするのは忍びなく、「文字盤の蓋が外せれば、長針の反りを直すか、秒針の先の方をちよん切るかで簡単に修理できる。分解方法を教えて欲しい」と尋ねると、

「プラスチック製の蓋の突起を、半田ごてのようなもので溶着して組み立てているので、バラすと元通りになる代物ではない」

私は納得したが、妻は「もったいない。正常に動くのに！」と諦めきれない。

帰りのクルマの中で助手席から、

「安くできるからって、何でもかんでも、外国で作るのは考えものね」と、ため息まじりに口にした。

「そうだな！、我が家一族はみんなめがね愛用者だから、個人経営店は融通も利くし、腕も確かだし、大事にしなくっちゃあ！」

時計屋兼ねがね店の親父の腕がサビ付くのを惜しんで私は返事した積りだが、受け答えに不満があったらしくきっぱり

と、

「マスクが無くなって、ドラッグ・ストアの前に行列ができていないじゃないの！ 以前はトイレットペーパーだったわ」

普段、干し物を心配し、にわか雨ばかり気にして世相には興味を示さないのに、今日はどうしたのだろうかと助手席を横目に見やった。

「大豆は、ほぼ百パーセント輸入品だそうよ。豆腐だって天ぷら油だって……、納豆もよ」 私の大好きなものをまくし立てた。

「大豆が品薄になったら、今度はあなたがスーパーの前に並び番よ」

当然のごとく矛先を運転席に向けてきた。

実

押久保千鶴子

霜の降りた朝である。

居間の障子を開けると、鳥の羽音がした。一瞬何事かと思いい、ガラス戸越しに目を遣ると、三、四羽の小スズメが一斉に飛び立った。

去った跡に何があるのだろうか……と、不審に思い確かめると、枯れかかったシソが一本かすかに揺れていた。鳥達は、ここにいたようである。が、なぜここに？ という疑問が湧いた。

去年（令和二年）の夏は、庭の至る所にシソが生えていた。連日それをソーメンや冷やつこの薬味に重宝したものである。それが、今年（令和三年）は、五月になってもそれらしき姿は、どこにもみられなかった。あるとき、鳥の生態にくわしい友人に何げなく話してみると、

「それはね、シソの実がスズメの餌になっていたのよ」

と、言う。さらに、

「あなたは、鳥達のせつかくの朝食を邪魔したというわけなのよ」

「えっ！ そうなの」

意外な答えに驚きとまどっていると、

「そうよ」と言うかわりに、彼女は片目をつぶってみせた。

私の認識不足を補うのには余りあった。

夏の間は葉を食し、秋は薄紫色の穂ジソを味わったが、その実も固くなるというの間にか見向きもなくなった。鳥達は、実のなる草や木をよく知っていて、毎年その時機を見逃さないとも言うのである。

鳥について全く疎い夫と私は、毎年春先になると庭を眺めては、

「今年も来て、よく鳴いているね」

「そうだな、じつにいいもんだ」

「去年、ウグイスが来て鳴いていたけれど、いつ頃だったかな……」

「うーん、たしか三月の初めの頃だと思うけれど、うまく鳴けなくて、ホーホケだったよね」

「うん、そうだったな。今年も来るかな」

やや呑気な話を交わしていたが、餌を探しに来ていたとは露ほども知らなかった。

鳥達が来るようになったのは、かれこれ四十年ほど前に、猫のひたいほどの場所に庭を造ったときからである。

私の住む団地は、平地林を住宅地に造成したとあって、冬になると霜柱が立ち、陽が昇ると粘土質の土壌は一面ぬかるみになり困っていた。何とかしたいと思っていた矢先、実家

の両親が手を差し伸べてくれたのである。しかし、昔の感覚で、常緑樹を中心にした庭であった。幼稚園児の息子は、「キヤッチボールができないよ」

と、不満を口にしていたが、子ども達の泥だらけの運動靴に閉口していた私は胸をなでおろしたものである。

庭の完成と同時に、どこからともなく聞こえるさえずりに耳を傾けるようになったが、それも束の間、樹木の生長にも鳥の声にも耳も貸すことなく過ごす忙しい日々が続いた。時折、くちなしの甘い香りに振り向いたり、モクセイの赤黄色の花に秋の訪れを感じるのみであった。

それでも、毎年樹木の手入れに庭師さんはやってくる。今朝も、庭を見渡しては、

「鳥の巣があるね。にぎやかだったろう」

と、煙草に火をつけながら話しかけてきた。夫が、

「そうだね。毎年楽しんでるよ。しかし、梅はあいかわらず実をつけないね。バカ梅なんだろうか？」

と、返すと、

「いやいや、それは鳥が蕾をついばむからよ」

「これも鳥の餌かい」

二人の会話は尽きなかった。年一回の仕事にも拘わらず、我が家の庭の状態を知りつくしている。今日は、隣家の二階の庇に届きそうになったモツコクの芯を止めることを勧めてきた。夫は、仰ぎ見ながら、

「それにしても、でっかくなつたもんだ」

と、しきりに感心していた。

一日の仕事が終わると、あがりかまちに腰かけ煙草に火をつけお茶をすすりながら、今しがた手入れをした場所を丹念

に見渡すのが常である。少しでも満足しないとすぐに手直しにかかる。

その日も、いつものように帰り仕度に取りかかっていた手を止めた。夫が、植えたはずのない枝が目障りだから、切ろうと持ち掛けると、

「うーん、ちよっと切るのを待ってみて」

そう言って待つようにと話した。——まだ十分に生長していないのではつきりしないが、千両か万両であるはず……——と。つまり、正月用の生け花の材料に使われるともつけ加えた。どこかで餌として食べてきた落とし物の実生であるらしい。

その年の冬、生長して赤い実をつけた枝は、千両であった。以来、我が家の正月には欠かせない花材となつている。ならば、梅の蕾もシソの実も知らない所で芽を出しているかもしれない。彼等は、餌を探し、それを食し、種を落とす営みを自然の中で繰り返しているから……。

長い間には、庭の状況もすっかり変わり、枯れて朽ちてしまった木もあるが、朝夕鳥達の声があるということは、この小さい庭もまだ役に立っているようだ。

今朝も早くから、刈り込まれた樹々から、にぎやかなさえずりが響いてきた。

児童書に魅せられて

館野ひろ子

曼殊沙華とも言われている彼岸花は、彼岸が近づくと突然、地中から蕾が伸びてきて、あつという間に真っ赤な炎のような花が咲く。そして墓参り時の景色を演出する。律儀なものだと自然の営みには感心させられることばかりだ。

この花を見るとなぜか、『ごんぎつね』を思い出す。新実南吉の児童文学作品だ。小学三年の授業だったか四年だったか定かではないが、『ごんぎつね』の読み聞かせをしていた時、男の子が突然、「可哀そうすぎるよ」と、拳で机をたたいた時のことが思い出される。

児童文学は学校の教科書にずい分取り上げられている。一時、児童文学に心惹かれた時期がある。今でもその手の絵本を見かけると、つい求めてしまう。先頃も、『ゼロ弾きゴースユ』と『風の又三郎』の藤城清治影絵の絵本を購入してしまつた。これは絵のすばらしさもあつたが。

明治から昭和初期までの児童文学復刻版がでたとき、躊躇うことなく私は飛びついた。昭和四十八年のことである。

小川未明、宮沢賢治、野口雨情、新実南吉等の児童文学者そして芥川龍之介、武者小路実篤その他著名な文学者三十五人の児童文学書を復刻している。初版本そのままの装丁で、カバー付きの本にさらに分厚いボール紙のカバーがしてある。購入してから五十年近く経っていて、カバーは変色して

いる。

宝物のように大事にしていた。本棚にあるだけで満足だった。半分は手付かずで読んでいない。

購入した当時、教師としても充実していたそのころ、教科書に出てくる児童文学にいつも感動し、児童生徒たちにその感動を共感してほしいと願い、その想いが高じて身分不相応な高価な復刻版を購入したのだった。

しばし一冊ずつ装幀やら挿絵やらを漠然と眺めていた。

小さいものは手のひらサイズから、A3サイズほどの大きなものまで、本の大きさは一冊として同じものがない。装幀が芸術的なもの、紙質のすぐ破れそうなのから印面紙のような上等なものもある。本棚にどのように並べても、バラバラで整わない。

大正三年に刊行された、雪花山人の眞田三勇士忍術名人『猿飛佐助』に至っては、手の平にすっぽり入ってしまう小さい本で小さい字、重さは百グラムにも満たない。しかも漢字に全部ルビがふつてあつて、非常に読みにくい。そのうえ紙が悪いし、紙面に空気がない。行替えも一字下げもない。一面びっしり文字で埋まっている。そして句点がないときている。それでも文字が大きく見える、ルーペ片手で読みだした。読みづらかったがそれが実に面白いのだ。後を引くというか読

まずにいられなくなつて短時間で読みきつてしまつた。コロナ禍で家にこもる今、八十半ばの婆がこれらを読破する、最終のチャンスではないか、と考えた。

開いた記憶のない大きくて重いA3判大の芥川龍之介の『三つの寶』は、彼が亡くなる三年も前から企画し、没後発刊されたようだが、画家の本格的なページ分の絵が何枚も入った贅沢なものだ。表紙が布張りのこの本は、重さ一キロ三七〇グラムある。昭和三年の相場で、五圓の値段がついていた。同じころ発刊された千葉昭三の『トテ馬車』は、『三つの寶』よりページ数が多いが九拾五錢だから、いかに贅沢な装丁かが分かる。それにしてもこのような立派な本を企画しながら、出版前に自死した芥川龍之介を理解しがたい。

この『三つの寶』の序に代えて、『他界へのハガキ』と題して、佐藤春夫が書いた扉の文を目にした。

「君はなぜ発刊を待てなかつたのか、君が書けばよかつたのに、僕は君のようにうまく書けないから、書き直しにこちらに帰ってくればいい」（要約）と記している。

ところで佐藤春夫も『蝗の大旅行』と言うタイトルで芥川の『三つの寶』に次ぐ分厚い復刻版があつた。短歌、詩、論説、小説以外でも活躍していた大作家が、児童文学書まで出していたのはこの時初めて知つた。高校時代の先生が、余談だがね、と話してくれた谷崎潤一郎との交友関係とその細君とのあまりにも有名な偏愛が頭をよぎつた。谷崎潤一郎の細君と佐藤春夫が結婚した話だ。合議の上だという。

多くの未読の復刻版が多い中で、何度か手に取つた書もある。授業のための参考資料として重宝した新美南吉の『おじいさんのランブ』などは、装幀、挿絵が棟方志功で、タイト

ルや作者名が縦横にはみ出している仰天する表紙だ。『鷹の巢取り』の作者千葉省三の作品集『トテ馬車』も、何度か開いていたのは中学校に在職していたころだ。

栃木県人の千葉省三の作品は、のちに私自身の文学の創作活動に大きな影響を受けている。

この本から私の幼い日々体に染み込んだ風景や行動、方言を共有していることを見つけたことにある。

作品集の中にある『つけ髭』に三月月さんと呼ばれる神社が出てくる。私が疎開していた祖母の家の裏手にある神社で私の遊び場だつた。省三少年の思い出の神社はまさに、私が小学生二年生の終戦までの一時期を過ごした場所なのだ。あのころの日々の情景、祖母や近くの子供たちの言葉のやり取りが、そのまま省三の作品の中にはあふれている。

読んだときから、千葉省三は私の身近な存在となつた。「おめえ、死ぬつちこと、かんげえたことあつけ」

など、『つけ髭』は栃木弁の見本のようだ。

郷土的童話ばかりのこの『トテ馬車』を編集するにあつては、地方の幼い読者の方言で書かれた投書から、省三は童話の表現に目覚めさせられた、と『生い立ち』の文中に書いている。

郷土愛から最頁をするつもりはないが、彼の作品を読むとおおらかな気持ちになれる。私は比較のおおらかなほうだと思っている。

おおらかすぎて、コロナ禍どころか私の残り少ない人生を終えるまでに、未読の復刻版を読み通せるかどうか心配もある。

祖父母のぬくもり

藤田 香月

私の母方には二組の祖父母がいた。実の祖父母は新潟県の三条市に、もう一方は旧那須郡小川町（現那珂川町）の高杉家隠居に住んでいた。戸籍上のことは知らないまま、私は「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼び、まわりの方からは高杉さんのお孫さん、ご隠居のお孫さんと言われていた。

小川の祖母、高杉キヨは私の母、藤田春江の伯母に当たるが、三条市から高杉政庸のもとに後添えとしてきたのだった。隠居から少し離れた敷地内には、濱田屋という造り酒屋があり政庸の長男が後を継いでいた。子供のいないキヨは、可愛がっていた姪の春江を三条から呼び寄せ、身のまわりの世話や筆などの習い事をさせて、私の父、藤田捨吉に嫁がせたのであった。

祖母とは六才の頃から私が嫁いだ後も、祖母の亡くなるまで、小さな教えの数々と触れ合った想い出は、今もなお私の一部となって共にいる。

昭和三十年前後の頃であったと思うが、私の家の前（国道二九四号）に「高黒」という東野バスの停留所が建った。東野鉄道の監査役であった祖父の計らいであったらしい。私が小川に通うためにも聞いたが、家庭に車の少なかった時代、旧黒羽町の南端に位置する大豆田高黒の人たちにも喜ばれたことだった。車酔いをする私の将来を案じて車に慣れさせる

ためであったが、折角通うなら祖母が教えている茶道を習うのが良いであろうということになった。

六才の頃より十六、七年間通った小川への道は、今も感慨深いものがある。当時はまだ舗装されておらず、バスはガタ／＼とよく揺れた。女性の車掌さんがいて、お腹の前に口の広い黒いバックを下げ、「次、〇〇、〇〇でございます。お降りの方はございませんか？」と美しい声が響いていた。高黒から私の降りる小川町の濱田屋前までは十キロ程で、途中には十四のバス停があった。佐良土光丸山（法輪寺）のご縁日には、車は通行禁止となり、バスは白金までで三つの停留所と箒橋を歩き、関場で待っているバスに乗ったことなども懐かしい。私はバス代を取られないことが多かった。祖父を知っている運転手さんは車掌さんに合図をしたのだった。そのような時のために祖母は、森永キャラメル等二箱を入れた袋をいつも私に持たせてくれた。バスを降りる時お礼を言い車掌さんに渡したのだった。運転手さんの中には乗客が私人になると、ルートを変え隠居の前に横付けする人もいた。小川に行く時、いつも私は風呂敷で作った袋、東袋を持っていた。中には母が用意してくれた祖母への物、時には洗いや張りした着物地や、黒羽の三田眼科でいただいた目薬、のり巻きなどと、自分のためのハンカチ、チリ紙、替ソックス等

を入れていた。バス停「濱田屋前」で降りると、そこには白壁のどつしりとした二つの蔵が建っていた。冬の時事には杜氏の方々の姿が多く活気が感じられた。本宅（濱田屋）の前の道を少し行くと温泉神社に向かう道があり、その東側に隠居のヒマラヤシャーダーが見える。道路から隠居までの露地には梅や柳、泰山木やユズリハなどが並びその奥には、二本の檜葉の木が門のように立っていた。玄関前で私が「おばあちゃん！」と大きな声で呼ぶと、祖母は「おー、おーっよう来たのお、さあさあお入り」と喜んで迎えてくれた。お茶のお弟子さんと同じように、ソックスをはき替え、お点前の道具を整えるのであった。祖母の筆筒の抽斗ひきたし一つには、私の着替用の衣類も用意されていた。（このことは後に私も祖母となり、孫たちを預かるようになったとき、即採り入れることにした）

祖母には、「ハイ！」という返事やおじぎの仕方から、指の扱い方までこと細かに指導された。私には知らず／＼のうちに、眉根を寄せて気難しい顔をする癖があったようで、「ハイ！眉と眉の間を開けて、ふわっと優しく、にっこりとし、ほら眉！眉」と熱い言葉が飛んできた。祖母のやさしくとも念入りな注意があったお蔭で、今の私はあると感謝している。

祖父は囲碁が好きで、着流しでよく碁友と碁盤に向かっていた。書や墨絵にも関心があり、自らもよく墨を磨り筆を執っていた。その祖父から贈られた私にとって初めての着物は、優しいピンク地に宝づくしの模様が美しく、小川町文化祭の茶会には晴れやかな気持で着ていったことが想い出される。

やさしかった祖父と私との時間は短く、喜寿の祝いを迎えた後、昭和三十一年六月に亡くなってしまった。

丁度本宅には、映画のロケ班が入っていた頃であったかと思う。子供の私には家におかれていたが、慌ただしい空気が感じ取れた。南田洋子と長門裕之主演の映画「隣りの嫁」は本宅濱田屋が舞台となったとのこと。

祖母は祖父の位牌に手を合わせながら、隠居で質素なお茶を続けていた。綺麗な布地があると取っておき、帛紗や古帛紗にして、茶巾はさらしを騰たかつての手作りを勧め、「他は節約してもお茶は良いのをいただきますよ」と皆がお稽古を続けられるように配慮するのだった。月謝の代わりに何枚かの手作り茶巾を包まれる方もおられたようである。

祖母は慈いひなみの深い人であった。まわりの人々や命ある小さなものたちにさえも。

幼い私の目に映った一つの光景を思い出す。祖母と母、二人の実家である越後三条の家に、私も一緒に行っていたときのある日、お昼に近い頃、うす墨色の衣の尼さんが托鉢たくはつに来られた。すると祖母キヨは「どうぞ、あがっておくんさい」と尼さんを居間にお通しして、お茶やお汁などを差し上げ持参のお昼を食していたのであった。また祖母は「赤い羽根募金の人を見掛けたなら、一度協力したからしなくてもよい、と思わずに何度でも協力なさい」と繰り返して私に伝えていた。これらの事柄は、後に私をアジア学院へと向かわせ、永い触れ合いを持つことへの導きとなったようにも思われる。

「後添えは前の奥さんより目立ってはならない」と常に控えめな祖母であったが、残された祖父の短冊には、『いざ誰が何と言おうが吾妻は日本一の一の都摩つま』と記されていたのである。

ワクチン狂騒

高橋 暁美

高齢者に対する新型コロナウィルスのワクチン接種が四月中旬に始まったという報道があり、ほどなくして我が市から接種のクーポン券が届いた。五月十日に電話かインターネットで申し込みを開始するとのことだ。

息子から、ネットで申し込みから番号を教えて、という電話があった。

「ありがと。でも今のところ体調が悪いし、しばらく様子をみてからにするわ」

「わかった。でも番号だけ聞いておくから」

番号を告げたが、ワクチンが怖かった。インフルエンザの予防接種をするとその晩高熱に苦しみ、風邪薬を飲むと人の倍以上に眠気をもよおしてしまう体質である。花粉症とも長年つきあっているが最近注射、薬からは遠い生活をしている。

若いころ虫垂炎の手術をした時、医師が言ってくれた。

「あなたは、麻酔薬への反応が普通の人より敏感だから、心しておくようにね」

四月に入ってから、大切な人との別れが重なり、気が滅入ったこともあってか、食欲不振になり体重が三十六キロになってしまっていた。この状態で、治療も短期間のワクチンを、注射して大丈夫な訳がないと、勝手に思い込んだ。

読みあさった週刊誌に副反応の不安をあおられ、ワクチンを打つのはやめようと心に誓った。

お互いにステイホームの友人からの電話が多くなり、今までの時候の挨拶から始まっていた会話の内容が変わった。

「ワクチンは？」

少し様子をみようと思ってもまだ予約していないと言うと

「えっ、どうしてなの」

「早く予約した方がいいよ」

何人もからの、心配する声が目についた。

だんだん友人、知人からの電話が恐怖になった。マイペー

スで空気が読めず本音しか言えない私だが

「ワクチンの件はノーコメントね」

とは言えなかった。

家族の理解もあって「ワクチンは打たない」と決めたはずなのに、メディアの報道を見聞するたびに心が揺らいだ。

八十歳を越えたのだから、死を恐れる気持ちはあまりないが、コロナに罹って亡くなると、骨壺に入って帰宅するとのことだ。

ワクチンの副反応で命をおとしても、僧侶の読経を聞きながら花に埋もれて火葬され、家族に骨を拾ってもらえる。

メディアの数字を見てもコロナで亡くなる人よりは副反応

の死者の方が少ない。接種の後遺症が強く出てもしかたない
と諦めがつく。

六月になると、決心が揺らぎ、「ワクチンを打った方がい
いかな」と考えるようになった。

一人でいる時間が好きだが、顔を見ておしゃべりしたい友
人は何人もいる。友だちの中で私だけがワクチン未接種だっ
たら、行事があってもお互いに気を遣ってしまうだろう。

子どもたち家族との会食もできず、孫たちと本を読みあっ
たり散歩したりも気軽にできない。

一番の決め手は、一歳の曾孫を抱いたとき、私をじっと見
て小さな手で何度もマスクを取ろうとしたことだ。皆には笑
顔でこたえても、大きめのマスクをした私には笑いかけてく
れなかった。

家族中が、無理強いはいしないが、私に打って欲しいと思っ
ていることが折にふれて伝わってくる。

もう観念するしかない。打つことにした。意を決して最寄
りのA病院に申し込み、運よく六月中に接種できることに
なった。

決心したものの落ち着かない日々が始まった。かかりつけ
の病院に行き、しばらく放棄していた健康診断を受けた。種々
の検査もしてもらい、体重を増やすように食欲増進剤をも
らった。あげくに

「先生、精神的なものだと思いますが、時々息苦しくなるの
でパルスオキシメーターで測ってみてください」

と言って医師に苦笑され、自分は神経質というより神経症
に近いと思った。

いよいよ一度目の接種日、お墓参りをし、一週間分の食品

と解熱剤を用意した。愛読紙の川柳欄に（身を清め後は頼む
と接種場へ）という投句を見つけ、私と同じような気持ちの
人も多いに違いないと、妙な仲間意識をもった。

おそろおそろ行った病院は友人が受付をしていて、優しい
笑顔で迎えてくれ、不安がうすらいだ。スタップも全員親切
だった。「接種前後に水分をとることが副反応を和らげるか
ら」と、水のペットボトルを一人ずつに配ってくれた病院の
気配りがありがたかった。

翌日、副反応らしいものはなく、胸をなでおろした。

二回目、一度目より副反応が出やすいと聞いていたので、
居間のテーブルに飲料水、解熱剤、急な発熱用の冷感シート
を並べた。仏壇に丁寧に焼香し、冷蔵庫に食料を詰め込み、
テレビで見た今日のラッキーカラーのオレンジ色のTシャツ
を着て出かけた。

無事に接種した翌朝、頭が割れるように痛く、吐き気がひ
どかった。水分だけ補給してベッドにもどった。夕方になる
とスッキリして起きられ、心配している家族に電話できた。

接種が済むと幾分気が軽くなったが、打たないと頑固に言
い張っていたのに、嫌々ながら打った臆病な自分が腹立たし
かった。今までいろいろな経験し、自分と人を比べたりせずケ
セラ・セラに生きていたはずなのに、世論やメディアに振り
回されて何と愚図だったのだろうかと思いついた。

今はワクチンを接種できたことに感謝しているが、もうワ
クチンの話はしたくない。打たない人に理由を尋ねることな
どせず、希望する若い人が一日も早く接種できることを願っ
ている。

高尾山の思い出

水野 弥彦

世界中、どんな国、いかなる地域でも、新しい年を迎える新年行事は、形や程度は違えども古くから伝わる身近な風習である。一般的な日本人の家庭の場合ならば、年末年始は子供や孫たちが親元に戻って、新年を大家族で迎える。交通機関の帰省ラッシュは、そのための社会現象だ。こうした風習も少子・高齢化などの進展で、その風習も年ごとに変化し、失われつつあるのは実に寂しい限りだ。

とは言え、初詣の風習は健在だ。老若男女を問わず、百八つの除夜の鐘を合図に、その地域の神社仏閣に初詣に向かう風習は、地域ならではの良き風習として、今も守られている。大晦日から元日に掛けては、交通機関も終夜運転で人出に対応する。東京周辺ならば人気の明治神宮、川崎大師、浅草寺、成田山新勝寺などへ足を延ばす人は決して少なくないからだ。初詣では様々なことを祈願する。家内安全、五穀豊穡、商売繁盛、交通安全、世界平和、合格祈願など、人それぞれ祈願する内容は異なるものだ。不思議なもので、初詣の時には多くの人が賽銭箱に入れるお賽銭の額も、心なしか普段より多めに奮発する傾向が見られる。縁起を担ぐためなのか、人間には可笑しな心理が働くものだ。おみくじを引いて「大吉」でも引き当てようものなら、お喜び——早速「御利益があった？」と、宙をも舞うような心境になる。

その境内には、必ず破魔矢や絵馬、各種のお守りなどを販売するコーナーが設けられ、これらもまた初詣客には人気を博す。新年で懐具合が温かいせいなのか、財布の紐も緩む。大方の人たちの場合、初詣に行く神社寺院は、ほぼ固定化している。しかし、特別な事由がある場合には、この限りではない。合格祈願、良縁祈願、病氣回復祈願、最近多発傾向にある異常気象による風水害の予防祈願など、差し迫った事象となる場合には、困った時の「神頼み」なのだろうか、その御利益をまず最優先する。これが一般的な行動心理なのかも知れない。

私の場合には、長年（七十年以上）にわたって登山家の端くれの一人として山登りを楽しんでいるので、やはりその年、一年間の山行の安全とそれに耐え得るための健康維持を祈願する。特に十年程前に家内に先立たれ、独り身になると、まず健康管理を最優先する。何時までも「健脚」を保持しなければならぬからだ。日頃の食生活や運動量、生活態度までも正さなければ、八十路の半ばに入った年齢を考えると、年ごとに厳しさを増すのは必至である。

コロナ禍の前、数十年間は、東京・西部の高尾山に初詣と登山を兼ねて登るのが、習わしだった。標高六〇〇m、十数年前に、あのミシラン・ガイドにランク・アップ。近年は

年間を通じて人気も急上昇、関東地方でも指折りの行楽地の一つに数えられるほどの場所。交通の便もよく、茶屋や土産物店がよく整備されているからでもある。ハイカーにとっても奥高尾から景信山、陣馬山へと続く尾根筋は登山道も良く整備され、コースが豊富で展望も抜群。天候さえ良ければ、奥多摩、道志・丹沢の山々をはじめ、富士山の眺望にも恵まれた日帰りで素晴らしい山旅が楽しめる山域なので、年間を通じて来訪者が後を絶たない。

この高尾山に最初に足を運んだのは、戦前。一九四二年（昭和十七年）五月。当時、居住していた東京市芝区伊皿子（現在の東京都港区）の我が家に奥さんと早くに死別し、子供に恵まれなかった日銀マン（日本銀行行員）の伯父が、大家族の当家に同居。休日で季節の良い行楽日和ともなると、我が兄弟（五人）の中から誰か一人を誘い出し、行楽地に連れて行ってくれたものだった。

記憶を辿ると、確か小学校入学前の五歳、幼稚園児の頃。中央線の高尾駅で下車し、自動車で登山口に向かい、その先はケーブルカーに乗って山頂駅へ。さらに石畳と階段を、伯父の手に引かれて静かな木立の中を歩いて行った思い出が浮かぶ。行き交う多くの参拝客は、戦勝祈願や出兵兵士の安全祈願などのために参拝に訪れていたのであろう。

当の私は、そんなことは全く無縁で、沿道の茶店や土産物店の店先ばかりに目が行き、そちらの方ばかりに気を取られて歩いていた記憶が、高尾山を訪れるたびに脳裏を掠める。私のそんな心境を察してくれたのであろう、伯父は山頂に登った帰途、お目当ての茶店に立ち寄り、食事と兄弟への土産物を買って求めた。特に私には竹製のウグイス笛を

記念に買ってくれたことを覚えていた。

その伯父も、終戦一年前の一九四四年（昭和十九年）春、他界し、この世を去っている。私の幼少時代の伯父への懐かしい思い出の一コマとして、高尾山に足を向ける度に八十年近くの昔の記憶が甦るから不思議なものだ。ウグイス笛は今でも売店で売られている品物の一つで健在である。

八十路に入った五年前の正月明け、両毛線沿線の低山歩きを消化して東京都内のビジネスホテルに投宿した翌朝五時、宿を出発。まだ夜の完全に明け切らない六時半、高尾山口に到着。さっそく稲荷山コースから山頂を目指すことに決め、第一歩を踏み出す。歩を進めるに従って次第に夜が明け、周囲が明るさを増す。振り返ると、八王子方面から朝日が輝き出し、好天の中に強い日差しが周囲を照らし始めた。空気が澄んでいて実に清々しい。「これこそが山登りの醍醐味だ」思わず、そんな感情が脳裏を過ぎる。

山麓から一時間四十分ほど歩くと、山頂直下の最後の急登に差し掛かった。傍らに行く若い女性の登山客が「おはようございます」と声を掛けてきた。透かさず、こちらも「おはよう。どちらから来られたんですか」と返事を返した。すると彼女は「うちのチームの選手五人が、高尾山と景信山と陣馬山の往復コースを走っているの、戻って来るまで山頂で待つんです」。この彼女、実は大手企業的女子ランニングチームのマネージャーT・Aさんだった。山頂到着後、山談義を小一時間、彼女は私の話に強い関心を示し、名刺交換。手紙やメール交換などで今も交流が続いている。この一年後にも自動車のイラストレーターの青年と出会い、同様に交流が継続。ここは「不思議な出会いの場所」そんな気がする山だ。

雑草事情

国井 和子

とにかくすごい。今まで雑草がこれほどすごかった年は無い。毎年夫が手入れをしていた何本かの松も、太い幹の部分はすっかり雑草に隠れて、横に延びた枝だけが、雑草の上に浮かんで見えるかのように見える。

秋になって枯れた草が目立つ。特に葉草とよばれる細長い厚葉の草は、真っ直ぐに立って群をなし茶色になっている。そんな中に、ピンクや赤のコスモスが点々と目立つ。

今年の夏は雨ばかり降っていた。だが雨の前の時期は長く乾燥が続いて、草木が吸いあげる水分も少なかった。そのため何本かの植木が見事に枯れた。枯れた木の幹を、やはり雑草が隠している。

例年計画をたてて、少しずつ頑張った草取りも、今年はまったくできなかつた。夫が急に弱ってきて、その生活の世話にかなりの時間が取られるためか、私も体力的にすぐ疲れるようになつたからである。

家の周囲の道端や近所の家の野菜畑までも、びっしりと雑草に被われているのを見ると、まあ、我家だけではない、と自分に言いよかせ、雑草の風景を認めてしまう。

或る夜、月の明るさに魅かれて外に出た。満月に近い強い光が、家の西側にある築山を照らしている。昼間の乾いた荒れた景色ではなく、光に反射する葉があつたりで、微妙な陰

影を見せている。

二本ほどある細長いツゲの木が、枝の曲り具合からか、人が佇んでいるように見える。ちょうど門の方を向いて、誰かを待っているかのよう。

『雨月物語』の中の「浅茅が宿」には、蔦つたや葛くわが這い茂り、雑草に埋もれた庭の中にある人家のようすが描かれている。そして、樹神ツクノカミとよばれる妖怪が現れるとあるが、我家の庭も様々な害虫の住み処になっていることは考えられる。

月光の下の風流などと、呑気なことを言っている場合ではない。とにかくこのままではどうにもならない。やっと思心して、業者を頼むことにした。

山林や畑の草刈りは毎年人手を頼んではいるが、自宅の庭の草処理を頼むのは初めてである。今まで自分の手で行ってきたものを、他に依頼するのは少々心に引かかるものがある。

近所に住む九十歳になる男性は、手まめに草花を植えたり、雑草取りをしているが、やはり足腰が弱っているので、家人にやめるよう注意されるという。

「だけどね。自分の手できれいにした処を眺めるのが、心の癒しなんだよね。ほかの人がきれいにした庭を見るのでは、やっぱ癒しが少ないからね」

彼はそう言つて、腰を曲げながら細々と作業をする。

まったくその通りだと思ふ。雑草を抜いて土を寄せ、しっかりと支えを作つた庭先のコスモスの群などは、昼下がりのど見に行くと、ひとつひとつの花と心が交い合うように感じる。

毎年真つ白に花をつける白萩は、四方八方に枝がゆらりと垂れて乱れている。アーチ型の棒を中心部分に差して、同じ方向に枝が向くようにした。すると白の豪華さが引きたった。少しでも人間の手を加えると、自然は一層輝きを増してくれる。

さて、どこの業者を選ぶかで少し悩んだ。町のシルバー人材に頼むのが手軽だが、作業の日までに日数がかかる。決めたら即決行したい気持があつて、新聞折込みのチラシにある業者を頼んでみることにした。料金と仕事ぶりが気になるところだが、それは仕方がない。

早速電話をすると、意外に若い職人がやつてきた。

「随分草が伸びたでしょ」

私が言うと、

「どこのお宅も同じですよ。刈つてもすぐ生えてくるしね」
職人はここにこしながら話をする。ついでなので、伸び放題になつている椿と山茶花を数本、剪定してもらふことにした。

次の日、若い職人は早朝からひとりだけでやつて来た。ちょうどその日は、夫の病院検診の日になつていて、午前中留守にしなければならなかつた。

「留守でも大丈夫つす、やつておきますから、ゆっくり行つてきて下さい」

職人の笑顔はいい。車から取り出した剪定鋏が、良く研いであるようなので、安心感が広がつた。

午後一時ごろ戻つてみると、剪定は終つて刈つた草の整理をしているところだつた。暑い日で、マスクの端の方が汗で濡れている。

「草を運ぶのは力が要るでしょ」

「そうですね。このところの雨で、たっぷり水を吸つていますからね、刈るのにはその方がいいんですけど」

作業衣の背中が汗で丸く濡れている。

それから一時間ほどして、仕事は終つた。

荒廃した景色が、さわやかな秋の昼下がりのそれになつた。周囲の草が無くなつて、松の緑が目立つ。松の葉も、いつの間にかほつさり伸びている。夫が具合のいい時は、毎日少しずつ芽摘みをして、形を整えていたものである。

「また仕事がありましたら、頼んでください」

職人は汗の流れ出る顔をタオルで拭いながらあいさつした。代金を支払い、茶封筒に入れた昼食代を渡した。彼は道具を積んだ車を勢いよくとばして帰つて行った。

数日後、いつもの九十歳になる男性が通りかかつて、私に声をかけた。

「うちでも誰かに草取りを頼もうということになつたよ。とにかく頑として根を張つていて、手に負えないよ」

「草もやっばり生き残るのに、必死なんでしょうねえ」

雑草が無くなつて、広く見える庭先を眺めながら、なんとなく二人で領き合つた。

梅雨の雨

国母 仁

雨は嫌いだ。大嫌いだ。

学生時代自転車通学だったので傘を持った記憶がない。傘をさして自転車で乗るのが危険だからと単純な理由からだ。

オレは絶対に傘をささないと言口にする若者が画面で吠えていたのを急に思い出す。理由はタサイシ面倒くさいから、と明快だ。確かに的をいっているかも。

六月に入ると梅雨入りと同時に田植えが始まる。田植えは一家総出の一大イベントだ。

この時は、ごちそうも並ぶ。ぼた餅、赤飯にきんぴらごぼろ、鯨の煮つけ、がんもの甘辛煮。普段減多に卓袱台にのらない料理ばかり。

好物はぼた餅だ。搗き立ての餅にあんこがべったりとくるまっている。まるで、餅がどてらを着ているみたいだ。

この時ばかりは欲を出して五、六個平らげる。「まだ、ぼた餅残っているぞ」

手伝いの男衆が声を掛けてくるとさらに手が伸びる。普段、不愛想な父も何故か頬が緩んでいる。

こんなに沢山の料理が並ぶなら毎日田植えすれば、と子ども心に思ったりしたものだ。

私は苗を運ぶ手伝いをさせられた。舟のような板に苗ののせ田植えをしている人の近くに運ぶのだ。

「おい、こつちに苗をもつてきてくれ」

声がかかると舟板を滑らせる。

わが家の田植えが終わると今度は手伝いに行く。

農家は助け合いながら支えあつてきた。田植えが終わると田の草取りがはじまる。

炎天下での田の草取りは辛く苦しい。田んぼに這いつくばりながら田の草を取る母の姿を見るのが一番厭な想い出として、心に焼き付いている。

なぜ厭だったのかはつきりした答えは出てこないが、泥だらけになりながら這いつくばる母の姿が惨めに思えてきたからかも。母は昼前には田んぼから上がり、泥にまみれた野良着を川で洗い流す。

着替えてから、余程、疲れたのか縁側にゴロリと仰向けになる。一分ぐらいたつと寝息が聞えてくる。

炎天下での田の草とりで疲れ果ててしまったのか寝息が続く。雨が降ると母が家にいるから嬉しかった。

雨降りおことだ。

おことの日には家で繕いものをする。雨は恵みの雨に変わる。老眼鏡をかけても針に糸を通すことができないう時は、私に出番がまわってくる。こういう時は駆け引きをする。

「糸を通したら十円くれる」

「十円なんてやれないよ」

「じゃ、いくらくれるの」

「お金はやれないよ」

「じゃ辞めた」

と口にするが結局糸を通すことになる。

繕いものが終わると肩たたきをせがんでくる。

肩たたきは単純な繰り返しだけに子どもにとっては苦痛以外の何物でもない。

「百回叩いたら十円くれる」

今度は強く要求を突きつける。

母は観念したのか、

「わかったから、早く叩いて」

肩をたたき始めると気持ちがいいのか目を閉じる。まるで悟りを開いた大仏様のようなまん丸い顔になる。

「一、二、三、四、五、……九十九、百」

百回まで続けると、あと百回と粘ってくる。

母の肩はまるで鉄板のように固かった。二百回叩いたら手が赤く腫れてくる。

「お前の手の大きさを叩いてもらうのが丁度いいんだよ」

お世辞で口にしたのかそれとも本音だったのか、母の晴れとした顔を見ると次も叩いてやろうという気になるから不思議だ。当時は、肩を叩くと気持ちよくなるということが理解できなかった。理解できるようになったのは、母の年齢に近づいてきてからだ。

家の近くに店がなかったので、行商人が訪れていた。その中に、頻繁にリヤカーを引いてくる飴売りのBさんが目立っていた。

リヤカーの荷台には飴お菓子が隙間なく並んでいる。

日頃から、青っぱなを垂らしているかっちゃん、リヤカーの荷台の飴に手を触れようとしたら、

「絶対に触ってはダメだよ」

彼女は鷹のような鋭い目を向け威嚇する。目は鋭利なナイフのように黒光りしていた。

ある日、母と彼女が縁側の陽だまりで愚痴を零しあつてた。

「亭主とは、子供ができて直ぐに別れたよ」

「どうして別れたの」

「大酒飲みでろくに仕事もしないからこっちから、縁をきってやったのよ」

「それは思い切ったね」

「酒飲みの亭主なんかいい方がいいよ、すつきりしたよ」

飴を売っている顔とは違う一面を覗かせ、愚痴を口にしていた。

急に雨が降り出してきた。

「行商人にとって一番の敵は雨だね。品物が濡れると売れなくなるから」

確かに行商人にとって雨は最大の敵と、この時気付いた。

彼女はリヤカーの端に積んであるゴムのシートを取り出し、素早く荷台に被せた。私にとっては母と過ごせる恵みの雨だが彼女にとっては地獄の雨だったのでは。

彼女は別れた亭主を呪い、雨を忌み嫌いながら足早に駆け抜けてきたのかも。

黒い雨の中にリヤカーは消えていった。

幸子と私

関根喜久枝

中学生からの親友幸子から電話があった。近況報告の後、「去年同級生のT子とY子が亡くなったのよ」「えー」と私。「T子は認知症で老人施設に入居していたんだけど転倒して足を骨折したの。それからは娘さんが同居してそこで亡くなったの。Y子も認知症で空腹を感じなくなって食事が出来なくなってしまうって、医師から胃ろうを勧められたが息子さんが断り、亡くなった時は三十五キログラムしかなかったの」

二人には何年前前に同窓会で会った。その時の元気な話し声しか想い出せなかった。話を聞いてショックだった。

幸子とは青春時代の六年間いつも一緒だった。なぜか気が合って喧嘩した覚えがない。テストの前には二人で図書館に行き机を並べて勉強した。彼女の家は東京の新宿でカメラの部品を製造していて、従業員十数人雇って忙しく働いていて一階が仕事場で二階が住居になっていた。私の家と同じ様な環境だったが、彼女のお母さんは事務の仕事の時々しているだけだった。ほとんど毎日着物姿で長唄や三味線のお稽古で外出している事が多かった。麻雀が大好きで週に二回は徹夜して朝帰りをしていた。家事は家政婦任せつきりだった。幸子は昼のお弁当に良く缶詰を持ってきて、缶を開けてそれをおかずにおいしそうに食べていた。幸子を作ってきていた。

「夕方になると家政婦さんが、めんどくさそうに明日もお弁当持っていくのですか。と聞くから『いらないわ』と返事をして、学校の購買部でパンを買ってたの」

いつも明るかった彼女からは想像出来なかった。私は母に「もう高校生なんだから自分のお弁当は詰めていきなさい」

と、言われていたが、朝寝坊で遅刻寸前に起きて駅から学校まで走って登校する日々だった。そんな私にあきれていつもお弁当を持たせてくれていた。

ある時、幸子のお母さんが麻雀で朝四時頃帰宅した。すると二階の部屋の窓から近くの工場が、出火しているのを見つけて慌てて消防署に通報した。風の強い日だったので被害が大きくなるところだったと感謝され表彰された。幸子は「麻雀で朝帰りして表彰されるなんて笑話でしょう」と、言っていた。

そのお母さんが四十歳で糖尿病になってしまい、やがてアールツハイマー認知症を患った。幸子は

「母が元気な頃は、『又呉服屋さんと呼んだのか』と父が良く文句を言っていたけど病気になったら施設には入れたくないと言うので家族が交代で看病する事になったの。妹は『母親らしい事何もしてもらってないのに何でこんな面倒みなけ

ればいけないの』と怒っていた」

と、話していた。それでも頑張って介護していたが徐々に進行してしまい、施設に入所する様になった。その時看護師さんから

「家族で良くここまで看られましたね。大変でしたでしょう」と、驚かれた。それから二年程して六十五歳で亡くなった。

高校生の頃、我が家も彼女の家と同じ自営業なのに私の母は朝から作業衣を着て住み込みの人の食事作りや、家族の世話、金属玩具の工場の仕事の手伝いと一日中働きづめだった。そんな母の様子を見て優雅に興味に時間を費やしている幸子の母親がうらやましかった。一度母に、

「何が楽しみで働いているの」

と、尋ねた事があつた。

「もう少し工場を広げて、従業員も増やして……。そう思つて頑張っているのよ」

と、目を輝かしていた。今振り返ってみると、健康に恵まれ生き生きと働いていた母はそれなりに幸せだったと気がついた。十年程前に八十九歳で亡くなった。

幸子が電話してくれたおかげで、昔の事がなつかしく想い出された。私は

「コロナ禍が落ち着いたら遊びに行くね。それまでお互い元気で暮しましょう」

と、声をかけ受話器を置いた。

愛のかたち

神山 暁美

軒下にツバメが巢を架けている
つばさをひろげて飛び回る影が
磨りガラスの窓のうちがわ
ひっきりなしに映りこむ

農道にひとかたまりの燕尾服
囲まれたそのなかに
横たわって動かない一羽のツバメ
これがツバメの愛のかたち

心を受けると書くのではなく
心せつなく足もそぞろに進めない
哀しいほど 愛うつくしい
愛のかたち

ハリネズミは手をにぎるまで
身をこがして舞い狂うはホタル
サソリの愛はいのちがけ
ひとは……

地

村上 周司

トコトコと歩いてきて
空の天使は呪文を唱えると
それがダイヤとなって
落ちてくる
さらさらと風が地を叩く
地は嬉しそうに響かせ
何かをうったえるかのように
ふわりふわりしている
地は新しい命を宿し
地球は
幻想をつくって輝いている
自然はときとして想像の世界が
生まれるのだ・・・
地は営みのなかで
しんじられないような躍動を
くりかえしている
光は雲を地に染み込ませている
それが想像の物体となって
当たり一面
ブツブツと音を
たてているかのように・・・

ぎったんばっこん

こやま きお

バランスが保てないと
海辺に並ぶタンクの水を放流した
利益のためなら風評も汚染もへったくれもない
思わくをめぐってまたぞろ動く水面下
ぎったんばっこん

老人はうざいか 厄介者か
一瞬一瞬輝き今につながっていても
時代おくれで醜いというか
やがてお前たちも老いるのに
ぎったんばっこん

兵器で人を殺すゲームは
死んでも生きかえる妄想を抱かせ
人を殺しても笑っていられる
その背後に忍びよるのは誰だ
ぎったんばっこん

ラムネをのんだ日
気泡となって消えるだけの
彼の上昇志向をさげすむ
安っぽい感情を飲み捨てられず
俺もまた
ぎったんばっこん

釣り合う日常などなかったと
懲りない面々がせめぎあう
いつの世も食うか食われるか
腹の探り合い
ぎったんばっこん
ぎったんばっこん

水無月

森 秀夫

霧雨に煙る羽黒の山は
あじさいの花がよく似合う

真如苑栃木別院にて独り想う
日々参拝に訪れる多くの人々
業因縁を断つ為か

苦しき故の祈願参拝か
その背中は何を語っているのか

人は皆何かを抱え背負い
苦悩の海に生きている
私もまたその一人
この境内に立ちひたすら祈る

いつもいかなる時も
この別院は羽黒の山は
温かく迎えてくれる
身も心も癒される

御教えに結ばれて
生まれ変わるんだ
大乘利他に徹して生きろ と
羽黒の山が語りかけてくる

ゆずの里 上河内
羽黒の山はやさしい
あじさいの花がよく似合う

秘密

松本ミチ子

学校の帰り道

偶然父と出会った

「いま 帰りかい」

「はい そうです」と

返事したものの

僕は

父の後ろにいる女の人が

誰なのか気になっていた

夜になっても

父は帰ってこなかった

母は知ってか知らずか

いつもと変わらず

父の食事を作っている

翌日

同じ場所で女の人は

僕の横を通り過ぎて行った

振り返って

「あら いまお帰り」と

不思議そうに僕を見る

瞬間

表情をこわばらせた僕は
帽子を取って

「はい、そうです」と

直立不動で答え頭を下げた
だが何故か
不意に涙が零れた

僕

小学校一年生

秘密はランドセルより
重かった

河骨川

高田 太郎

「春の小川はさらさらいくよ」の原景は
東京の渋谷駅の近くだそうだ
コウホネの黄色い花が見どころの
河骨川という小川だったという
東京オリンピックの工事で
暗渠となってしまったが
歌に咲く花は消えることはない

ぼくの生まれは宇都宮の東の在だが
ぼくの家の前は田んぼにも
コウホネ群生の小川があった
その水草がコウホネという名だと知ったのは
後後のことだ
ぼくらはカワボウズと呼んでいた
水浴びや魚釣りには邪魔物
引っこ抜いては土手に投げ捨てた
女の子は花梗を折って首飾りにして
嬉々の声をあげてはしゃいだ
やっどふくらんだ小さな胸に
ぼくの目が止まったのも
その頃だった

ふるさとの花の小川に
感傷はつきものだが
今もなお
老いのかすみ目に
河骨の花に群れつつ
メダカが泳いでいる

ワンヘルス（一つの健康）

貝塚津音魚

ワンヘルスという言葉がある
この地球上でも家畜も野生動物も
みな健康でなければならぬという意味だ
今 人は新型コロナにあえいでいる
世界の死者470万人超
デンマークではミンクがコロナを感染させると
人間のいけにえに1700万頭が殺処分
豚 豚コレラCFS（豚熱）日本では25万頭
ベトナム400万頭が殺処分となった
更に中国からは2億頭に及ぶだろうと
豚肉が値上がりしたと風が嘆く
既に中国で蔓延し始めている
AFS（アフリカ豚熱）はワクチンすらない
鳥インフルエンザ 日本では鶏987万羽が殺処分
間もなく全国で1000万羽まで達すると
地上も空も世界中がウイルスの恐怖に晒されているのだ
ウイルスは変異を繰り返し より感染力の強いものに
一方で変異のコピーが誤って自壊し消滅するのだ
それが五波まで隆盛と衰退を繰り返し これからも

この環境を作り出したのは一体誰なのだ
ジャングルを焼き尽くし

油とプラスチックで海を覆いつくす

空を海を陸をかけまわり 経済優先の炎を吐き続ける

シベリヤでは凍土が溶け出し地球に多数の穴が開きだした

地球温暖化・海洋汚染・森林破壊・絶滅の脅威

この青い地球を一体どこの宇宙に流離さまよわすのか

人も家畜も野生生物も自然環境も全て健康まじまじにならなければ

私たちひとり一人がほんの少し意識を変え

経済や利便性に囚われる生活に

「ノーサンキュー」と言えなければ

生態系を維持することに繋がらない

この青い地球の樂園を守れない

ワンヘルスを合言葉に！

秘 密

螺 良 君 枝

小学校の南の
仁ちゃん家の田んぼ
藁塚に寄りかかつて
禮子さんと
好きな男の子の名前を
打ち明けた

禮子さんは 良ちゃん
私は 孝ちゃん
絶対絶対 誰にも内緒
指切りげんまんして
耳打ちしあつた

折から山の端にかかる
真つ赤な夕陽が
上気した二人の
耳朶や頬を染め
ときめく胸を照らした

生涯交わることのなかった
四人を結ぶ平行四辺形
ふるさとに帰るたび
約束の欠片を探す

学校も田んぼも
とうになくなり
十歳の幻影が
ふわふわと飛び交っている

住居

戸井みちお

お宅はどちらにお住いで

いやああー わたしですか
目下は…

女房の尻の下 ですよ

え…？

ワアハハハそりやあいい
女房の尻の下ですか

いいですね いいでしょう

まあねえ

ぬくとくて

やわらかで

ふわふわで

それから

? ? ?

いいにおいで…？

まあね
住めば都ですかー

ぜいたくですよ

ぜいたくー

女房いて何の不足が
あるものか ですよ

そうですか

そうですよねえ

何の不足か…か

しいて言えば

重いのが 玉にきず

か

雨の庭より

大島 孝子

午前四時庭にあさがほひらきそめ寂かに今日といふ日はじまる

しつとりと着衣しめらせふりそめし雨の涼しくしばし草とる

咲きそめし額あぢさゐの一枝を雨の庭よりわが床の間に

敗戦忌ひとりの叔父を想ふなり この世で一度も逢へざりしなり

亡き人をしのぶ時間も多く持て疫夏のお盆はしづかにすぎて

合歓の花の刷毛のやうなるうす紅をゆらしゆらして白雨がすぎる

今はまだ首相への不満遠慮せず言へる国なり日本国は

帰国を怖れ亡命を請ふアスリート独裁者の国多くなりきて

入れ墨タトウとはおしやれのひとつか張りのある若き美しき肌を汚して

オリンピックは遠くに華やぎ終りたり われら寂かに自粛の秋へ

明日へ

神谷 由里

くさぐさのもの出でてくる納戸整理われらの若き日子ら幼き日

夫とわれ幼き子らも装ひてさとを訪ひたる昭和の正月

祖父も健やかに兄と兄嫁おほぢちと子らわれらも古りし色の写真に

嫁いそぎ来て五十とせ余りはるかにも思へて明日へ続きゆく日々

遠くまで麦の畑と桑畑写真にひばりの声も思はる

オリオンの光に思ふ寒き夜も車検整備に夫は勤しみき

五十三年ここに自動車整備して八十歳をまはりし夫よ

コンプレッサーの音立てリフトに車上げてオイル交換夫は生き生きと

やがていつかもう近々か店たたむ日の来るを思ふ夫も私も

健やかに新しい暮らし始めませう夫と語れば力湧きくる

草の鐘

唐澤るみ子

飛行機にしがみつく人アパートにひとり死ぬ人 この夏を泣く

荒ぶると察知して去る鳥たちの声も洩らさぬその影炎ゆる

とけ堕ちし虹を踏む兩人の世を流れ流れていづこへ下る

いちまいの切手を手紙に貼るやうにマスクを人間ひとにも貼るべしの世や

名も知らぬ小さき野草よ膝つけば野草は立ちて我を見つめき

角出して勇みゆくなりかたつむり朝石の上夕石の下

この星よおしこの星よおしと鳴きつづけもういない今朝つくつくぼうし

何を告げ何を言はずに生きよとて老いし夫婦をつつむ菊の香

びんに挿ししつりがね草の釣鐘がかすかに鳴りて鳴りやまぬ夜や

涙とは人間ひとのうちなる海といふ見渡すかぎりかなを愛しむなみだ

渴きゆく

神野 規子

臘梅のほのかな香り庭にみち令和三年動きそめたり

月刊誌やめて購ふ單行本寂聴いわ曰く笑つて生きよと

渴きゆく心に渴きゆくからだ履く布靴の足にやさしも

わが家に住みし祖父母の長火鉢灰に埋もれて過ぎし日はあり

勝者より敗者に心寄りゆくはわれにも秘むか敗者のところ

たけき者ついには滅ぶならはしのその哀しみのなかにたつ人

庭先を飛ぶ揚げ羽蝶なにを語る数日われにまつはりて去る

いつまでもウイルス去らぬ晩夏なり行先き見えぬ時が居坐る

深みゆく秋に僧侶の説く言葉として同ぜず身に沁みて聴く

何もかも忘れてしまふ寂しさや揺籃の頃に戻つたやうな

蝶ともなりて

島内 美代

牡丹がさらりと崩るる昼下り息子は妻の終焉つげく

堪へてもこらへても涙娘とも思ひてゐたる嫁に逝かれて

わが誕生日祝ひて三日嫁が逝く嘘だ嘘だとわが声が泣く

星になるそれさへ信じ仰ぎみる涙に滲む人がゐるゆる

雨のまま暮れたる夜は灯りさへ湿りてきたる嫁が旅立ち

弾かれざるグラントピアノは黙しゐる月光照らす嫁の部屋内

いく冊を読みし二人の読書会嫁との時間天恵ならむ

庭の花さには咲かせて待ちてゐる嫁が来るはず蝶ともなりて

飛べざるも机上にわれを見守るやコロナに籠り折りし鶴たち

とき色の春の夕焼け鳥らは明日へとつなぐ埒に帰る

いつの日か

鈴木 芳子

原色の彩きわだたせ公園の遊具は春の雨に濡れおり

青空に白きクルスの輝ける路地裏にある小さき教会

梔子の白く匂える散歩道マスクはずしてしばし憩うも

漣もなき池の面にしらしらと影を映せる雲の曼荼羅

いつのまにか漂う雲の消えゆきてフェルメールブルーの空のひろごる

あまたなる梅の実のなる木下蔭 冥想するがの石の仏は

読点のごとき虫なり開きたる活字の上を自在に飛ぶも

小さな秋を送ってくれた女ひとまっかな紅葉を手帳に収む

「希望」とう宇宙ステーション巖かに見あげる空を渡りてゆきぬ

いつの日かコロナを語る日のくるを信じて中島みみゆゆきの「時代」を聴くも

星の行く末

園部 恵子

星と人との掬いつしか破れたり 猛暑 豪雨 ウイルス蔓延

昏迷の街に打ち臥し雨享くるマスク白々人形ひとがたに見ゆ

ウイルスが人の動きを抑へ込み地球の大気澄みしとぞ言ふ

リモート 自粛 人流 黙食 ウイルス神話を伝ふる言葉

「けいけんをしたことがない」 十二文字荒む氣象に多に冠され

空回りしてゐるカーボンニュートラル 水惑星は沸沸として

温暖化は人の所業ぞ 災害に牲欲にへりやまず倭山河は

来るべきところまで来て見えざりし 人の行く末星の行く末

地上より引き上ぐるも良し月読のひかりひびけばそれに応ふる

濁る星に手洗ひ 消毒 うすれゆく生命線のいまどのあたり

アフガンに死す

高橋 淑乃

一介の日本人医師中村哲氏アフガンに死す夢も空しく

アフガンに命をかけたる中村哲氏水路をひらき緑地増やしぬ

地球儀にアフガニスタンを探しけり政権崩壊のニュースをききて

アフガンはロシア 中国 印度と接し世界の屋根とふ葱嶺^{そうれい}地方

タリバンが首都カブールを制圧し勝利宣言八月十五日

旧政権ガニ大統領は出国し国民を捨て身を隠しけり

2001年の米国同時多発テロ ウサマビンラディンを思ひ出すなり

米兵の撤収開始に乗じたるタリバン入城にアフガン揺れる

パキスタン アフガニスタン タジキスタン(タン)の付く国あまたありけり

イスラムの教へのゆるす範囲でと女性に時代錯誤のタリバン

いのちの余白

田村世津子

石楠花と芍薬の緋の溶け合ひにいのちの余白染まりてゆくも

魅入りたる定家様やうなる歌切の切箔にとどくいかづちの光

長刀の弧は宙を切りシテの舞ふ舟弁慶は佳境に入る

正宗の刃文妖しく樋は細く恍惚の美に心音止まず

捜したるブリキの箱にひそと棲む思い出ひとつひとつのたましひ

やはらかな光満ちくる雨後の朝注ぐ湯呑に茶柱ふたつ

ときをりは志ん生の落語に癒されて笑ひのクスリのみど喉落ちゆく

地下鉄の階段さささと下りてくる垂直の脚ハイヒールの赤

言へざりし言葉沈める濠の面に花いかだ負ひ鯉のあざとふ

熊谷草むれ咲く紅のふかきなり討たれし敦盛の流す血のいろ

夢の欠片

福澤
悦子

コロナ鬱遣らはむ 我をときめかせ過ぎにし夢の欠片かけら拾ひて

覚めぎはの夢の欠片か煌めきて風のかたみと消え去りし影

我が肩に木洩れの日影降りこぼし過ぎし風ありき心震ひき

この人こそ一生の伴侶とときめきし日もありき傍らに夫は熟寝す

寛容なこの人ありての自在なる我が生なりけりただ有難し

堅実な優しき夫の掌中にありてこそ平穏な一生なりけり

ときめきつほめきつ過ぎ来し八十年燠のごときを今も秘め持つ

燃え尽きし蚊遣りの灰の白き渦爽味のあはき闇に浮き立つ

中心へと渦なし燃えし蚊遣火の途切れ途切れの灰しらじらと

燃え尽きし蚊遣りの灰の渦の白ひとの命終のごとも淋しき

三子洲

増田 律子

海境を越えゆく船は水脈^み曳きて島影碧き隠岐に近づく

真白なる高速船に風受けて島が見ゆるのこゑに勇みぬ

甲板に港望めば三子洲^{みつこしま}隠岐に憧^{あぐか}る胸ぞ昂なる

畏れつつ降り立つ隠岐の岸壁に行き交ふ人ら潮の香纏ふ

後鳥羽院配流の島に遺さるる遠島百首はいまも胸打つ

言の葉に貴種の名残りを思はする公家訛り聴く流人の島よ

上皇に馴れ親しみて後鳥羽んさん幾代^つ歴れるに呼び名変はらじ

夕映えに炎立ちたる赤壁の地霊鎮めむ隠岐の汐花

やはらけく海霧被ふ草丘に嘶く馬の影沈みゆく

ぬばたまの黒毛の仔馬青草のしとねに生れて隠岐に存へ

ありがとう

増淵 弥生

喉通るゴクゴク白湯の一杯に新しき朝のありがとう言ふ

ありがとう庭に数多のつゆ草も絵の具にしよう友への文の

町内を遠慮がちな豆腐売り施設の生徒のありがとう見ゆ

里山のめぐみ大きな箱に詰め訪ひ来たる友いとありがとうし

わが庭のシンボルツリーありがとうたく山桃に憩ふわれも小鳥も

庭すみの胡瓜三株の交配に精だす蜂にも有難みあり

難解なクイズ如何にせんAIのロボットに問ひ思はずサンキュー

職退きてゴミの分別ゴミ出しと手伝ひくるる夫ありがとうし

ドミソミド久しく集へぬコーラスのスマホに届くこゑありがとう

コロナ禍もそれなりけりな平凡に夫と何気無き日々を感謝す

蜻蛉せいれい

山崎緋紗江

明け方の庭にあまたの翅はぐろ黒とんぼ神の使ひは秘めやかに舞ふ

いと細きんりよくしよくき金緑色の胴をもて蜻蛉は舞ふ萩の葉群を

明け方の庭にてわれに何告げむ絶滅危惧種の蜻蛉のむれ

ヒトもまた絶滅危惧種のおそれありや変異ウイルス地球温暖化

見まはせばプラスチックのごみの増ゆ自粛生活長びくほどに

海原の長き歲月プラスチックは溶けることなく魚うをからヒトへ

生命のふるさととは深き海のなかマリンスノーのあやに降りしく

生き物のすべては同じ祖おやからとふ蟬も鴉も鯨もヒトも

雑木々の伐り払はれし公園に蟬のこゑなき夏は過ぎゆく

庭さきのむさしのはぎの花群の香りを揺らし秋風ぞ吹く

つきかげ

横山 岩男

高窓をとほして差せる月影のベッドの妻の顔を照らせり

つきかげの差して清けし寝静まる街中の空一時照らす

髭剃りし顔を見やるは十日ぶりさして瘦せたる感じのあらず

ゆくりなく眼のゆく対ひの病棟に人の動きて散髪する見ゆ

呆として見てゐる病棟に一筋の光まぶしく日の入らむとす

帰るべき家ありて人は帰りゆく病院勤務を終へし人たち

つぎつぎに車の去りし駐車場路面静かなる安らぎに充つ

朝明けて車のあらぬ駐車場雨に濡れたる路面輝く

家にゐるが一番といふ旅にして家恋ふ妻の足のおとろへ

人去りて静かになりしわが廻り霜月半ば旅に出で来ぬ

始発 式

吉田 良二

大鈴の絶えぬ響きや初詣

立春や今朝の蛇口の上向きて

畦道をたよたよ飛んで初蝶来

更衣背筋伸ばして門を出づ

紫陽花や色とりどりの傘の列

断捨離や父の遺愛のサングラス

鶏頭や見上ぐる山に不動尊

天高し掛け声あぐるグラウンド

チラシ舞ふシャッター街やそぞろ寒

霜柱見らの踏み跡親の跡

日向ぼこ

人見 靖子

争うてすぐに親しき鴨の群

小春日に買へり七色唐辛子

昔むかしの話のつづき日向ぼこ

鮭の屍の上を豊かに水流れ

雪だるま千作りても余る雪

金剛の桜と言へり冬木の芽

冬山へ向かひて呼べりお父ちゃん

雪しまき耳がとがつてしまひけり

晴れのち吹雪舟上にうづくまり

はなやかに粒不揃ひのぼたん雪

昼の月

大須賀邦夫

去年今年諸行無常のコロナ禍よ

雲の峰金子兜太の喝破かな

雨後朴は赤錆色に項垂れり

夏寒し五輪訝る世論かな

コロナ禍も異常気象も急く蟻よ

野分去る深夜放送未明には

絵葉書のしおり昭和の秋桜

昼の月見えます向田邦子さん

露の世の老骨未だに存えて

頬被とりて家路の老夫婦

猫と暮らす

石井
光

裏声のからつ風ゆく跨線橋

あえかなる猫の鈴の音冴ゆる夜

似顔絵の並ぶ廊下の春休み

忘れたき涙ふらここ強く漕ぐ

土砂降りの後のぴいかん夏来る

往診の道にも慣れて麦の秋

ハモニカのか細き音やつゆ寒し

猫撫でて過ごす一日の秋思かな

石塀を折れて裏道虫時雨

当直の廊下の長しきりぎりす

数多の句

斎藤 光星

手に取りて土の匂へる春の草

花の散る手鏡ほどの潦

無住寺の狸の出づる木下闇

諫言をさらりとかはしソーダ水

遠雷や打明け話搔き消され

思ひ出を身近に点す盆提燈

纏るるかいや別るるよ秋の蝶

捨てがたき書込み数多古曆

げんまんの指しなやかに毛糸編む

生くるとは数多の別れ冬銀河

ひやういふ

善林 真琴

以上以下当分いまのままでもいい

多数決いつも残尿感がある

何かが変わるサルビアはいま真っ赤

水ごくりただ人間でいたいから

さりげなく容赦なく歳ひとつとる

許されよ一行だけのひとりごと

丁寧に飲んだ葉がなぜ残る

これからも昭和のままにいる予感

昭和ひきずる追憶はほろ苦い

もうスマホ閉じてごらんよ蒼い空

神様の輪郭

石寄 敬子

神様の輪郭なぞる年始め

蠟梅の決意が咲いた月曜日

満足のいく卵焼き春うらら

身の丈を枝垂桜は心得る

またハイと言ってしまった今日は凶

紫陽花になって優しい通り雨

逃げ込んだプリンの底はほろ苦く

鯛雲しがみつきたいものもなし

私のエンドロールは見栄っ張り

言い訳を見つけてあるく年の暮れ

記憶遺産

柳岡 睦子

行進曲響くと大地まで歩く

ハッピーが連鎖反応して慌て

お付き合い上手な雲の大きな手

荒波を静める沖に母の顔

蟻でなく象でもなくてひとかけら

老い方のシミュレーションへ弾む脳

ハッシュタグ僕には僕の住む宇宙

未枯れた野山に答え落ちていた

お取り寄せしたい平凡だった日々

コロナ禍を記憶遺産にしたい年

ヒーロー

早見 千代

立見したウエストサイドストーリー

ローマの休日新聞記者に胸がキュン

孫悟空三蔵様の供になる

どうしてる紙ヒコーキを飛ばした子

今は亡き書の先生の手本見る

アフガンに偉業を成した日本人

栄一にバトンを渡す諭吉さん

キング牧師アメリカはまだ混迷中

ガンジールの糸車から独立へ

イエスの御足髪で拭った熱い人

秋風

水上 義明

秋風に閉ざした脳をノックされ

ブランコが落葉一枚のせて揺れ

柿熟れて先ずはカラスが試食する

喧騒を逃れ佇む里の秋

ファッションが短い秋を悔しがる

涼しさを味方にダッシュ受験生

散歩する犬のベストも冬模様

丹精に応える菊の真っ盛り

秋風は大波小波ススキの穂

人は肥え日毎に細るカレンダ―

ハイヒール

野口 直子

団栗を拾う縄文への誘い

マスクした顔しか思い浮かばない

彩りのように置いてるハイヒール

天候を思い出せない別れた日

大海へ出てから井戸を恋しがり

子供でも言えるごめんねまだ言えず

大好きな道草をする帰り道

お仕舞いの一句に時間掛かりすぎ

温度差を埋めよう話しかけてみる

どんよりとした日は省エネで行こう

星光る

松本とまと

巨星墮つ胸へぽかんと空いた穴

吟醸酒もつと話がしたかった

まさかってまさか思わぬさようなら

耳底へ残る優しいビブラート

ニコニコの笑顔追慕の海にいる

新しい日常千の風浴びて

目に染みる花の白さよ白ヤシオ

思い出へ「いいね」心へ打つメール

次の世で会って飲みたい天の川

星光る振り返るとき想うとき

なで肩の色気

三上 博史

なで肩の色気を見せるマヨネーズ

漬物石じっとしてるのが仕事

寝返りを打っても今日が絡みつく

コルセットがきつすぎないかバイオリン

そこそこに長生きしたい抹茶味

十月のゴキブリ思弁的な夜

水面を鴨はアイロンがけて泳ぐ

置き去りにされて張り切る掃除ロボ

一日のやる気始まるマグカップ

迷宮はクリスタルです霜柱

特集

ときめいた時

「まほろば」に魅せられました

石寄 敬子

女子高校生にとって男性教師はデッサンに使う石膏像のよ
うなものである。美術の時間に石膏像を囲んでデッサンの練
習をしたことがあるだろう。石膏像はあらゆる角度から視線
を浴びせられ、静止していなければならぬ。女生徒は気にな
る教師に狙いを定めると、身近な異性としてどんな生き方
をしてきたのか、また男性の価値とはなんなのか、観察を開
始する。

高校一年の七月、学校の掲示板に尾瀬夏山キャンプの案内
を見つけた。高校生活の波に乗れないまま三か月が過ぎてい
た。この辺で新しい風に当たりたかったのだと思う。教師十
名生徒二十名位バス一台貸し切りの二泊三日のキャンプだっ
た。

一日目の夜、同じグループの二年生に誘われて先生のいる
パンガローに遊びに行く。他にも生徒が来ていてパンガロー
は賑やかだった。私は空いているところを見つけて座り先生
の顔を順に見る。見たことがない先生が何名かいた。二年生
が私の知らない先生に質問する。

「奥さんとはどこで知り合ったんですか」

「ん、家庭訪問で」

キャーッと歓声があがる。まあ知っていて質問していたの
かもしれない。奥さんは教え子のお姉さん、家庭訪問でひと
めぼれ。三人の子持ち。ひよろつとして口下手、黒縁眼鏡。
どちらかというと声がかげづらいタイプだ。

帰りのバスの中で、二年生がこの先生に歌のリクエストを
した。曲はさだまさしの「まほろば」万葉集をモチーフにし
た悲恋の曲。自宅に帰ってから先生の歌声が耳から離れな
い。翌日新星堂に行つて、さだまさしのLPを購入。

新学期が始まる。二十分早く登校して渡り廊下から教師用
駐車場を見下ろす。先生の車は白のブルーバード。ナンバー
もチェック。授業の移動で先生が渡り廊下を通るとき、時間
を合わせてすれ違うのが日課になった。

二年になつても先生に教わることはなかった。私はカセツ
トレコーダーを他のクラスの友達に預け、教壇の目の前の机
のフックにかけてもらい先生の英語の授業を録音した。

三年の秋、仲が良かった副担任の先生に

「私が志望校に合格したら〇〇先生に何かメッセージをも
らってください。お願いします」

と手を合わせる。副担任は承知したと親指を立てた。卒業
式に副担任から渡された小さな紙片には「未来に向かって羽
ばたいてください」と書かれてあった。一度も話すことのな
かった先生。あの当時三十八歳だった。

先生、羽ばたくことをすっかり忘れていました。今からで
も遅くないですか。では満を持して今羽ばたきます。

宮大工 福富 陽子

大工仕事が好きである。家の中の棚や机をはじめ大抵のことは自分で作ったり修繕したり。たまに趣味を問われ、「DIY一般。左官関係、ペンキ塗り」と答えると相手は破顔して本気にしない。まともに話が合う人はごく稀である。

最近のヒット購入商品は電動ノコギリ。これがまた生活で豊かにした。厚さ十二ミリ以上のラワンコンパネも楽に裁断できる。はじめてインパクトドライバを手にした二十年前も日々満たされたものだが、あのとときの欣々然な気分には匹敵する。

それにしても、どんなに大工仕事が好きといっても所詮素人なわけで、鉋の刃を鉋台から取りはずして研いだりするのには年に一度程度。これでは大工の端くれにもなれない。

木工に興味を持った原点は、子どもの頃家族で行った日光豪華精巧な装飾を目の当たりにした瞬間だった。陽明門や唐門で戦慄が走り、東照宮内の天井装飾においては天国にいる気分だった。素直に「懐かしい！」と叫べばよかった。人が聞いても歩き疲れた子どもの戯言で済んだ。

今もときどき思う。前世であの仕事を成し遂げたひとりだったのだろうか。以来、他県の国宝や重要文化財の前にしても、感動に打ち震えたなどの現象はこの身に起きていない。

そういった神社仏閣の彫り物や装飾物を手掛ける人を「宮大工」と呼ぶと知った。中学を卒業して丁稚になり修業すれ

ば、やがて念願の大仕事ができると思っていた。

ところが早々に、女の人は宮大工にはなれないとわかり、相当まいった。大工をしていた近所のおじさんによると、その仕事は力が要るだけじゃなく、女の人は土俵に上がれない大相撲と同じで、男の人だけの仕事だという。当時は男女平等だのジェンダーレスだのといった言葉や発想もなく、受け入れるしかなかった。肩を落とした日々が続いた。

小学校の卒業文集に、将来何になりたいかを書くページがあり「警察官」と書いた。すると先生から「女の人は警察官じゃなくて婦人警官というのです」と訂正された。宮大工になれないなら何だってよかった。たまたまテレビでやっていた「ありがとう」というドラマで水前寺清子が警官の役をやっていたから書いたままで、本心は書けなかった。

今となれば宮大工になるための専門学校もあり、そこでは女性の生徒は珍しくはないと聞く。かといって全国的にも女性の現役宮大工の数は十人に満たないのが現状のようだ。

「何かを始めるのに遅すぎることはない」このフレーズも耳の奥に潜んだままだが、それへの情熱は、はるか昔に泡沫となり手放した。

それでも、ホームセンターで手軽なグラインダーの購入を思案したり、ネットで斬新な工具を見比べていたりすると、からだのどこかが疼き出す。この疼きが疾病化するようであれば、とり急ぎ宮大工の丁稚先を探すかもしれない。

中野サンプラザで

神谷 由里

その日、平成十二年七月二十八日、電車に乗っていました。よく晴れて、風の心地よい日だったと思います。両毛線で小山に行つて、小山から「はしばみ」の星野清先生と稲葉尚子先生に從いて東京に行くのです。東京では「はしばみ」の白石光子先生が待つていてくださることになっています。ずいぶん前のことなので記憶もあやふやなのですが、思い出して書いてみたいと思います。

中央線の高円寺の駅で降りたと思います。駅から少し歩いて短歌新聞社に着いて、石黒清介先生にお会いしました。星野先生がいろいろ話してくださったように思います。それから中野サンプラザに行つて、白石先生と新アララギの方々と合流したと思います。

その日は短歌新聞社主催の「歌人夏の集い」が中野サンプラザである日です。そしてその前に、第十二回「短歌現代」歌人賞の授賞式があるのです。それは「歌人夏の集い」とは違う部屋でした。

短歌現代歌人賞は未発表の短歌三十首で応募します。この年の審査対象になったのは四百十九篇でした。私は主人の自動車販売整備業を手伝う日々を主に綴つた三十首を「朝空に」という題で応募しました。

大きなテーブルの向こうには選者の森岡貞香先生。宮地伸

一先生。吉野信夫先生。石黒清介先生と司会の方がいらして、テーブルのこちらには新アララギの方々、星野先生、白石先生、稲葉先生と私です。式が始まり、石黒清介先生から、第十二回「短歌現代」歌人賞の賞状をいただきました。今思つても夢の中に居るようです。それから、選者の先生お一人お一人から評をいただきました。

授賞式の後「歌人夏の集い」の大ホールに行きました。全国から短歌に携わっている方々が集まって、明るい大ホールはたくさんの人でした。「歌人夏の集い」が始まり、一段高いところの金屏風の前で石黒清介先生の主催者挨拶、大先生方の祝辞が続いたと思います。そして、司会の方の声が。

「では次に、第十二回「短歌現代」歌人賞を受賞された方をご紹介します。神谷由里さん、壇上へどうぞ！」

淳一に恋をして

神山 曉美

「渡辺淳一が好き」というと、おおかたの人は当惑の色をみせる。この人は初期の作品を読んでいない……と私は思う。さえない中年男の恋愛事情を描いた小説が、巷で話題になった時期があった。確かにこの頃の彼には、私も好感が持たない。渡辺淳一は北海道生まれの整形外科医である。日本初の心臓移植に、同じ大学に居ながら疑義を呈し病院を追われた。このことも私が彼に興味を持った一因となっている。

だから初期の作品には医者としての背景が大いに影響していた。しかし医業を離れて長くなると、その進歩に追いつけず、また、作家として嫌でも商業ベースに乗せられてしまう。読者の求める作品、売れる本を書かざるを得なかったのだと私は理解している。この頃は、まさに売れっ子作家だった。

彼の小説は風景描写が美しい。和装の女性や人物の描写にも手抜きはない。登場人物の心の奥底までを詳細に描き、鮮明に浮き上がらせてくれる。「失楽園」も「愛の流刑地」も私の書棚にはある。だが完読してはいない。自分をひととき夢中にさせた彼に失望したくないからである。私の中では、本屋さんでときめきながら次に読む彼の本を選んでいく頃、医師作家、渡辺淳一のままでいてほしいからだ。

いつの頃だったか、宇都宮で渡辺淳一の講演会があった。もちろん私も出かけて行った。念入りに化粧をし、お気に入り

りの洋服を着て準備をする私に、いまは亡き夫が怪訝な顔をしていたのが思い出される。

中央のいちばん前の席から、初めて生の渡辺淳一を見た。肉声を聞いた。講演の内容はよく憶えてはいないが、人間の脳の仕組みから生きる意味へとつながる話だったように思う。

それからも私は、彼の新刊本が出るたび、より一層心躍らせて書店に向かった。

「リラ冷えの街」「死化粧」「流水への旅」「野わけ」「まひる野」私の好きな小説は、その多くが北海道を、あるいは関西を舞台にして物語が練り広げられる。京都の、ここがその場所だろうな……と思われる旅館に泊まり、主人公が歩いた道筋を辿った日もある。医学用語が頻繁に出てくる物語を少しでも深く読みたくて、医療事務講座に通い資格をとったこともある。札幌の「渡辺淳一文学館」にも行った。

東京のペンクラブの集まりで、たった一度だけ挨拶したことがあった。心臓がのどの近くまで上ってきたようで何も話せず、ただただ息苦しかった。ほんとうに好きな人には、近づけない。声もかけられない。遠くから心ときめかせているだけでよいのだと、そのとき思った。

年老いてから、初恋の人には会わないほうが良いという。美しい思い出は美しいまま心に沈めておいたほうが良い。いま私は渡辺淳一の初期の作品を読み返している。医師の心を持ちながら原稿用紙を埋めていた渡辺淳一と、果てしない未来があって、毎日がときめいていた頃の私自身を重ねながら。

四季の詩を詠む^{うた}

斎藤 光星

俳句を本格的に始めて早や七年になり、現在は二つの句会
で活動している。

自由時間を有効に活用するとともに、認知症予防や呆け防
止という意味も含んでいる。英会話や随筆並みに脳を鍛え知
的で文化的な活動と言って良い。

俳句という五七五の十七音からなり、季語が含まれてい
れば体を成し、手軽に詠めると思っていたが、やってみると
意外に手強い。「季語」が必須なのは基本だが、「季重ね」や
「即き過ぎ」はご法度だ。僅か十七音なので、省略の美学を
意識し、余韻を残す技巧なども駆使しなければならぬ。

実に奥が深い。

詠む内容は写実的なことが最も重要視される。目の前に見
えるものや気持ちを素直にわかり易く表現すれば良いのだが、
それが結構難しい。やれば、やるほど難しくなってくる。

句会で自分の作った句が披講者に独特な節回しで詠じられ
るのは、何ともいえなく良い気分だ。句友から多くの票を集
めた時は、苦心惨憺し頑張り甲斐があったと、俳句の女神に
感謝・感謝の気持で一杯になる。

テレビではプレバトが放映され、夏井いつきさんの辛口講
評が名物となっている。私は駄句の世界に浸っているばかり
だが、脳トレという意味で今後も句作に励んでゆく。

名古屋の俳句大会で二度準大賞の榮譽に輝く。NPO法人
日本詩歌句協会中部大会で二年前と二年前の連続Ⅱ。受賞
句はそれぞれ「捨てがたき書込み数多古曆」、「生くるとは数
多の別れ冬銀河」。数多は私のラッキーワードといえよう。

地上の蟻から、廣大無辺な宇宙迄、たった十七音で表現出
来る世界最短の詩に心酔し、素晴らしさを大いに堪能してい
る。見えている情景をより深く視、観、診、看、聞こえてい
る音をさらに良く聴く姿勢を貫き通してゆく。俳句は世界一
短い十七音の詩で「四季の詩・季感詩」とも言われている。

私は「高度に知的な言語ゲーム」と解釈している。自分
しか表現出来ない想いに溢れていけば、それで充分だ。

昨年二月、三鷹の句友からお誘いを受け、宇都宮開催のN
句会に参加する。三十名定員で、私以外は全て結社の俳人だ。
ベテラン、強者揃いなるも臆することなく句座を楽しむ。

二人から特選を得、主宰の好評価も相俟って計八点獲得す
る。その特選句は「どの顔も笑って春の泥つけて」。上を見
ればきりが無いものの、まあ、それなりの結果には満足して
いる。句友三十名の前で、苦勞の末に作った句が披講される
のは、実に良い気持でオーバーザムンだった。

その後、黒羽芭蕉の里俳句大会、さくらんぼの都市寒河江
俳句大会で入選したものの自分はまだ発展途上なので、今後
とも精進してゆきたい。

海も輝いていた

こやま きお

夏が終わるころになると今になっても思い出すことがある。

旧暦の盆が過ぎ静けさを取り戻したころ、きまつてサークルの合宿研究会が房総千倉で行われた。新米教師たちも若い言語学者も駆けつけてきてくれる。同僚の実家が民宿を経営していたので、二泊三日の合宿研究会は十年近く続けることができた。

潮風が吹き抜けていく部屋で講師や学者を囲んで始まるのだが、はじめたころは初対面の参加者も多かったせいか、緊張した雰囲気の中かで実践の報告が始まったものだ。まだ謄写版のインクのおいが残る資料を配り、とくに新米教師の報告は声を震わせ、何度も汗をぬぐう。

当時、私がサークルの事務局を担当していたので、二泊三日の日程内容の振り分けや講師は誰にお願いするかなどの提案をする。しかし、忘れてはならないことがある。懇親会の設定である。講師も学者も新米教師も堅苦しい礼儀抜きで話ができる場になるからだ。そのせいも、二日目の報告は緊張もほぐれ、質問や意見で盛り上がる。新米教師の三日目は心が逸り、すでに子どもたちと向き合う授業を思い描いていた。立ち上げたサークルのメンバーは四、五人。みな二十代前半。週一の学習会は狭いながらも我が家からスタートした。

若い言語学者が「自分も勉強になる」といい、時間をかけてきてくれた。夕方の六時から二時間ほど、日本語の語彙と文法の学習が始まる。その後は場所を変え講師を囲んで飲み会となる。これもまた楽しみの一つであった。

かな文字指導の授業、文学作品の読み方指導の授業、単語から品詞への授業など、研究授業ではないけれど、お互いに参観したり、録音したりして、仲間と話し合いを開く。授業の批評は厳しくもあるが、明日への指導に備えられる。授業によつてはテープ起こしをして、子どもたちと振り返ることもあった。今では考えられないことも知れないが、授業が楽しかったとしか言いようがない。教師が子どもたちとぎんと向かい授業にとりくめば、子どもたちは必ず受け止めてくれる。

これら日々の実践をまとめ、夏の合宿研究会で報告をするのだが、教室の喧騒がすっかり消えたころ、一人教卓に向かい、謄写版用の蠟原紙をヤスリ版にのせ、鉄筆で一字一字刻んでいく。ガリ、ガリ、ガリと孤独な作業だが希望があった。

一昨年、夏が終わるころ久しぶりに同僚の住む房総千倉を訪ねた。海は以前と変わらず輝いていた。世話になった民宿を地元に戻った同僚に案内してもらったが、駐車場になっていた。四十年余の前のことなのに、夏が終わるころになると熱気にあふれた房総千倉での合宿研究会を思い出す。若い言語学者は某大学の名誉教授に、新米教師たちの憧れの女だったきみはどうしていることか。

人生の障碍を飛び越えた

あの日、その瞬間

高杉 治憲

あの夜、天空に煌めく満天の星々は瞬きもせず手を伸ばすと届くかのようだった。その輝きは人間の悩みや心配など全て吸収してしまふ気がしていた。八ヶ岳清里の清泉寮における立教大学馬術部の合宿は九月に開催される関東学生自馬對抗競技大会に出場予定の五名と五頭を中心に開始されていた。私は、四年生最後の大会に向けて新馬セントハヤテを調教し共に歩んできた成果を発揮する覚悟を持って臨んでいた。

この日、合宿に自衛隊体育学校から特別ゲストが参加してきた。その人は、なんと前年の近代五種日本チャンピオンの藤田一重選手だった。彼は、「五種競技の内でも馬術は相手（パートナー）が馬だから奥が深くて難しい分、やりがいがある」と言っていてその日からそれまで聞いたこともなかったアドバイスを話してくれた。私が騎乗するセントハヤテは元地方競馬七連勝の駿馬でありながら後肢と鞍に障害があり馬主が食肉にするのは忍びないと寄付された。このままで近づく関東学生大会の高度な障碍競技に参加しゴールでできるものか相談した。すると、「俺は大怪我をして一時競技選手を断念しようとしたが、この清里の山岳広地を走って走り抜いて克服し日本チャンピオンになった。ハヤテも篠崎さんと共に、毎日4キロの広地を伸び伸びと駆けさせ豊富な青草を食べさ

せてみたら本来の能力を甦らせると思うよ」という金言を与えてくれた。早速それを実行すると四週間後ハヤテはその名に相応しい力強い走行を取り戻した。合宿の仕上げでは最高一三〇センチの障碍飛越に成功し、私はハヤテと共に大会出場を決意した。帰京して立教の馬場で煉瓦に見立てた障碍でハヤテが馬転して下敷きになり大けがをした私は、一時コーチから出場を止められたが自分が騎乗しなければハヤテがゴールできないと分かり包帯を巻いた頭の上からアメラグのヘルメットを装着し高熱をもとめせず三日間の競技に挑んだ。昭和四十二年九月九日〜十一日、東京は世田谷馬事公苑において第十八回関東学生自馬對抗競技大会が開催された。出場十六校から選抜された六十九名と個人資格フリー五名合わせて七十四名の中から上位二十名が入賞となり全日本学生自馬大会出場権を獲得する。第一日目の馬場課目では私とハヤテはマイナス一〇〇点の四九位であった。競技の山は二日目の広地騎乗（ステイプル）競技だ。全長距離三六〇〇m、制限時間十六分以内に障碍合計二〇カ所（固定、可動、水濠、灌壕等）を全て飛越して満点プラス増点でゴールしたのは僅かにハヤテの私を含む十九人だった。この日、後にオリンピアンとなる二名を含む関東を代表する名選手達が失権や棄権で敗れたほか、二校の馬が灌壕で倒れて薬殺されるほど厳しい大会となった。三日間を戦い抜いて入賞し全日本学生への出場権を得たセントハヤテと私は、その後の人生において様々な障碍に出遭うことになったが、その度に二〇障碍を飛び越えたあの時のときめきが生き抜く力を甦らせてくれたのである。

半額シール

松林 厚子

百貨店の食料品売り場を歩いていると、ドリンクコーナーで黄色いシールが目飛び込んできた。近寄ってみると、そこには「半額」の文字が。やったー、半額だあ。見慣れないパッケージの牛乳で定価が八百円近くもする。ちょっと迷ったが、手に取ってかごに入れた。自宅に戻り、初めて飲んだ牛乳はコクがあって自然の甘みが美味しかった。

食料品の陳列棚に並んだ商品の黄色いラベルには気持ちちが昂る。「二十%引き」だと、ああ、二割ね、と平常心に戻るが、三割、四割と数字が上がるにつれて、テンションは上がり、半額シールには、ときめく。ほとんどの場合、残った賞味期限は短い。お店側にしたら、仕入れ値は下回るが廃棄になるよりはまし、と苦渋の選択でのシールだろう。

近くの肉屋に餃子の皮を買いに走ったことがある。その日は、ひき肉、ニラ、キャベツで「アン」の部分は仕込み済み。味噌汁の下ごしらえもした。あとは皮を買ってきて、アンを包むだけ。店内に入ると、総菜コーナーに弁当がいくつも重なっているのが目に入った。閉店時間の七時までにはあと一時間もない。弁当の売れ行きがよくなかったんだな、と近寄ると、プラスチックの蓋に半額シールが貼ってあった。ステーキ弁当に、天丼、焼き肉と種類も豊富だ。

「これから餃子を作るのは面倒だから、この弁当を夕飯にし

ちやおうかな。そっちの方が楽だし。でも、炊飯器にご飯をセットしちゃったから、もうすぐ炊けちゃうな」

こんがりと焼き色のついた牛肉とにらめっこしながら、考えを巡らせた。「今日は、餃子にしよう」弁当への思いを振り切るようにして、餃子の皮を手にとった。

ある週末のこと。その日は外出して、夕飯の用意が面倒になった。「今日は、半額弁当にしよう」と決めた。何の支度もしないまま、六時まで待った。時計をちらちら見ながら、十分過ぎたのを確認すると、もう割引になっただろう、と家を出た。目当ての肉屋の総菜コーナーに弁当は一つも残っていないかった。どうしよう。これから家に戻ってコメを早炊きモードで炊いて、野菜室にある水菜とトマトでサラダにして、メインは……。コロッケとメンチにしよう。総菜コーナーでコロッケとメンチ四個づつ買って帰った。

半額シールとの付き合いは、食品以外にも注意が必要だ。「お得」にひかれて、考えなしに買い込み、野菜を腐らせてしまったことがある。アウトレットのブランド店でお店の人が半額の値札を張っていると、ところに出くわしたことがある。嬉しくなって、あれも、これもと、買う予定のなかったシャツやチノパンツなどを大量買った。ほくほく顔で帰宅して、冷静になると、「どう考えても、これは着ないよね」と思われる派手な紫のロングシャツがあった。案の定そのシャツは一、二回来ただけで処分した。

失敗はあるが、私は半額シールが大好き。

緑蔭にて

福澤 悦子

木漏れ日が昨夜の雨で濡れた地面に斑の影を揺らがせていた。ツタンカーメン展を見るために膨大な数の人々が公園を埋めていた。係員の案内に従って列をなして進んでいたが、列は途切れることなく続き、どの位待てば入り口に辿りつくのか分らないほどであった。

しかし、人々は成り行き任せといった呑気な様子で、それぞれにおしゃべりをしていた。

私たち二人もまたそんな行列の中にいた。私たちと言ってもさほど親しい間柄というわけでもなく、会ってみないかと勧めてくれる人がいて、その相手の男性の妹が偶然、私のところへよく遊びに来る生徒だったので、お見合いをすることになり、今回のデートに進展したというだけのことであった。記憶は時として寝覚めの夢のように切れ切れで曖昧で、辻褄の合わないことがあるので、展覧会場が美術館だったのか、博物館だったのかも分からない。

私は、連れの男性のことも忘れて、葉桜の揺らぎを見上げたり、小鳥の囀りに耳を傾けて行列に並んでいるというゆつたりとした自由な時間を楽しんでた。

すると不意に聞きなれた男性の声に我に返った。デートの相手の男性が近くの男の子たちと何か話し合い、笑いあっていたのだ。極めて自然に、親しげに、年長者としての優しさ

と威厳を持って・・・

彼は小学校教諭として、学校でもこんな風に生徒たちと接しているんだろうと思った。自分の仕事を愛し、生徒たちを愛し、自分の仕事に誇りと自信を持って・・・

私に対しても、今まさに妻として迎えようとしている女性として接してくれている。

私は彼の存在が急に身近なものに、そして、頼もしいものに感じられた。

この人に決めよう。この人なら、心が不安定で揺らぎやすい私の定点になってくれる、ともすると現実から迷い出し、夢の世界に踏み込んでしまいそうな私を実生活に繋ぎ止めてくれるはず。私は今まで経験したことのないようなときめきを覚えたのであった。

爾来五十六年あまり、夫は八十六歳、私は八十二歳、家庭を築き、娘二人を嫁がせ、父母を見送り、二人だけの平穩無事な暮らしをしている。コロナ感染を防ぐための緊急事態宣言が出され、色々と不自由はしているが、苦痛に感じるほどの体力も残っていない。

退職後に習い始めた謡曲仕舞のお稽古に通うぐらいが関の山で、月二回のお稽古の時は、優しい夫が送迎の役割を果たしてくれている。

この充足した日々が何時まで続くのかは神のみぞ知るであるが、私の一生を安定した方向に導いてくれたあの緑蔭でのときめきは、神の配剤としか思えないのである。

うんまいコーヘー

舘野ひろ子

宇都宮市の芸術祭に随筆部門が加わった時、随筆は経験がなかったが応募した。

不思議なほどに筆が進んだ。話の種が、夫だったからだ。随筆とは、など深く考えもしないで綴った作品が『夫とコーヒー』であった。これがはじめての随筆部門で入賞し、私の文芸活動第一作目であった。

おふくろの味を愛し、手をかけない料理を褒め時間とカネをかけた料理を、「どうもな」と首をひねる夫。

コーヒーをこよなく愛し、それがインスタントであろうと挽きたてであろうとチャツと舌を鳴らし「うんまい」と目を細める。その上「コーヘー」なのである。

これが書き出した。書き始めたら、止まらなくなった。夫は典型的な栃木県人で、栃木の方言が醸し出す日常会話から始まって、私が当時死の病とされた癌と向かい合った日々の家族の思いを綴ったものだ。

生粋の栃木県人だといひ、夫はイとエをまるで逆に発音する。「エンコにイサをやったかあ」と大声で辺りかまわず怒鳴る。聞いている方は、インコに餌でしょう、と思っても笑わずに訂正することも忘れる。

これまでに最も呆れ度の高かったのが、夫のメモ書き事件だ。メモには「ダエイーに行ってくる」とあったのだ。当時

ダイエーというスーパーがあった。発音だけでなく、文字まで逆であることがこの時分かった。

それにも入賞した作品が新聞に掲載され、夫には恥ずかしい思いをさせてしまったようだ。

夫にしてみれば、内心はそれなりに傷つき、メンツをつぶされ穏やかではなかったろう。

後に、芸術祭に入賞した作品を集めて、ある出版社のベスト・エッセイスト大賞に応募した。副賞に出版をするという。芸術祭で入賞した二十三作品を収めた『夫とコーヒー』が、プロアマ限定なしの多くの応募作品の中から、グランプリ大賞として選ばれたのだ。

そのころ、息子が輪禍に遭い生死の中をさま迷っていた。そんな地獄の中での知らせは、私に活力をくれた。

胸の動悸がしばらく止まらなかった。息子の輪禍の作品を追加してもよいとのこと。

「これって父さんのおかげだよな」子供たちにも私にもそういい、夫は手放しで喜んでくれた。

私の抗ガン治療に何度も立ち会い、意識障害の息子を共に二十年見守ってきた、コーヘーの人は、コロナで騒がしくなり始めたころ、突然他界してしまった。一日の介護もなしに意識障害の息子を託された私は憔悴などしていられない。

「はい、うんまいコーヘーですよ。今日は月命日だからね」笑いながら仏壇にコーヒーをそなえ、私は「相伴しますね」とどっかりと仏壇前に座り込んだ。

朝日

紙屋 里子

「非常に大きな台風19号が近づいています。何年に一度あるかないかの超大型です。備えを早くして、命を守る行動を取って下さい」とテレビ等で報道された。外は其程まだ、風も雨も強くはなかったが、台風前の紫の空が出ていた。

主人が亡くなり独り暮らしが始まって一年半。何とも心細い毎日が続いていたが、まるで追い打ちをかけるような自然のありようだ。

明るい内にと、家中の戸を閉め雨戸をしめシャッターのある所は閉めて回った。二階の雨戸を出してみると、ガタガタのポロポロ。無いよりはマシだろうと閉めたが何ともカッコ悪いが仕方ない。

夕方になり段々、風雨が強くなった。と電話の音。普段電話をしたりしない京都府の実家の兄だった。心配してくれていたが、こんな事は初めての事だ。甥が千葉から電話をくれたり、妹が京都府から電話をくれた。遠く離れていては、其程の力にはならないが、ただ気持ち嬉しかった。

夜になり辺りは真つ暗になった。ますます風雨は強くなる一方だが、こんな時間に外に出て避難所に行くのも怖い。近所の人が「この辺りは大丈夫よ」と言っていたのを思い出した。

もう寝ようと思って布団に入ったが、ゴウゴウ、ザアザア

という激しい音になかなか寝られない。でもうとうととしてフト目が覚めた。

カンカンカンカン カンカンカンカン
裏の大通りを消防車がカネを鳴らしながら走っていくのが聞こえた。ああ、守ってくれているんだと思ったら、涙が出た。まだ外の風雨は激しかったが、それよりも大きくカネの音が聞こえた。

朝六時。眼が覚めた。

家の中は真つ暗だが風雨の音はしない。カーテンを開け、戸をあげ、そしてシャッターを開けた。

明るく輝く光が飛び込んできた。

「朝日だ。助かったんだ」

思いつき太陽の光を浴びた。

出逢いから導きへと

藤田 香月

栃木県文芸家協会へ入会し、今こうして『朝明』に参加させていただいたことで、また会員の方々との嬉しい出会いと親交に、喜びと感謝を感じています。

『朝明』とのご縁をいただいたのは、いくつかの出会いや、子供の頃からの縁ある人々のつながりと、熱心に入会を勧めてくださいった方がいらしたからでした。

初めに一冊の本との出会いがありました。那珂川町馬頭広重美術館のギャラリーショップでのこと、「甦る灯火 高杉治憲 下野新聞社」の背表紙が目についたので。知らない著者名でしたが、私にとって「高杉」という姓は、幼い時から今も忘れられない人の姓でした。本を手に取り帯文を見ますと、裏側に「一〇〇億に及ぶ負債を背負ったゴルフ場を2度にわたり再建した。」とありました。ゴルフ場！負債！もしかすると、と奥付を開きその上方に著者略歴を見たのです。

「高杉治憲（本名 篠崎暢宏）佐野市小中町出身」とあるではありませんか。やっぱりと思えました。私が時々訪ねていた旧小川町のおばさんの長女は、佐野の篠崎家に嫁いでいたのです。

暢宏という方のことは知りませんでした。何かを感じて『甦る灯火』を求めました。

それから間もない二〇一五（平成二十七）年九月十日の下野新聞、文化欄には『甦る灯火』の出版紹介がありました。ここには佐野や篠崎の文字は無く、「宇都宮市在住」とあり少し戸惑いを感じました。

時が過ぎ、二〇一七（平成二十九）年六月一日の下野新聞に「県文芸家協会」の記事があり、高杉事務局長の電話番号を発見、初めてお話しすることができました。一週間程して高杉治憲さんから丁寧なお手紙が届きました。そして思いも掛けない栃木県文芸家協会への入会の勧めと申込書とが添えられ、二冊の『朝明』も同送されておりました。私が會津八一の会、秋州あきしゅう会会員であることを小川の知人から聞かれてのことと思います。申込書は短歌部門となっていました。私はまだ歌を詠むまでには至らず、また文芸に秀でた方々の会とも聞こえていたことから、一旦は入会をお断りしたのでした。その年の十月には會津八一展を計画しており、丁度準備を始めた頃でもありました。何がきっかけであったか忘れましたが、二〇一九年の二月、那須小川ゴルフクラブを尋ね、高杉治憲さんに初めてお会いしました。歓談からは、義父でゴルフクラブ創業者の神場多巳一翁を、深く敬慕されておられることが強く伝わってくるのです。

そして、今度は随筆部門への入会を勧めてくださいったのです。私は、會津八一の言葉を思い出し「真に内心から湧き上る感情を表わせれば良いのだ」と、自らに言い聞かせ、入会させていただくことを決めました。その時、ときめきと供に藤田香月というペンネームが浮かんできたのです。

〃ときめき〃は夢の中

安西 悠子

敗戦前、私の町には、小学校の講堂と、旧制中学校・高等女学校の講堂に、アップライトの黒塗りのピアノが一台ずつおかれていた。

民間には、たった二台のピアノがあるだけであった。その一台は、久保六平氏の座敷の畳の上であり、もう一台は、岡部完介邸にあった。

久保六平氏薨去の折、その後継者は、真岡小学校に素敵な講堂を寄付してくれた。久保講堂がそれである。

岡部完介邸のは、有島武郎と交際の深かった佐々城信子の妹が、東京から真岡町の岡部家へ嫁ぐ折の花嫁道具の一つであった。

真岡高等女学校では、毎年、音楽会が開催された。音楽の担当の鈴木満雄先生は、各学年に一人ずつピアノ独奏をする生徒を養成した。四年生は、鈴木先生の妹君。三年生は、自宅にピアノを持つ岡部蘭子さんと、校長先生の御嬢様の若林さん。二年生は小菅医院の静枝さん、一年生は私である。岡部さん以外にピアノを持つ生徒はいないから、女学校の講堂のピアノに頼る外はない。放課後、楽譜を小脇にかかえて講堂に駆け込む。五時には、用務員のおじさんが鍵を掛けに来るから、それ以後は練習することが出来ない。音楽会の日が迫ってくると不安でたまらない。クレメンティのソナチネも

指が思うようにうごかない。

鈴木先生は、よく、私達に話していた。「お父さんに、綺麗な着物をおねだりする前に、ピアノをおねだりしようね」と。戦争が激しくなった。私の家にも、東京の叔父一家五人が疎開して来た。家族は急に二倍になった。生活費も二倍になった。ある時、叔父は、「勤め先の同僚が家具を疎開しはじめたが、九州までピアノは送ることが不可能なので処分したいと言っているから、お前が、ピアノを欲しがっていたから、お父さんに話してあげる。」と言った。私は、〃ときめき〃が全身を走った。家にピアノが届く、と。けれど、翌朝、目覚めれば、私の家にピアノの姿はない。父が、叔父に、返事をしなかつたからだ。私の〃ときめき〃は夢の中だけのことだった。

今、思い返してみれば、その時、父は、苦しかったにちがいない。戦争が激しさを増し、政府は、統制経済をとったその下で父は活動を休止させられた。しかも、扶養する家族は倍になった。私には、歳の近い弟が三人いる。父は、男子は学問すべしという信念をもっていたから、就学時の学費などの問題があり、私のピアノは、二の次の問題であった。

戦争が終結して数年が経った。私は、女兒を授かった。夫は記念に何か、と言う。私は、すかさず、ピアノ、と言った。町内の楽器店から、焦茶色のアップライトのピアノが届いた。この頃、浜松の楽器メーカーが音楽教室の生徒むけの手の届く価格で売り出された。〃ときめき〃は現実となった。

少年たち

早見 千代

幼馴染や同級生の名前を、フルネームで覚えているのは、男子にしろ女子にしろ数名しか私は覚えていない。名簿を見れば分かるかも知れないが、今はもう残っていない。その覚えている男子について書いてみよう。

T・H君 小学五年生の頃。みんなから「テッチちゃん」と呼ばれていた。下校のとき方角が同じ者達がかたまつて帰る。テッチちゃんはN町から通つて来るのが自然とわかった。女の子二人で帰るときもいろいろとあった。私の下校のコースは幾通りもあった。学校から家までの間に本屋さんが五軒あって、本屋で立読みするときは一人で帰った。

学校の体育の時間、男子は野球、女子はドッジボールかなんかやっていたとき、テッチちゃんに向けてボールを投げた子があった。テッチちゃんは気がついていない。わずかに数秒の出来事だった。テッチちゃんは咄嗟に顔前でキャッチした。数秒の間に「危い!!」と「安堵」が交錯したので、その気分の高揚が記憶の部屋へと押し込んだのかもしれない。

中学一年生の時、クラスの委員長のK・Mと放課後二人で統計の仕事をしていた。急にK・Mが「屁するぞ」と言った。そして束の間ほんとうに音がした。K・Mの家は栃木駅前のみつわ通り商店街にあって、お父さんは学習塾を開いていた。そこはお使いをする界限だったので小さい頃からK・Mの顔

は知っていた。豪放磊落というような中学生生活を送ったK・Mだが、三十代にして亡くなったということと同級生から聞いた。

小学五、六年生の頃、二軒隣のS・K幼馴染のススムちゃんと自然に遊ばなくなった。私より三級下の男の子。ススムちゃんはインドア派、それまでは良く誘われて将棋盤で遊んだ。将棋を指すのではなく駒を使ったゲームだ。

ときどき家の前の道路でススムちゃんのお父さんがススムちゃんと弟をストッブウォッチを使って、かけっこをさせていた。教育熱心な家庭だった。

長じてススムちゃんは高校教師になった。教え子と結婚した。新聞の訃報欄で七十二才で亡くなったことを知った。

年をとつてときめく心が萎えるとしたら、人生の彩りが冴えなくなつて淋しいことだ。ときめく対象は世の中に多種多様ある。弁えることを忘れなければ日常が、人生が豊かになる。書や絵、文芸、音楽、スポーツを嗜む、旅行、観劇、とくに難行、苦業をする人、恋をする人。何かにときめいて自分を発展させることはとても良いことと思つてゐる。

杉並木

高橋 暁美

近くの杉並木から、この夏初めての蛸の声を聞いたのは、七月七日だった。七夕でも、コロナ禍の街はひっそりしている。外出を控えている居間の開け放った窓からは、朝からウグイスがしきりに鳴いているのが聞こえた。春先からでは格段に上達した美しい鳴き声が、心に沁みだした。

午後、郵便局に出かけた。途中、日光例幣使街道と日光街道の分岐点に追分地藏尊がある。その近くの杉並木の樹下に、一株の紫陽花が五、六輪、濃紫の大輪の花を咲かせているのに気づいた。わずかに西日しか当たらない木蔭なので、他の紫陽花が色あせたころやっと咲き出したらしい。

ウグイスの声に癒やされ、大好きな、遅咲きの紫陽花に見とれた帰途、近所の人と垣根越しに、おしゃべりもできた。

いい一日だったので報告のメールを、入院中の友人に打ち始めた夕方、ふいに「カナ カナ カナ」と澄み切った声が聞こえてきた。今夏、初めて聞く蛸だ。

「メールありがとう。並木で蛸が鳴いたのですね。私にもきれいな声が聞こえてきそうで夏を感じ、ときめきました」

友人の返信に私もときめいた。

年を経て涙もろくなり、家族の優しさや、曾孫の愛くるしい動画に日々ワクワクしているが、ささやかで普遍のときめきをもたらるのは杉並木である。

朝目覚め、カーテンを開けると、お向かいの屋根の向こうに杉並木が林立している。晴れた日は眩しく、曇天にはりりしく、花粉の飛散がすごいとわかる季節には黄色い花で枝がたわんでいる。木枯らしに枯れ枝が落ち、道路を塞いでいないかと心配な朝もある。並木の上の満月は風情があり飽かず眺めると、冬、雪が降り積もった光景には、心が洗われる。季節ごとに変わる雀、鶯、郭公、ヒヨドリ、椋鳥など鳥の声、蟬の声にも元気が出る。

二年前、免許を返納してからは自宅からすぐの例幣使街道を歩くことが日課のようになった。並木敷地の下草は、近隣住民の方々や市の清掃員さんのおかげで整備されていて目と心を楽しませてくれて、感謝している。

早春のレンギョウ、白梅の芳香、可憐な紅梅にはじまり、鮮やかな紫色のムラサキハナナ、希望に満ちた色の菜の花、橋の欄干を思わせる落ち着いた紫色のギボウシ、そして私の大好きな紫陽花が咲く。地質によって濃い紫、ピンク、白と数メートルしか離れていないのに、色が違うのも興味深い。

紫陽花が終わるころ、暗渠が途切れた水路に、半夏生が咲くと本格的な夏の到来だ。花はもとより葉の半分だけ白いのが涼やかだ。山ユリも強い香りを放ち始め、蛸が鳴くと夏本番になる。

今市に生まれ育った私にとって、杉並木は生活の一部だ。三百七十年以上、移り変わりゆく人の世を見てきた樹に、傘寿を過ぎた私は勇気ももらい、時にときめいている。

小学校時代の儂い心情

水野 弥彦

八十路も半ばに入ると、表題の「ときめいた時」という言葉は縁遠い。辞書を開くと「喜び」「期待で胸がわくわくする」「心を踊らせる」などという文字が踊る。個人差はあるものの、行きつくところ「受け止め方」の問題に帰趨しよう。そう考えると、静かにこれまでの人生を振り返ってみると、山あり谷あり。この言葉は人間の心の問題なので個人差はあろう。その上で、よく考えてみると、戦禍を逃れ、両親の出身地・静岡県藤枝市岡部町に疎開。そこで出会った小学校時代の女子生徒の数人に「異性」を初めて意識し出し、人生で最初に心「ときめいた時」であった。

1944年（昭和19年）の夏、東京・芝区伊皿子（今の港区区内）の自宅から1時間の通学の男子だけの小学校を1年の一学期だけで、東京を離れ、生活環境に恵まれ、しかも男女共学の田舎の小学校に転校。慌しく戦禍に怯えながらの生活から解放され、都会ほどの利便性には恵まれてはいなかったが「心のゆとり」は、何物にも代え難いものではなかったのでは、なかるうか。

その疎開地で、小学校2年生の時に終戦を迎えた。教材には恵まれなかったが、学友や地域の子供会で都会では経験できないような貴重な体験を重ね、人間性の面で「心豊かな」時期を過ごさせてもらったように思えてならない。18代も続く

先祖の墓のある菩提寺も同じ町内にあり「先祖が見守ってくれる」という、ささやかな安堵感のような心の支えがあったのかも知れない。

周囲の山には、みかん畑と茶畑が広がり、隣町の焼津は当時でも国内有数の遠洋漁業の漁港。食べ物は都会より恵まれていたように思えた。学校の教師も教育熱心で人情味あふれた人間性豊かな人ばかりだった。生徒の方も、これに添えて伸び伸びと成長、心豊かな人間に成長するための阻害要因は何もない。教育現場の環境は、すこぶる良好だった。

幼少の頃、虚弱体質だった私は、幼稚園時代は欠席が多く両親の頭痛の種だった。ところが、郷里へ疎開し伸び伸び育ち、勉強にも励み、田舎の山野を駆けずり回り、体力増強に励んだお陰で見違えるような健康児に生まれ変わった。同時に精神面でも成長したようで、小学5年生の頃にはクラスメイトの異性に目覚める。学校生活や課外活動でも、数人の異性を常に意識し、相手に「好く思われたい」といった感情が心の片隅に芽生え出し、何をするにも気になり出した。

だからといって、その相手に口に出せる訳でもなく、今、思うと、一種の「心のときめき」のようなものだった。不思議なもので、小学6年生の夏休みに我一家は東京に戻り、小学校、中学校、高校、大学、社会人に……。同窓会にはお呼びが掛り、再会すると当時の話題に大いに盛り上がり、文通を交わす間柄。儂い小学校時代の良き思い出を大切にしている昨今である。

ときめきは大切

高橋 淑乃

テーマは「ときめいた時」とのこと。何んだか遙か昔の事のように。静かな日常生活につぶてが飛んで来たような思いだ。取り敢えず辞書を引くと、一喜びや心配などの強い感情のために胸がどきどきする一とある。胸がどきどきする事には違いないが、心配事に、ときめくとは言わない。又、一期待に胸をはずませる一ともある。これは領ける。この気持が一番びつたりくるのが恋のときめきであろう。昔々の話である。女子高の往き帰りに時々合う男子学生がいた。会えない日の寂しき、会えた日のどきどきとした喜び、ただそれだけの事であったが、私の胸はときめいたのだ。一年ぐらい続いただろうか。いつの間にか会うことは無くなった。卒業してしまったのかも知れない。

惚れっぽい私はすぐ人が好きになる。異性とは限らない。女子高の時の上級生に慣れの人があった。専攻科生で背が高く、三つ編みにした髪が大人っぽかった。校旗を持って先頭を歩いていた。又下級生から慕われたりした事も懐しい思い出である。又、一人生のよい時期に会って栄えること一とも辞書にある。今、NHKドラマ「青天を衝け」の渋沢栄一の人生等知ると、まさに時代を得て栄えた人であった。勿論、人並以上の努力、勤勉、忍耐と授かった運あつての事である。

それは又、現在の世の政界、経済界、マスコミ、文壇で成

功された方達も同様に、時代をときめいていると言うことである。

先日、短歌の勉強会の後の雑談の折、ときめきを感じた事があるかと皆に聞いてみた。

ときめく事なんか無いと言っていたが、そのうちにぼつりぼつりと話題になつて来た。

Yさんは文房具を買う時にときめくと言う。たしかに今の文房具は、色、形さまざまあつて探し求めるのも楽しく、ときめきながら選ぶのだと言う。

Kさんは金木犀（かぢ）の香にときめいたと言う。これには私を始め多くの人が賛同した。朝、雨戸を開けた時とか、散歩の途中などにふつと季節を感じてときめいたと言う。

Sさんは宝塚公演の前売券を手にした時に、颯爽とした男装の麗人のパンフレットにときめいて夢心地になつたと言う。結局コロナ禍で公演はキャンセルになつたとのこと。本番のすばらしきにときめく事叶わず残念であつた。

Iさんは障害者の絵に心動かされたと言う。これはときめくと言うより感動であろう。今年はパラリンピックがあり、さまざまの感動を残して終つた。

いろいろな、ときめきや感動がある。先日テレビで、三遊亭圓歌の落語を聞いた。すばらしい話芸に聴き入つたが、中にときめく時と言う噺があつた。ときめく事に依つて人は若返ると言う噺であつた。大切な事である。

朝のサラダ

山崎緋紗江

三億年経て岩塩の桜いろ朝のサラダはほの華やぎぬ

朝、サラダに桜色の塩をさらりと振り、地球の三億年の時間を思う。コロナ禍の閉塞感から解き放たれたような解放感と、ロマンを感じてほのかに華やいだ気分になる。

空想は広がり三億年をさらに遡る。三十五億年前の海の中に生命が誕生したことを思う。

そんな想いにゆったりと浸れるのは、コロナ禍が続く今だからかもしれない。

昨年から自粛生活が続き、変化の乏しい暮らしの中では、ときめくこともないと思っていたが、そうではなく、ほんの小さなときめきが意外と身近にあるのに気づかされた。

川べりを散歩していれば、下から見上げた橋が青空に映えて美しいのに気づく。テレビの大作ドラマを二十五年ぶりに観れば、新たな感動で胸が熱くなる。短歌を読めば、詠んだひとの思いが、若いときより心に沁みる。

ときめきは若い人たちの特権のように思っていたけれど、そうでもないようだ。

特にどこかへ行かなくても、歳を重ねてからも、ときめくことは出来るとしみじみ思う。気づかないだけで、小さなときめきは身近にたくさんある。長く生きてきた人ほど、ときめきの種のようなものを心の奥に持っている気がする。

小さなときめきを大切に生きてゆきたい。

ずいぶん前になるが、ヨーロッパに旅行したときのこと。たぶんスイスだったと思う。店で綺麗な丸い小箱に入った桜色の岩塩をみつけた。日本とは違った美しい街並みに、心もすっかり華やいでいた。その岩塩の不思議な色の美しさに魅かれ、自分への旅の土産として買った。

帰国後、ほんの少し掌にとり舐めてみると、塩とも思えぬおいしさ、まろやかさ、岩塩を手にとるたびに旅先の美しい光景を思い出した。

旅の思い出の桜色の塩を大切に使っていたが、とうとう箱だけになった。どうにかして手に入れたと思ったが見つからない（今ならネットで簡単なのだが）。いつしかその塩のことは忘れていった。

今年になって、デパートで偶然、桜色の岩塩を見つけた。かつての思い人に会ったような瞬間。家でさっそくガラス製のソルトミルに入れると、岩塩の桜色がひととき美しい。

袋をみると、「三億年もの時を超えて、太古の海水が南米ボリビア・アンデス山脈の大地で育まれた岩塩」とある。

どうしてこのような美しい色になるのか想像がつかないがこれも地球からの贈り物なのだろう。

世界には色々な岩塩があるらしいが、私が旅先で買った岩塩は、地理的にヒマラヤ産かなと想像している。

白い波

徳永 楽遥

「歌ってる？お宅。歌いなさいな」

「歌っていいんですか」

「寝ほけてるよ、この人。じゃ、なにするのよ」

「耳を、歌に傾ける」

「あほんだら！舞台にはステージには赤い血が流れる生身の舟木一夫がいて、その体温をじかに感じるのよ。舟木一夫ワールドにいてよ、彼と同じ空気を吸っている、この空気をカンプメにする人もいるわ。体が腕が動くたびに彼の風が自分に届く、私の髪がフワリと揺らぐの、なんて幸せなことかしら。ファンの花の香りに鼻腔が喜ぶ。アーアー」

ステージ中央に背筋の伸びた変わらぬ舟木一夫の姿。

白のジャケット、黒のスラックス、黒い靴。襟を立てた黒いドレスシャツの胸元に金色のネックレスが輝き揺れる。

左手の親指と残り四本で軽くマイクを挟み、歌いながら腰を屈め、求められる握手を右手で、花束や贈り物も右手で受ける。ステージ上のテーブルに花束の花や、贈り物はファンに見えるように向けて置いていく。

後半に入る。ふいと彼が上手のカーテンの陰に入った。

一瞬後、深紅のジャケットに早変わりして現れる。客席から拍手が起こる。照れて鼻の下をこする。笑いが広がる。

青春学園ソングが続く。おば様方とオタクの喉が渴いた。

「修学旅行」「仲間たち」「君たちがいて僕がいた」

と、両手を上げ演奏を止める。薄暗くなる場内。強いライトに舟木一夫が浮かび上がる。胸の中の空気が抜けていくように体はゆっくりと揺れる。

無伴奏で彼が歌う。

「あかい ゆう」ここまで歌い、客席を見渡す。

破顔一笑、頭上まで上げた右腕を手の平を上にして差し招くように下ろしていく。ライトに白い歯が眩しい。再び歌う。

「あかい ゆう」おば様方が歌う。

右手がリズムをとる。すこしずつ場内に明かりがさしてゆく。

あちらこちらに今にも消え入りそうな波が立つ。

「ひが こうしやを」オタクも歌う。

細々とした波がさざなみとなり、波が波を呼んでいく。

「そめて」ピアノ伴奏が静かに入る。

ステージ中央から上手に向かって彼が動く。左手にあるマイクを客席に向けて。客席は歌う、彼も歌う。

「楡の木蔭に 弾む声」白い大きな三角波が客席に立つ。

「ああ こうこう さんねんせい」白く大きな波が渦を巻く。下手に移動する。ファンの歌声がしみて目をしばたたく彼。

「クラス なかまは いつまでも」

力強く両手を上げると、演奏が弾けたように始まり、女性コーラスが盛り上げる。

舟木一夫が「高校三年生」を熱唱する。

座席番号 1階14列10番

新緑の横根山と井戸湿原

松本とまと

数年前、五月の最終日曜日に、鹿沼市西大芦地区活性化事業推進委員会主催の、横根山「新緑ウォーク」に参加した。

古峯ヶ原神社の駐車場に八時半に集合、参加者20名に案内世話役が10名の団体だった。9時に係りの乗用車に分乗し、神社の奥へ進んでゆく。山道を登るから、まるでいるは坂である。カーブごとに番号があり、上に行くほど数字が大きくなっていく。かなり登って峠と思われる地点で左折した。直進すれば足尾、左折の先は粕尾の標識があった。

左折した辺りから、赤い山ツツジの群落でまず感動した。天気が良く、真っ青な空に新緑と赤いツツジ、まさに絵のような景色の中を進み、前日光ハイランドロッジに到着下車する。ロッジの周りは、広大な前日光牧場である。ロッジでトイレを済ませ、牧場を眺めつつスタート、15分くらいで標高1373mの横根山山頂に着いてしまう。初心者でも登山が楽しめるわけである。

少し休憩し、今度は下って行くと間もなく目の前に井戸湿原が現れる。赤い山ツツジにピンクのアカヤシオ、赤紫のトウゴクミツバ等々が咲き乱れ、息を飲む別世界が広がる。木道も整備されていて、尾瀬と全く遜色ないと思える。花の海を進んで行くと、五段の滝になる。ここばかりは、滝には違いないが名前負けの感がしななかつた。

引き返して、井戸湿原を通り抜け、また登って行く。登山というより、山歩きであったが12時前に、象の鼻展望台に着して昼食となった。天気は快晴、展望台から前日光牧場一面が見渡せ絶景だったが、条件が揃えばもっと遠く富士山も見渡せるそうである。

昼食後、牧場添いに下って行くとハイランドロッジに着く。来た車に分乗、古峯ヶ原神社に戻り解散したのが午後一時。実質四時間だが、中身の濃い「新緑ウォーク」だった。

古峯ヶ原神社からの帰路に金剛山があり、五月の最終日曜日は「火渡り祭」となっていた。ついでなので、車を停めて見学することにした。山伏姿の男たちが、積み上げた薪に、火を点け、燃え盛る炎へ経を供える姿は圧巻だった。信者と見物客が押し寄せていたが、並んで火渡りをさせて貰った。足の裏から熱いエネルギーが注入されたようで、不思議と山を歩いた疲れは感じなかった。

「新緑ウォーク」は、秋には「紅葉ウォーク」で実施され、ずっと続いている。私は、春も秋も参加してきたが、コースは同じでも、毎回景色が違う。毎年新しいときめきが感じられてたまらない。

一度、春の連休に友人と行ったら、桜が満開であった。標高が中禅寺湖辺りと同じと聞いて納得した。ごく近くに、ときめく別天地があるのだから幸せである。また横根山に行けるよう、丈夫でいなければと思っている。

銀座

国母 仁

初めて有楽町駅に降り佇む。

有楽町は大きなビル群が乱立しているから都会の中の都会と言う雰囲気を感じ出している。右手に地図を持ち銀座八丁目をめざす。昨夜は羽田空港の近くの長兄のアパートに泊めてもらった。兄は町工場に勤めている。

銀座四丁目にたどり着く。裕次郎の映画に出てくる銀座通りを歩いているだけで都会人になったような錯覚に陥った。

目当てのレストランに辿り着く。今日はレストランの三階で入社式が行われるのだ。入社式には全国から五十人くらいの若者が集まった。女性も五、六人いた。殆どコック志望と思っていたらウェーター志望もかなりいたのには驚いた。

式は社長の挨拶の後、フライパンをふる実技が行われた。フライパンの中には塩が入っている。先ず、先輩のコックさんが手本を見せてくれた。単に振っていたので出来そうな気がしたが、振るタイミングが合わず見事に塩をまき散らしてしまった。やはり見た目と実際の感覚の違いに愕然とする。私の隣にいたT君も同じようにまき散らしてしまった。これを機に言葉を交わすようになった。

「オレ、自信があったのだが上がってしまったのかな」
めげている様子はなかった。

式の後、日本橋の茅場町にある寮に案内される。露地裏の

日が差さない細長いビルだった。二人一部屋があてがわれた。最初に言葉を交わしたT君と同部屋になる。部屋に入るとT君は怒涛のように、

「オレ、将来は田舎に帰ってレストランを開くのが夢なんだ」と具体的に計画を晒し出してきた。

私はまだこの時点では陽炎のようなおぼろげな具体性のない夢しか抱いてなかった。ただ、もし店を開くことが出来たら絶対に都会と決めていた。都会にはゴロゴロと夢の塊が転がっているような気がしたから。

部屋には布団が送られてきていた。真新しい布団の中に田舎で使っていた枕が入っていた。枕を手にし、何故か涙がとめどなく溢れ出てきた。ホームシックにかかったのだと自覚した。

三週間の研修が終わり各店舗に配属される。私は八丁目のレストランに決まった。店の方針で一度はウェーターをさせられることになっているとか。半年間ウェーターを経験してから厨房に回されることになっている。選択肢には銀座でウェーターをすることはなかったはずだがポジティブに捉えることにした。ウェーターになって初めて接したお客さんは、テノール歌手の藤原義江氏でした。あまりの緊張に運んで行った水をこぼしてしまった。

「君は新人だね。頑張りなさい」

声をかけられ更に身体が固まってしまった。
銀座にはときめきの花が咲き乱れている。

平成二九年九月九日

土曜日の昼下がり

三上 博史

もう三年以上前の話のだが、その日は九月に入ったというのにまだまだ暑かったことを憶えている。最高気温は間違いないく三〇度を超えていた。お昼を食べて、いつものように自分の部屋に戻りテレビをつけた。何を観ていたか忘れたが、しばらくすると眠くなりテレビを消して昼寝時間に入った。

どれくらい眠っただろうか。いきなりケータイが鳴った。着信音は大阪に嫁いだ娘からのものだった。半分寝惚けていた。電話の用件は、妊娠したということだった。つわりがひどく、まだ安定期に入っていないので流産の可能性もあるから手放しでは喜べない。近々行く予定だった宮古島への新婚旅行はキャンセルすることにした。そんなことを落ち着いて話しながら電話は切られた。

暑さで寝汗のようにびっしょり汗をかいていたことに改めて気がついた。寝惚け状態は徐々に収まってきて、娘の初めてとなる妊娠のことが次第にしっかりと現実味を帯びてきた。そして何ともいえない気持ちになってきた。誰に知らせる訳でもない、まだ生まれていないのだから。何をやる訳でもない、まだ何もできないのだから。でもじっとしていられなかった。車庫から自分の車を出して田舎道を訳もなく運転することにした。以前から、天気の良い休日に無聊を託つ時は、カー

ラジオを聴きながらこういう一人ドライブを楽しんでいたのである。信号機もあまりない、対向車も少ない農道をひたすらのもんびり走る。今回はラジオをつけず、娘の妊娠のことを考え続けながらずっとハンドルを握っていた。

あの小柄な娘が子供を産むのか。心配性で石橋を叩いても渡りたがらない性格だが、人並みに結婚して二児の母となる。当たり前のことだが、当たり前でないような不思議な思いになった。

それから娘の方も妊婦として次第に落ち着いてきた。安定期に入ると女の子だと性別も分かった。私の方も遠く離れて住む娘夫婦のことを思いやりながら、孫が誕生する楽しみも感じ始めてきた。

翌年の五月が出産予定日。生まれたらすぐにクリニックへ駆けつけようと心の準備は万端だった。さらに欲が出て、その後は月に一回大阪まで孫の顔を見に行こうかと考え始めた。

そして予定より少し早めの四月に誕生。もちろんすぐに駆けつけたが、その後毎月一泊で孫の顔を見に大阪へ行くことも実行した。娘夫婦の了解もとっていたし、さほど迷惑がっていないかっと思う。娘のために、東京駅で必ず関東の匂いがする駅弁をお土産に買って行った。

昼寝からいきなり起こされて妊娠を告げられた娘からの電話、それを知った時の汗ばむ暑さ、このことが何度も思い起こされる。定年後の人生の景色が少し変わり始めた平成二九年九月九日土曜日の昼下がりをおぼろげに覚えている。